

福岡市埋蔵文化財年報 VOL.24

—平成21(2009)年度版—



2010

福岡市教育委員会

序

福岡市では、文化財保護法の趣旨に基づき、埋蔵文化財の適切な保存と活用を図ることを目的として、公共及び民間の各種開発事業の事前審査、記録保存のための緊急調査、また重要遺跡確認調査等を実施しております。

本書は、平成21年度における埋蔵文化財保護行政の概要を報告するものです。開発事業に起因する事前審査及び緊急調査件数は、平成12年度をピークに減少しましたが、平成15年度から一転して増加に転じ、平成18年以降微増・微減を繰り返す傾向にあります。平成21年度の事前審査件数は平成20年度に比べ、公共事業は増加、民間事業は若干の減少がありました。これは21年度を通じてついに劇的な回復を見なかった経済状況を反映したものと考えられます。ただ、窓口照会はやや減少したもののFAXなどの照会は若干ですが増加となりました。景気回復に備えた助走が始まっているのかもしれません。今後とも埋蔵文化財保護業務について適正で迅速な対応を進めたいと思います。

本書が文化財保護に対するご理解の一助となり、また学術資料として活用いただければ幸いです。

平成22年11月30日

福岡市教育委員会
教育長 山田 裕嗣

例 言

- ・本書は、埋蔵文化財第1.2課、文化財整備課が平成21年度に実施した各種開発事業に伴う事前審査と発掘調査の概要及び本報告、ならびに新指定文化財の概要について収録したものである。
- ・本書に記載ある21年度調査のうち、調査番号0907調査は、この年報をもって本報告とする。その他については別途、本報告書が刊行される予定であり、刊行予定年度については各概要の文末に記載している。また、本報告が未完であったカルメル修道院内遺跡第1.2次調査(7307.7610)の報告を収録した。
- ・Vの各調査の概要及び調査報告は各調査担当者が分担執筆した。VIについては文化財整備課(三木隆行、水野哲雄)が執筆した。
・上記以外の執筆並びに本書の編集は宮井善朗が担当した。

表紙写真：金武青木A遺跡現地説明会風景と那珂遺跡群125次調査出土巴形銅器鉢型

目 次

I	平成21年度文化財部の組織と分掌事務	2
II	開発事前審査	3
III	発掘調査	8
IV	公開活動	12
V	平成21年度発掘調査概要および報告	14
VI	平成21年度新指定文化財	83
	報告書抄録	89

I 平成21年度文化財部の組織と分掌事務

文化財部の組織と分掌事務

文化財部 54
 文化財管理課 9
 管理係（事6・文1） 文化財指定、史跡の保存・整備
 主査（文1） 文化財資料室開設準備

文化財整備課 8
 整備第1係（文2事1） 文化財指定、史跡の指定・保存・整備
 整備第2係（文2事1） 福岡城及び鴻臚館跡の調査・整備

課長（学1） 1
 （学1） 文化財調査等

埋蔵文化財第1課 15
 事前審査係（文4） 公共及び民間開発事業に係る事前審査
 主任文化財主事（文1）
 調査係（文6） 課の庶務、第1・2課の予算・決算・東部地区の埋蔵文化財の発掘調査及び保存
 主任文化財主事（文3）

埋蔵文化財第2課 13
 調査第1係（文4） 国庫補助事業総括・課の庶務・西部地区の埋蔵文化財の発掘調査及び保存
 主任文化財主事（文2）
 調査第2係（文4） 九大移転地及び周辺地区に係る埋蔵文化財の発掘調査及び保存
 主任文化財主事（文1）
 主査（文1） 今宿古墳群保存担当

埋蔵文化センター 7
 運営係（文3事2） 施設の管理運営、考古学的資料の収集・保存・展示
 主任文化財主事（文1）

事：事務職 文：文化財専門職 学：文化学芸職

埋蔵文化財第1、2課の職員構成（職員はすべて文化財専門職）

◇埋蔵文化財第1課長 濱石哲也	◇埋蔵文化財第2課長 田中壽夫
調査係長 米倉秀紀	調査第1係長 杉山富雄
係員（文化財主事） 榎本義嗣 久住猛雄 屋山 洋	係員（文化財主事） 加藤隆也 板倉有大
主任文化財主事 小林義彦 今井隆博 松尾奈緒子	主任文化財主事 松村道博 山崎龍雄 長家 伸
事情審査係長 宮井善朗	調査第2係長 吉留秀敏
係員（文化財主事） 嵩富士寛 阿部泰之 木下博文	係員（文化財主事） 森本幹彦
主任文化財主事 加藤良彦	主査（今宿古墳群担当） 普波正人

II 開発事前審査

1. 概要

本市では、土木工事等の各種開発事業に係る埋蔵文化財の取り扱いについて、開発事業計画地における埋蔵文化財の有無を確認した上で、保存に係わる協議等を行っている。

公共事業については、関係機関・都局に次年度の事業計画の照会を行い、埋蔵文化財の保存上問題になると判断される事業についてはその取り扱いについて協議を行っている。

民間の開発事業については、都市計画法に基づく1,000m以上の開発事業、建築基準法に基づく建築事業等を対象として事前協議を求めている。また建築等の計画策定段階での照会にも窓口やファックスで応じ、埋蔵文化財の保存上の措置について必要な指示を行っている。

2. 平成21年度の事前審査

平成21年度の開発事業等に伴う事前審査件数は、表1のとおりである。昨年に引き続き景気動向を反映して、民間事業は漸減傾向にあり、特に実際に申請が行われる件数に顕著に反映されている。ただ、照会件数については減少の程度はやや鈍くなっているが、ファックス照会のみを見れば昨年度より増加している。本格的な景気の回復に備えた事前調査が活性化の兆しを見せているものか。

申請内容

公共事業に伴う依頼228件の内訳は表3のとおりである。これを事業者別に見ると国機関46件（20%）、うち国土交通省17件、8%、福岡県9件（4%）、福岡市169件（74% 内1件は公社）、その他4件（2% 国立大学法人1件、九州旅客鉄道3件）であり、福岡市各部局事業が大半を占める。事業別に見ると道路42件（18%）、水道など69件（30%）、公園17件（8%）、空港関係21件（9%）、学校関係7件（7%）、その他建物12件（5%）、そのほかの開発が14件（6%）ある。このほかに公有財産の売却や、これに関連した所管換え、物納物件等の土地調査にかかる事前審査依頼が37件（16%）があるのが特徴的である。また空港関係が昨年には統一割合を占めており、今後増加するものと考えられる。なお事業照会の内訳は上下水道720件（47.4%）、道路177件（15%）、学校95件（8%）の上位3事業は昨年と変わらないが、昨年度より戸建住宅等の建築にともなう公共污水栓の設置工事が継続的に通知されることになったため、水道等の割合が増加している。以下住宅を含めた建物54件（5%）、公園46件（4%）、と統き、昨年から増加の傾向を見せていました空港は18件（2%）を占めた。これ以外の事業は1%以下である。

民間事業924件の届出内容は、届出者別に見ると個人432件（47%）、一般企業293件（32%）、個人事業者181件（19%）、法人等の民間事業者21件（2%）となっている。全体の三分の二を個人および個人事業者が占めている。事業別では個人住宅427件（46%）、共同住宅122件（13%）、これに戸建住宅や宅地造成など他の住宅関連事業をあわせると全体の78%を住宅が占めている。事業者別とあわせてみると、個人住宅をはじめとした小規模住宅の比率が高い。住宅以外の事業としては店舗45件（5%）、その他の建物（事務所、診療所、福祉施設、倉庫等）58件（6%）となっている。また、区画整理計画地の事前の調査依頼が12件あったのが今年の特徴といえようか。なお、土地取引に伴う審査依頼は50件（5%）であった。

届出地を区別に見ると早良区272件（24%）が最も多く、博多区230件（20%）、西区201件（17%）がこれに次ぐ。以下南区161件（14%）、城南区140件（12%）、東区94件（9%）、中央区22件（2%）となっている。

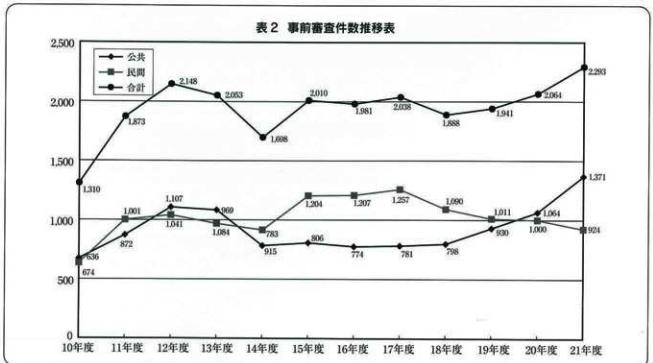
* 国立大学法人は法93条対応だが、機関の性格上、および福岡市での担当分担の経緯上公共事業にカウントする。

**「九州旅客鉄道株式会社」は政令で定める國の機関等に該当（法94条対応）

表1 平成10~21年度事前審査件数推移

事業	内 訳	10年度	11年度	12年度	13年度	14年度	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度
		事業照会審査件数	674	872	1,107	1,084	783	671	662	668	665	769	862
公共 申請件数	審査件数	674	872	1,107	1,084	783	806	774	781	798	930	1,084	1,371
	窓口照会件数	2,832	3,597	4,540	4,662	4,292	5,842	6,126	8,309	7,226	6,144	5,555	
民間 FAX照会件数	書類照会件数	524	1,499	2,296	3,354	3,990	3,537	3,729					
	照会件数計	2,832	3,597	4,540	4,662	4,816	7,341	8,422	11,663	11,216	9,681	9,284	
申請(審査)件数	636	1,001	1,041	969	915	1,204	1,207	1,257	1,090	1,011	1,000	924	
公・民審査件数計	1,310	1,873	2,148	2,053	1,698	2,010	1,981	2,038	1,888	1,941	2,064	2,295	

表2 事前審査件数推移表



指導内容

公共、民間各事業の事前審査の結果、事業者に指導した内容は表3のとおりである。次年度継続、取り下げを除くと審査件数は1,284件である。総括的に見ると書類審査での回答951件(74%)、以下踏査22件(2%)、試掘311件(24%)で、審査結果は開発同意213件(17%)、慎重工事897件(70%)、工事立会116件(9%)、発掘調査52件(4%)、要協議(設計未定、売却予定で跡地ありなど)6件である。

試掘調査・確認調査

包蔵地内で行われる確認調査、包蔵地外で行われる試掘調査（以下試掘調査と総称する）は総計345件で、試掘した遺跡は124遺跡である。また包蔵地外の試掘のうち隣接地は59遺跡であった。試掘件数は昨年に比べて微減であるが、昨年度からの傾向として、とくに民間事業は届出件数の減少の割には試掘が減っていない。これは戸建住宅でも杭打ちや表層、柱状改良が行われる傾向がさらに進んでおり、試掘をする案件が増加していることを物語っている。

各区分、事業別の内訳は表4のとおりである。10件以上試掘した遺跡としては有田遺跡群(17件)、那珂遺跡群(12件)があげられ、比恵遺跡群は10ヶ所に届かなかった(6件)。昨年度から減少が著しい博多遺跡群での試掘は4件と昨年(8件)からさらに落ち込んだ。いまだ都心部の開発が復調するまでは至っていない。

表3 平成21年度事前審査内訳

区名	事業	審査種別(書類審査・現地踏査・試掘調査)										みた判断指標の結果			別区審査件数 (*)	照会件数 (**)			
		開発同意		慎重工事		工事立会		発掘調査		協議		審査取り下げ	民間別会計						
		書類	踏査	試掘	書類	踏査	試掘	書類	踏査	試掘	書類	踏査	試掘						
東	公共	7		3	1	2	1	2					1	17	49	254			
	民間	16	4	38	1	10	4		2	2				77	1,388				
博多	公共	5		31	2	7	1			1	1	8	56	111					
	民間	5	9	87	1	36	9	7	5	10	2		3	174	1,629				
中央	公共	3	1	5			1						6	16	22	119			
	民間	1		1	2	1	1						1	1	1	1,543			
南	公共	2	1	4		3	2						1	1	3	194			
	民間	10	1	15	68	1	30	4	3	5	4		3	144	1,513				
城南	公共	2	2	1	1	1	1						4	10	111				
	民間	11	12	73	26	3	2	1	1	1	1	2	130	140	880				
早良	公共	3	1	18	1	6	16	1	1	1	1	6		55	227				
	民間	10	10	122	5	29	13	9	7	6	1	4	217	217	1,278				
西	公共	2		13		7	2					0	1	25	201	127			
	民間	20	1	15	90	3	27	5	5	2	6	1	1	176	1,028				
小計	公共	22	2	3	76	2	21	30	3	2	0	0	2	0	1	28	1	228	
	民間	73	2	66	480	11	159	39	1	26	21	0	29	2	0	0	7	924	
経済振興局(**)		45		43		3													
観光文化内閣(市町村)(市町村全件)																			
道下下水道局(**) 公共下水道 (市町村全件2件)				105		12											総計		
合 計		140	4	69	740	33	180	84	4	28	21	0	31	2	1	3	35	9	1,328

(*) 他の公共は事前照合会員。民間は窓口およびFAX問合の合計(小計)には不明2件を含む。
(**) 市町村における観光文化内閣10件が一括依頼されたもの。実際内閣課(整備課担当)を除く他の審査結果の内訳のみ示す。
(***) 道下下水道局の公共下水道が複数件が一括提出されるため、複数件と、審査結果の件数のみを示す。

窓口等賜会

民間業者等による窓口における埋蔵文化財の有無に係わる照会等は5,555件、ファックスでの照会は3,729件、民間照会はあわせて9,284件である。昨年よりやや減少しているが、ファックス照会のみを見ると昨年より増加している。各区別の内訳は表3のとおりで、城南区が若干少なく1,000件を割っているが、他はほとんど同規模の照会が見られた。またファックス照会では、包蔵地外が2,669件(72%)、包蔵地内が813件(22%)、隣接地が247件(6%)であった。

3. 埋蔵文化財包蔵地の改訂

試掘調査や踏査、また発掘調査などの結果に基づき、24遺跡で埋蔵文化財包蔵地の範囲改訂を行った。平成21年度に新たに発見、登録されたのは3遺跡である。たまたま3件とも佐賀県境に近い背振山塊中の遺跡の登録となつた。うち2件は佐賀県による中世山城悉皆調査によって発見された山城が、福岡市側にも広がることが確認されたものである。遺跡の範囲拡大は5件、縮小は12件であり、7件で隣接地の解除を行った(縮小、隣接解除は重複あり)。包蔵地の改訂作業は実際に近い分布地図の作成に不可欠であり、とくに遺跡が認められない範囲を除くし、包蔵地範囲を確定する作業は事前審査業務の効率化にもかかわってくる。今後は範囲確認を見えた戦略的な試掘も考慮していく必要があろう。

表4 試験調査件数集計

東区 26件

試験結果と指示事項

指示事項（包囲地内）					指示事項（包囲地外・隣接）				
小計	債務工事	工事立会	発掘調査	小計	債務工事	工事立会	発掘調査	開免同意	
遺構あり	8	3	1	4	0				
遺構なし	14	14			4	1			3
内・外各小計	22				4				
合計	26								

公・民、事業別

	道路	空港	住宅	公園	水道、電気等	農業関連	売買	その他
公共事業	遺構あり	4	1		3			
11 遺構なし	7	2				1		
	個人住宅	共同住宅	戸建住宅	店舗	その他建物	造成など	売買	その他
民間事業	遺構あり	4						
15 遺構なし	11	1			2			1

博多区

76件（有無の確認ができず、再試験予定の1件を含む）

試験結果と指示事項

指示事項（包囲地内）					指示事項（包囲地外・隣接）				
小計	債務工事	工事立会	発掘調査	小計	債務工事	工事立会	発掘調査	開免同意	
遺構あり	21	7	4	10	2		2		
遺構なし	40	39	1		12	3			9
内・外各小計	61				14				
合計	75								

公・民、事業別

	道路	空港	住宅	公園	水道、電気等	農業関連	売買	その他
公共事業	遺構あり	3	1	1	1		1	
6 遺構なし	3		1		1	1		
	個人住宅	共同住宅	戸建住宅	店舗	その他建物	造成など	売買	その他
民間事業	遺構あり	20	3	10	1	2	1	3
60 遺構なし	49	14	10	6	8		11	

中央区 3件

試験結果と指示事項

指示事項（包囲地内）					指示事項（包囲地外・隣接）				
小計	債務工事	工事立会	発掘調査	小計	債務工事	工事立会	発掘調査	開免同意	
遺構あり	0				0				
遺構なし	1	1		2				2	
内・外各小計	1			2					
合計	3								

公・民、事業別

	道路	空港	住宅	公園	水道、電気等	農業関連	売買	その他
公共事業	遺構あり	0						
1 遺構なし	1					1		
	個人住宅	共同住宅	戸建住宅	店舗	その他建物	造成など	売買	その他
民間事業	遺構あり	0						
2 遺構なし	2			1			1	

南区 52件

試験結果と指示事項

指示事項（包囲地内）					指示事項（包囲地外・隣接）				
小計	債務工事	工事立会	発掘調査	小計	債務工事	工事立会	発掘調査	開免同意	
遺構あり	6	1	2	3	0				
遺構なし	28	28			18	7			11
内・外各小計	34				18				
合計	52								

公・民、事業別

	道路	空港	住宅	公園	水道、電気等	農業関連	売買	その他
公共事業	遺構あり	0						
41 遺構なし	4					2		
	個人住宅	共同住宅	戸建住宅	店舗	その他建物	造成など	売買	その他
民間事業	遺構あり	6	2	2	2			
48 遺構なし	42	22	22	7	11	11		7

城南区 48件

試験結果と指示事項

指示事項（包囲地内）					指示事項（包囲地外・隣接）				
小計	債務工事	工事立会	発掘調査	小計	債務工事	工事立会	発掘調査	開免同意	
遺構あり	3	2		1	1	1			
遺構なし	28	28			16	5			11
内・外各小計	31				17				
合計	48								

公・民、事業別

	道路	空港	住宅	公園	水道、電気等	農業関連	売買	その他
公共事業	遺構あり	0						
41 遺構なし	4				1		2	1
	個人住宅	共同住宅	戸建住宅	店舗	その他建物	造成など	売買	その他
民間事業	遺構あり	4	2		1		1	
44 遺構なし	40	22	4	6	2	1	5	

早良区 63件

試験結果と指示事項

指示事項（包囲地内）					指示事項（包囲地外・隣接）				
小計	債務工事	工事立会	発掘調査	小計	債務工事	工事立会	発掘調査	開免同意	
遺構あり	17	6	11	0	0				
遺構なし	34	36	1		9	1			8
内・外各小計	54				9				
合計	63								

公・民、事業別

	道路	空港	住宅	公園	水道、電気等	農業関連	売買	その他
公共事業	遺構あり	4	2		2		1	
13 遺構なし	9		2				6	1
	個人住宅	共同住宅	戸建住宅	店舗	その他建物	造成など	売買	その他
民間事業	遺構あり	13	1		4	2	1	3
50 遺構なし	37	17	13	2	2		5	

西区 77件

試験結果と指示事項

指示事項（包囲地内）					指示事項（包囲地外・隣接）				
小計	債務工事	工事立会	発掘調査	小計	債務工事	工事立会	発掘調査	開免同意	
遺構あり	15	3	1	11	5	1		3	1
遺構なし	34	34			23	6			17
内・外各小計	49				28				
合計	77								

公・民、事業別

	道路	空港	住宅	公園	水道、電気等	農業関連	売買	その他
公共事業	遺構あり	3	1		2		0	
22 遺構なし	19	2						8
	個人住宅	共同住宅	戸建住宅	店舗	その他建物	造成など	売買	その他
民間事業	遺構あり	17	7	2	1		1	
35 遺構なし	38	11	7	2	3	1	9	4

全区合計 346件

試験結果と指示事項

指示事項（包囲地内）					指示事項（包囲地外・隣接）				
小計	債務工事	工事立会	発掘調査	小計	債務工事	工事立会	発掘調査	開免同意	
遺構あり	70	16	14	40	8	2	0	5	1
遺構なし	182	180	21	0	84	23	0	0	61
内・外各小計	252				92				
合計	344								

公・民、事業別

	道路	空港	住宅	公園	水道、電気等	農業関連	売買	その他
公共事業	遺構あり	14	3	0	6	0	3	1
61 遺構なし</								

III 発掘調査

1. 平成21年度の発掘調査

市域内で実施された本年度の登録発掘調査件数は、表9に示したように16~20年度からの継続事業が9件、21年度新規事業が41件の計50件である。このうち4件が平成22年度に継続した。この発掘件数には文化財保護法第93、94条に基づく記録保存のための発掘調査44件のほか、重要遺跡確認調査3件（0935.0936.0941）、史跡整備工事（史跡の災害復旧工事1件を含む）に伴う調査2件（0906.0937）、市史編纂委員会が行った、文化財保護法第92条対応の学術調査1件（0940）のあわせて6件も含んでいる。

50件の発掘調査面積は48,278m²で、前年度に比べ約3,909m²増加した（表6・表7右）。公民別では公共事業が32,630m²（うち圃場整備9,774m²）、民間事業が15,649m²であり、公共が68%を占める。民間事業面積は前年比約40%増加し、公共事業は約15%の減少となった。個々の発掘調査の面積は、100m²以下が9件、101~300m²が15件、301~500m²が6件、501~1,000m²が7件、1,001m²~10,000m²が12件、10,000m²以上の調査は1件である。今年度は圃場整備、区画整理等の調査が重なり、1,000m²以上の調査が25点を占める。その分300m²以下の小規模調査が24件（48%）で、昨年の37件（55.2%）より減少している。本調査で調査面積が最も狭いのは継続分を除いて博多遺跡群第189次（0907）で、共同住宅建築に伴う24m²の調査であった。最も広いのは千里遺跡第1次（0913）の10,621m²である。昨年度から年度を越える調査は各年の調査面積を算出しており、平均は965.6m²（20年度661m²）で昨年より増加している。公民別では民間745m²、公共1,125m²であり差が大きい。また博多遺跡群、箱崎遺跡などでは構造面が複数あり、これを面ごとに調査しているため、実際の発掘面積は増加する。

調査地点を区別に見ると（表7中）、西区が最も多く14件（20年度17件）、博多区13件（同23件）、早良区11件（同10件）、東区6件（同9件）、南区4件（同5件）、中央区1件（同1件）、城南区0件（同1件）と続く。昨年と比べると博多以外はほぼ横ばいで、昨年に引き続き総件数の減少は博多区の減少が引き起こしていることがわかる。1件差とはいえ、博多区が調査件数首位をあけわたすのは、昭和63年以來21年ぶりのことになる。福岡市の場合都心の開発の動向は、文化財から見れば博多区に反映されるので、この点からも不況の影響を如実に見て取れる。また博多区では博多遺跡群が2件（内1件は史跡地内の確認調査、昨年7件）、比恵遺跡群が1件（昨年5件）と、都心部の調査がさらに減少している。西区は伊都地区区画整理事業、九州大学移転事業など大規模開発に伴う継続調査が大部分を占める。早良区では田代遺跡群のほか田村周辺の調査（田村遺跡、辻ノ花遺跡）が目立っている。予算別（表8）では、国庫補助を受けた事業が22件（国補15件、国補+民間受託3件、国補+令達4件）、公共受託事業が6件、民間受託事業が11件、令達事業が9件である。昨年と比べると補助事業以外の事業がかなり減少している。とくに民間受託事業の減少が著しい。理由は繰り返すまでもない。

以上のように21年度は20年度より発掘調査件数が減少しており、若干余裕を持った調査、整理・報告ができたことは事実である。しかし、総面積の増加に見られるよう、大規模調査が一定件数あり、年間を通して現場にはりつく職員も相当数いた。また小規模調査といえども協議等事前の準備が大幅に省力化できるわけではない。さらに小規模事業者ほど時間的に逼迫している例が多く、届出から調査着手までの期間に余裕がないことが多いため、必ずしも事前審査、本調査それぞれの担当職員の負担が軽減されているとはいえない。またこのような状況は一時的なものと考えられるため、現体制の大変更等には慎重であらねばならない。

21年度の調査一覧は前年度からの継続分も含め表9に示した。

表5 発掘調査件数の推移 ()前年度からの継続件数

事業	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度
民 間	47(1)	67(1)	52(3)	52(3)	44(4)	38(0)	21(6)
圃場整備	2(0)	4(0)	4(2)	1(1)	0(0)	0(0)	4(0)
公 共	27(4)	28(5)	27(6)	27(6)	33(4)	29(4)	25(3)
合 計	76(4)	99(6)	83(11)	80(11)	77(8)	67(8)	50(9)

表6 発掘調査面積の推移 (m²)

事業	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度
民 間	13,281	24,556	12,265	15,184	17,651	11,190	15,649
圃場整備	23,937	42,152	56,000	21,000	0	0	9,774
公 共	37,919	43,568	22,078	56,530	48,729	33,099	22,856
合 計	75,137	110,276	90,973	92,714	66,380	44,289	48,278

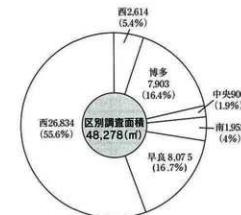
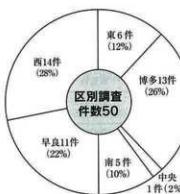


表7 発掘調査内訳

表8 平成21年度発掘調査総括表

区分	事業別	調査費用						県教委 民間	総計	
		令達	受託	補助事業			市単費	小計		
				補助	補助+民受	補助+令達				
東	公共	0	2	0	0	0	1	3	6	
	民間	/	1	1	1	0	0	3		
博多	公共	1	2	1	0	0	0	4	13	
	民間	/	4	3	2	0	0	9		
中央	公共	0	0	1	0	0	0	1	1	
	民間	/	0	0	0	0	0	0		
南	公共	1	0	0	0	0	1	2	5	
	民間	/	2	1	0	0	0	3		
城南	公共	0	0	0	0	0	0	0	0	
	民間	/	0	0	0	0	0	0		
早良	公共	2	0	0	0	0	2	0	11	
	民間	/	2	5	0	0	0	7		
西	公共	5	2	2	0	2	0	11	14	
	民間	/	2	1	0	0	0	3		
小計	公共	9	6	4	0	4	2	25	50	
	民間	/	11	11	3	0	0	25		
合 計		9	17	15	3	4	2	50	0	

表9 平成21年度調査一覧（前年度からの継続含む）

調査番号	道路名	次数	地点	区	所在地	調査原因事業者	予算額	申請面積(㎡)	調査面積(㎡)	内訳	調査開始日	担当者番号	責任者番号	連絡略号
0451	元岡・堀原道路群	42	西	大字元岡字二又	学校建設 国立大学法人	公受	2,750,000	800 (8000)	2008/10/1 2009/6/30	吉留	14-1-18	MOT		
0763	元岡・堀原道路群	52	西	大字元岡字二又	学校建設 国立大学法人	公受	3,000.0	1600 (3800)	2008/1/21 2010/3/11	常松	14-1-18	MOT		
0827	久保園道路	4	博多	東平尾(福岡空港内)	空港整備 九州地方整備局	公受	7,100.0	2933 (6000)	2008/7/18 2010/8/27	池崎	19-1-161	KBZ		
0833	高畠道路	20	博多	板付6丁目1-1	警察官署建設 九州地方整備局	公受	3,715.0	2864 (5067)	2008/8/18 2009/8/2	小林	19-1-93	TKB		
0851	蒲田木々元道路	3	東	蒲田木2丁目 203番1他	事務所・倉庫等一般企業	民受	1,400.0	353.3 (1360)	2008/12/15 2009/4/30	加藤 良雄	20-2-530	KMT		
0855	大塚道路	17	西	今宿大塚	土地整理整備 福岡市住宅都市局	令達	5,200.0	1300 (5200)	2009/2/9 2009/8/19	森本		OTS		
0857	山王道路	6	博多	山王1丁目	共同住宅	民受	577.2	145 (580)	2009/2/16 2009/4/23	木下	20-2-538	SNN		
0860	博多道路群	188	博多	冷泉町86.87.88.2	共同住宅	民受	148.0	37.3 (112)	2009/2/24 2009/4/15	星山	20-2-580	HKT		
0862	谷道路	3	西	字今宿町地内	土地整理整備 福岡市住宅都市局	令達	250.0	9 (227)	2009/3/2 2009/4/9	森本		TAN		
0901	那珂道群	124	博多	那珂6丁目310	個人住宅 個人	国補	79.5	98.9	2009/4/1 2009/5/23	久住	19-2-462	NAK		
0902	宿毛青木道路	7	博多	大字東平尾 677-2,678-2	給排水施設 一般企業	民受	390.0	390.0	2009/4/20 2009/5/27	櫻本	20-2-733	MAK		
0903	上月隈道路	4	博多	月隈3丁目27	福岡市民局 公民館	令達	890.0	757.7	2009/4/16 2009/7/3	本田	20-1-42	KTG		
0904	坂庭道路	2	東	香椎駅東1丁目	道路建設 九州地方整備局	公受	660.0	536.0	2009/4/16 2009/7/15	佐藤	19-1-1	SKT		
0905	松本道路	4	早良	早良3、4丁目地内	園芸整備 福岡市農林水産局	国補	190,000.0	3518 (5900)	2009/4/15 2010/10/5	長友	19-1-38	MKD		
0906	福岡城跡	61	酒粕路	中央城内1丁目1	史跡整備 福岡市文化整備会 (実施)	国補	900.0		2009/4/1 2010/3/10	吉武		FUE		
0907	博多道路群	189	博多	冷泉町524	共同住宅 一般企業	国補	76.2	24.0	2009/5/7 2009/5/15	加藤 隆也	20-2-788	HKT		
0908	中村町道路	4	南	若狭1丁目 123-4,128-2	宅地造成 一般企業	民受	424.9	667.0	2009/5/11 2009/7/7	星山	20-2-930	NMM		
0909	金武青木道跡	1	西	大字金武地内	園芸整備 福岡市農林水産局	国補	5,238.0	3,502.0	2009/6/1 2009/12/25	加藤 隆也	19-1-37	KAA		
0910	那珂道群	125	博多	竹下5丁目36	共同住宅 個人事業	民受	205.0	204.9	2009/6/5 2009/7/20	久住	21-2-14	NAK		
0911	飯舎A道路	3	早良	飯舎5丁目16-2	個人住宅 個人	国補	137.9	106.9	09/10/10~7/9 09/10/5~15	榎本	20-2-983	IKR		
0912	田村道路	24	早良	田村4丁目65-7	共同住宅 個人事業	国補	236.5	236.5	2009/6/10 2009/6/30	謹誠	21-2-77	TMR		
0913	千里道路	1	西	大字千里地内	地区土砂整理 一般企業	民受	11,382.5	10,620.8	2009/6/11 2010/3/31	星崎	11-2-676	SNR		
0914	田村道路	25	早良	田村4丁目60-16-5	店舗 個人事業	民受	200	228.3	2009/7/1 2009/7/16	櫻本	20-2-922	TMR		
0915	五十川道路	18	南	五十川2丁目33	道路建設 福岡市道沿下水道局	令達	330.0	238.0	2009/7/1 2009/9/18	本田、 松尾	13-1-77	GJK		
0916	箱崎道路	64	東	箱崎1丁目 2804-2,310	共同住宅 個人事業	国補 国	160.1	209.0	2009/8/3 2009/10/7	星崎	21-2-117	HKZ		
0917	原道路	25	早良	原8丁目 1176-5,1178-20,21	店舗 一般企業	民受	183.1	175.7	2009/8/3 2009/9/8	櫻本	20-2-956	HAA		
0918	田村道路	26	早良	田村1丁目812,811-1	老人ホーム 個人事業	国補	315.0	310.0	2009/8/3 2009/9/18	森本	21-2-54	TMR		
0919	周船寺道路	19	西	大字千里地内	地区土砂整理 一般企業	民受	11,382.5	301.0	2009/6/11 2009/7/31	山崎、 飯田	11-2-676	SSJ		

調査番号	道路名	次数	地点	区	所在地	調査原因事業者	予算額	申請面積(㎡)	調査面積(㎡)	内訳	古墳	調査開始日	担当者番号	相当者番号	審査場所	
0920	女原遺跡	7		西	大字女原地内	土地区域整理 福岡市住宅都市局	令達	2,400.0	2,400.0			2009/6/21 2009/11/9	森本	13-1-233	MBR	
0921	香椎A道路	6	東	香椎2丁目地内	道路建設 九州地方整備局	公受	2,500.0	1,429.0				2009/8/25 2009/12/21	佐藤	19-1-1	KSA	
0922	徳B道路	3		西	大字徳永地内	土地区域整理 福岡市住宅都市局	令達	2500 (3000)	122.0	31.9		2010/3/21	菅波	13-1-233	TOB	
0923	嶺崎道路	65	東	嶺崎3丁目3374-1 ほか	共同住宅 個人事業	国補	130.9	139.2				2009/9/9 2009/10/6	本田	20-2-994	HKZ	
0924	井尻A道路	34	南	井尻4丁目815-1,822	個人住宅 個人事業	民受	432.0	485.0				2009/9/16 2009/10/30	小林	21-2-221	IGB	
0925	有田道路群	233		早良	有田1丁目8-8	個人住宅 個人	国補	137.0	131.5				2009/9/15 2009/10/6	瀬本	21-2-375	ART
0926	南八幡道路	17	博多	元町1丁目7-1	共同住宅 一般企業	民受	130.9	139.2				2009/10/8 2009/11/22	久住	21-2-310	MHM	
0927	有田道路群	234		早良	有田1丁目	公灘整備 福岡市住宅都市局	令達	1070.2	745.5				2009/10/13 2009/11/18	瀬本	20-1-83	ART
0928	辻ノ花道路	1		早良	田代6丁目 183-1,184-1	公園整備 福岡市住宅都市局	令達	152.0	145.5				2009/10/16 2009/11/16	柳本	21-1-92	TZH
0929	金武青木道路	1	西	大字金武地内	珊瑚整備 福岡市農林水産局	国補	8,000.0	547.0				2009/10/13 2010/2/8	加藤 隆也	19-1-37	KAB	
0930	岸田道路	1		早良	早良3、4丁目地内	園芸整備 福岡市農林水産局	国補	5,700.0 (3000)	2207 (2000)				2009/10/27 2010/10/20	長冢	19-1-38	KID
0931	有田道路群	235		早良	有田1丁目32-5,32-14	個人住宅 個人	国補	327.6	270.5				2009/11/19 2009/12/15	瀬本	21-2-535	ART
0932	徳A道路	5		西	大字徳永地内	土地区域整理 福岡市住宅都市局	令達	2,500.0 (5000)	1240 (500)				2009/11/5 2010/4/15	森本	13-1-233	TOA
0933	那珂道群	126	博多	東光寺町1丁目 142-1,142-2	共同住宅 個人事業	国補	90.0	72.0				2010/2/10 2010/3/13	佐藤	21-2-602	NAK	
0934	比佐道路群	119		博多	御井町南4丁目 166-1外	共同住宅 個人事業	民受	212.5	178.5				2010/2/15 2010/3/10	本田	21-2-802	HIE
0935	博多道路群	190		博多	御井町19町	仙台整修 史跡現状復元	国補	56.0					2010/2/16 2010/3/14	大庭		HKT
0936	女原古墳D群	1	西	西区女原地内	確定調査	国補 (重複)	1,620.0	14							MBK-D	
0937	老司古墳	6	南	老司4丁目571-2他	災害復旧 (災害)	灾害復旧	500.0	500.0	1			2010/2/4 2010/3/3	井上		RGK	
0938	井尻B道路	35		南	井尻1丁目7642	個人住宅 個人	国補	503	61.0				2010/3/8 2010/3/29	星山	21-2-776	IGB
0939	周船寺道路	20		西	周船寺1丁目560-1	個人住宅 個人	国補	144.3	170.5				2010/3/20 2010/3/30	瀬本	21-2-656	SSJ
0940	奈砂丘B道路	2	東	大字奈多地内	学術調査 福岡市史跡さんま	市単	55.0						2010/3/15 2010/3/21	大庭 佐藤		NTB
0941	谷上古墳群A群	3	11号填	西	今宿字谷上地内	確認調査	国補 (重複)	224.0	1				2010/3/16 2010/3/30	菅波		TNK-A

※継続事業については平成21年度分の面積で、()内が調査範囲(予定)面積である。

IV 公開活動

市民への公開を目的とした事業として、記者発表や現地説明会、体験学習および福岡市埋蔵文化財調査報告書の刊行等があげられる。平成21年度は3ヶ所の調査に対し記者発表を行い、うち2回の現地説明会を実施した。

また市内小中学校の体験学習の一環として発掘調査や整理作業への参加を受け入れており、平成21年度は室見整理室での整理作業に3校、那珂整理室での整理作業に1校、香椎A遺跡6次調査に1校、徳永B遺跡3次調査に1校、また高畠遺跡20次調査に筑紫丘高校の体験学習を受け入れた。

発掘成果を資料化し、公開・活用に資するための埋蔵文化財報告書刊行は、表11のとおり計41冊が刊行された。

表10 平成21年度福岡市現地説明会・報道発表一覧

番号	調査番号	遺跡名	次	住所	現場担当者	記者発表 現地説明会	見学者(人)	備考
1	0910	那珂遺跡群	125	博多区竹下	久住	2009/8/13	-	巴形銅器の鋲型
2	0909	金武青木A遺跡	1	西区金武	加藤隆也	2009/12/11 2009/12/13	230	陪土城に間違った木簡
3	0906	福岡城跡 (鴻越船跡)	61 (27)	中央区域内	吉武	2009/11/13 2009/11/14	200	港壁館北側の塗地等

表11 平成21年度刊行報告書一覧

集	書名	副書名	取扱い番号	著者
1065	博多134	博多遺跡群第175次調査の報告	0714	田中 寿夫
1066	今宿五郎江8	第12次調査の報告	0655	加藤 隆也
1067	有田・小田部47	第132.137.221.223.228 229.231.232次調査の報告	8749.8804.0549.0565 0814.0816.0848.0858	森本 幹彦
1068	有田・小田部48	有田遺跡群第230次調査の報告	0834	菅波 正人
1069	板付10	環境整備追跡調査 - 淀川の調査 - 東入部遺跡群 第2次調査報告(4)	8866.8950	山崎 純男
1070	入部X III		9168	池田 祐司
1071	笠抜遺跡2・大橋E遺跡7	第3次調査報告、第11次調査報告	2811.2382	星山 洋
1072	香椎A遺跡3	一般国道2号博多バイパス建設工事調査2	0737	濱石 哲也
1073	蒲田水元遺跡2	蒲田水元遺跡2次調査報告	0817	小林 義彦
1074	蒲田部木原10	蒲田部木原遺跡第12次調査報告	0845	長家 伸
1075	コノリ遺跡群4	第6次調査の報告	0819	森本 幹彦
1076	山王4	山王遺跡第5次調査報告	0823	加藤 良彦
1077	四箇古川遺跡1	第3次、第4次調査報告	0764.0843	今井 隆博
1078	田島B 1		7807	力武 卓治
1079	拾六町ツイジ2	拾六町ツイジ遺跡第3次調査報告	0830	山崎 龍雄
1080	田村16	田村遺跡第22次調査、第23次調査報告	0747.0838	山崎 龍雄
1081	市戸戸切通工事に伴う 発掘調査報告書2	戸切通路第3次調査、戸切通路第4次調査 兵庫路第2次調査、戸切通路第2次調査	0828.0829.0839.0847	加藤 隆也
1082	那珂56	那珂遺跡群第114次調査	0414.0627	吉武 学
1083	那珂57	那珂遺跡群第123次調査	0854	本田浩二郎
1084	名島城跡3	第4・5・6次調査報告	0633.0732.0808	榎本 義嗣
1085	野芥大藪2	野芥大藪跡第2次調査報告	0804	山崎 龍雄
1086	博多135	博多遺跡群第172次調査報告	0705	池崎 謙二
1087	博多136	博多遺跡群第182次調査報告	0812	本田浩二郎
1088	博多137	博多遺跡群第183次調査報告	0815	板倉 有大
1089	博多138	博多遺跡群第184次調査報告	0820	木下 博文
1090	博多139	博多遺跡群第185次調査報告	0840	木下 博文
1091	博多140	博多遺跡群第187次調査報告	0842	星山 洋
1092	箱崎39	箱崎遺跡第61次調査報告	0811	今井 隆博
1093	箱崎40	箱崎遺跡第62次調査報告	0825	久住 猛雄
1094	箱崎41	箱崎遺跡第63次調査報告	0826	榎本 義嗣
1095	羽根戸原B1	第3次調査の報告	0810	加藤 隆也
1096	比恵57	比恵遺跡群第14次調査報告	0801	加藤 良彦
1097	比恵58	比恵遺跡群第115次調査報告	0818	長家 伸
1098	比恵59	比恵遺跡群第116次調査報告	0822	山崎 龍雄
1099	ヒワタシ遺跡1	ヒワタシ遺跡第1次調査報告	0841	木下 博文
1100	都地遺跡5	第3次調査報告	0824	今井 隆博
1101	麦野C遺跡7	麦野C遺跡第13次調査報告	0805	小林 義嗣
1102	元岡・桑原遺跡群16	第18次調査の報告2	9946	吉留 秀敏
1103	元岡・桑原遺跡群17	第31次調査の報告	0242	上角 智希
1104	草場古墳群2	第2次調査報告	7320	松村 道博
-	福岡市埋蔵文化財年報VOL.23	平成20(2008)年度版	0809.0834.0835.0846. 0850.0852.0859	宮井 善朗

V 平成21年度発掘調査概要および報告

調査概要および報告は表9の調査番号順に掲載している。また下に五十音順の索引をついた。位置番号は右ページの地図に一致する。なお表9の一覧のうち、0833.0851.0855.0857.0860.0862については今年度に継続したもの、概要是昨年度版（Vol. 23）に報告済みのため、今回は省略する。また各概要・報告中の図「1.調査地点の位置」の（ ）内は、左から福岡市都市計画地図図幅番号・図幅名称・遺跡番号・縮尺である。

発掘調査索引

遺跡名	次数	調査番号	位置番号	遺跡名	次数	調査番号	位置番号
あ 有田遺跡群	233	0925	1	つ 北ノ花遺跡	1	0928	21
有田遺跡群	234	0927	1	ど 徳永A遺跡	5	0932	22
有田遺跡群	235	0931	1	徳永B遺跡	3	0922	23
い 飯倉A遺跡	3	0911	2	な 那珂遺跡群	124	0901	24
井原B遺跡	34	0924	3	那珂遺跡群	125	0910	24
井原D遺跡	35	0938	3	那珂遺跡群	126	0933	24
お 大里遺跡	17	0855	4	中村町遺跡	4	0908	25
か 桜木A遺跡	6	0921	5	奈多移丘B遺跡	2	0940	26
金武青木A遺跡	1	0909	6	は 博多遺跡群	188	0860	27
金武青木B遺跡	1	0929	7	博多遺跡群	189	0907	27
浦川水ヶ元遺跡	3	0851	8	博多遺跡群	190	0935	27
上月隈遺跡	4	0903	9	箱崎遺跡	64	0916	28
き 岸田遺跡	1	0930	10	箱崎遺跡	65	0923	28
く 久保園遺跡	4	0827	11	原遺跡	25	0917	29
こ 五十川遺跡	18	0915	12	ひ 比恵遺跡群	119	0934	30
さ 坂堤遺跡	2	0904	13	ふ 福岡城跡	61	0906	31
山王遺跡	6	0857	14	ま 松木田遺跡	4	0905	32
す 周船寺遺跡	19	0919	15	み 南八幡遺跡	17	0926	33
周船寺遺跡	20	0939	15	女原遺跡	7	0920	34
せ 千里遺跡	1	0913	16	女原古墳群D群	1	0936	35
た 高畠遺跡	20	0833	17	む 廣田青木遺跡	7	0902	36
谷遺跡	3	0862	18	ら 元岡・桑原遺跡群	42	0451	37
谷上古墳群A群	3	0941	19	元岡・桑原遺跡群	52	0763	37
田村遺跡	24	0912	20	ろ 老司古墳	6	0937	38
田村遺跡	25	0914	20				
田村遺跡	26	0918	20				



平成 21 年度発掘調査地点位置図
(番号は索引と一致)

0451 元岡・桑原遺跡群第42次調査 (MOT-42)

所在地 西区元岡字二又
調査原因 大学移転用地造成
調査期間 2004.10.1~2009.6.30

調査面積 800m² (総面積8000m²)
担当者 吉留 秀敏
処置 記録保存

位置と環境 調査地は南に開く谷の開口部の下流側に当たる。現地表の標高は9~14mであり、最終調査面はその3~4m下位となる。42次調査の最終年度となる。

検出遺構 今年度は昨年までの西側自然流路(SD02)全域に分布する遺物群の取り上げ、実測を行い、流路底面での写真撮影、測量を行った。また中央段丘上の掘立柱建物、竪穴住居、柱穴などの調査、記録作業を実施した。

なお、SD01下部埋層中に旧石器時代石器の混入があったため、段丘側を掘り下げ確認調査を行ったが、包含層は未確認であった。

出土遺物 出土遺物としては流路底面に広がる有機質包含層から多量の土器のほか、船形木製品を含む多くの木製品や祭祀土器類、ひょうたんなどが投棄された状態で出土した。また谷部中央にはこうした弥生時代中期の包含層を切って弥生時代後期末の流路が形成され、多くの遺物とともに仿製鏡などが出土した。

42次全体の出土遺物量は総8000箱である。

調査報告書は2012年度以降に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (140 元岡 767 1:8000)



2. SD01最下面調査状況 (西から)



3. 旧石器時代地層調査状況 (南から)

0763 元岡・桑原遺跡群第52次調査 (MOT-52)

所在地 西区元岡字二又
調査原因 大学移転用地造成
調査期間 2004.10.1~2010.3.31

調査面積 1600m² (総面積3800m²)
担当者 吉留 秀敏
処置 記録保存

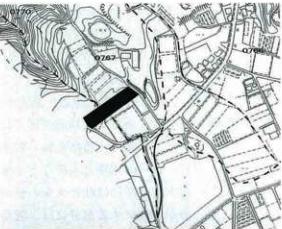
位置と環境 調査地は南に開く谷の開口部の下流側に当たる。現地表の標高は9~14mであり、最終調査面はその3~4m下位となる。52次調査の最終年度となる。

検出遺構 5面の遺構面が検出された。第1面は古代(9~10世紀)で、灌漑用の水路などがあるが、水田面は検出できなかった。第2面は古墳時代後期の水田面で、杭列や水路、畦畔、水田面などが確認された。大畦畔には祭祀土器などが納められていた。第3面は弥生時代後中期から古墳時代前期であり、水路と自然流路、竪穴住居が確認された。第4面は弥生時代中期であり、自然流路内の包含層と、中央台地上の集落遺構を調査した。台地上には掘立柱建物、竪穴住居、柱穴などが多数確認された。さらに第4面の下層から中期より古い段階の包含層が確認され、これを第5面とした。縄文草創期、縄文中期、晚期の包含層が確認された。

出土遺物 出土遺物は第3面の古墳時代大畦畔から土師器、須恵器のほか陶質土器が出土した。第4面の自然流路からは多量の土器、木器、石器が出土しているが、とくに朝鮮半島無文土器の影響を受けた土器や、木製の机脚部、琴板、劍形木製品、石錐などの漁捞具、石包丁、石戈、中細銅戈鉄型などが注目される。

52次全体の出土遺物量は総3000箱である。

5年に及ぶ42次、52次の調査を終了し、大量の遺物が出土した流路と台地上遺構との一體的把握や、弥生時代遺構面の上層、下層にも遺構面を確認することができた。調査報告書は2012年度以降に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (140 元岡 767 1:8000)



2. 弥生時代集落 (北から)



3. 縄文草創期の調査 (西から)

0827 久保園遺跡第4次調査 (KBZ-4)

所在地 博多区東平尾(福岡空港内) 調査面積 2933m² (総面積6000m²)
 調査原因 空港整備 担当者 池崎 謙二 板倉 有大 今井 隆博
 調査期間 2009.4.1~2010.2.25(2009年度分) 処置 記録保存

位置と環境

調査地は月隈丘陵西端、丘陵部と低地部の境、福岡空港内の標高約5mに位置する。東側丘陵部に位置する久保園遺跡・席田大谷遺跡では、これまでの発掘調査によって主に弥生時代中期～古墳時代前期の集落・墓地が確認されている。

検出遺構

低地にあたる北側調査区では、弥生時代中期～後期の溝・土器祭祀跡・貯木遺構や、古墳時代・古代の水路と水田などを確認した。古墳時代水路の岸には畦と大量の杭列を検出した。水路がカーブする部分には、護岸のためと思われる杭が集中して打ち込まれている。

丘陵に近い南側調査区では、弥生時代中期～後期の土坑・柱穴・溝などが検出され、集落の様相が強い。柱穴は掘立柱建物としてまとまるものが多く、柱材や礎板が残っているものもある。また、弥生時代初頭の刻目突帯文土器を含む溝状の落ち込みを検出した。上面では古代の水路と整地層が見られる。

出土遺物

出土遺物の大半は弥生土器、古墳時代土師器で、その他に須恵器、古代土師器が少量出土している。石包丁・石斧などの石器や、精・机・扉・鍛などの多種の木器、青銅製鋤なども出土している。また、種子・ヒヨウタン・獸骨などの自然遺物も出土した。出土遺物はコンテナケース約500箱分である。

まとめ

本年度の調査の結果、調査区南側の丘陵部は居住域として利用され、北側の低地部分は水田として利用されていた状況が明らかとなり、集落縁辺部の様相を把握することができた。調査は2010年度まで継続して行われる。

調査報告書は2011年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (22上白井 83 1:8000)



2. 北側調査区全景 (北から)



3. 古墳時代杭列 (南東から)

0901 那珂遺跡群第124次調査 (NAK-124)

所在地 博多区那珂6丁目310 調査面積 98.9m²
 調査原因 個人住宅 担当者 久住 猛雄
 調査期間 2003.4.1~5.23 処置 記録保存

位置と環境

那珂遺跡群は那珂川と御笠川に挟まれた段丘上に立地し、調査区は遺跡の南端に位置し、段丘地形が比較的良好に残る。

検出遺構

検出遺構は、中世、古代の溝、古墳時代中期～古代の竪穴住居、古墳時代・古代、中世の土坑、竪穴、各時代の多数の柱穴群である。飛鳥時代の大形柱穴も検出されたが、建物は調査区の外側に展開する。弥生時代の遺構は不明確だが、上面の竪穴住居貼床を除去した後に確認された遺構は該期の可能性がある。古墳時代後期～古代の竪穴住居には竪穴敷設されている。特にSC003の竪穴は壁際ではなく、ベッドの内側に構築されている。また床面からは5世紀後半の須恵器、土師器が多数出土した。

出土遺物

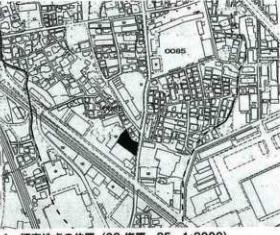
出土遺物で最も多いものは中世前期で、土師器、瓦器、陶磁器、滑石製鍋などが出土した。そのほか古墳時代～飛鳥時代の土師器、須恵器が多い。奈良時代の土器、弥生時代の土器、石器、古式土師器なども少量出土している。

総量はコンテナケース13箱である。

まとめ

古墳時代中期の竪穴住居は那珂遺跡群では比較的珍しい。また特異な竪穴位置は今後検討と注意を要する。また飛鳥時代の大形建物や溝は周辺で確認されている官衙の遺構群とのかかわりが考えられる。中世の遺構も多く、中心的な村落の存在も考えられる。

調査報告書は2011年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (38塙原 85 1:8000)



2. 調査区全景 (西から)



3. 古墳時代SC01 (北から)

0902 席田青木遺跡第7次調査 (MAK-7)

所在地 博多区大字東平尾677-2,678-2 調査面積 390m²
 調査原因 灌油施設建設 担当者 榎本義嗣
 調査期間 2009.4.20~5.27 処置 記録保存

位置と環境

席田青木遺跡は福岡平野の東側を限る月隈丘陵の北端部およびその西側沖積地に広がる遺跡で、本調査区は遺跡西端の沖積地に立地する。調査区の層序は、厚さ約1mの空港造成時の客土下に戦前と推定される水田耕作土や底土が残り、東側にはこれらの下層に近世水田層と考えられる暗灰褐色シルト質粘性土がほぼ水平に堆積する。さら下層には調査区全面に水性堆積物が認められ、これらを除去した面が今回調査を行った水田面となる。その標高は4.2~4.6mである。

検出遺構

今回の調査で検出した遺構は、奈良時代から平安時代の水田面1面及び平安時代末から鎌倉時代に埋没した幅約5m、深さ約1mの自然流路1条である。水田面は足跡などの凹凸が認められる褐色シルト質粘性土を主体とし、上層は流路の氾濫に由来するシルトや粗砂などの水性堆積物で覆われていた。厚さ0.3~0.5mを測る水田耕作土は流路付近を除き、安定した堆積で、以下には水田面は認められない。なお水田面は高低差により3枚を確認できる程度で、畦畔は一部を除き流出している。また、水田面の段差に沿って確認した木杭列は、從来存在した畦畔の補強材と推定される。

出土遺物

出土遺物は遺構の性格上、少量であるが、水田面の直上において土器類へ切り替わる出土した。また、水田面を覆う粗砂より奈良時代の須恵器が出土している。また、自然流路の粗砂中には弥生～中世の遺物が含まれ、奈良時代の墨書き土器(須恵器皿)が1点出土した。出土遺物の総数はコンテナケース2箱である。

まとめ

今回の調査は、本遺跡内の沖積地を対象とした初めての調査であったが、古代の水田遺構が展開することを確認できた。周辺条理との関係や水田区画および水利構造の復元は今後の調査課題と言えよう。

調査報告書は2010年度に刊行予定である。

0903 上月隈遺跡第4次調査 (KTG-4)

所在地 博多区月隈3丁目27 調査面積 757.71m²
 調査原因 公民館建設 担当者 本田浩二郎
 調査期間 2009.4.16~7.3 処置 記録保存

位置と環境

上月隈遺跡第4次調査地点は月隈丘陵西側裾部付近に位置し、北側に開口する谷の西側斜面上に位置する。

検出遺構

調査では弥生時代中期中頃～後期前半まで使用され続けた溜井遺構と共に伴う水路、水田遺構などを検出した。溜井遺構は弥生時代以前の自然流路を利用して造営され、複数の地下水路が収束する位置に設置されていた。溜井に蓄えられた水は流路を流れ、北側に位置する水田へと導水される。溜井の最終段階の後期前半には導水路をやや北側よりの位置に設置し、祭祀土器が溝内に埋置されていた。また、この段階には西側丘陵上に展開する集落方向へも流路が設置されている。遺構面の多くが近世以降の開墾により大きく削平されていたため、弥生時代以降の遺構のほとんどは消失しているが、中世前半期の曲物を井筒に使用する井戸を1期検出した。

出土遺物

遺物はコンテナケースで30箱の弥生土器、石器、須恵器、土師器が出土した。弥生以前の自然流路内からは縄文晚期前葉の土器や石器が出土した。自然流路上流部方向に該期の集落が展開するものと見られる。本製品は加工痕のあるものや原本に近いものなどあわせてコンテナ10箱分が出土した。

まとめ

弥生時代中期から後期にかけての自然地形を生かした水田經營を考える上で重要な知見を得ることができた。

調査報告書は2010年度に刊行予定である。



0904 坂堤遺跡群第2次調査 (SKT-2)

所在地 東区香椎駅東1丁目27

調査面積 536m²

調査原因 道路建設

担当者 佐藤一郎

調査期間 2009.4.16~7.15

処置 記録保存

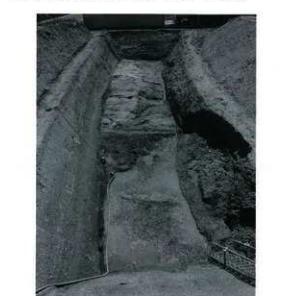
検出遺構

調査の結果、現地表から約2.5m下の岩盤上で古河川を検出した。標高は10.0m前後である。古河川は調査区の北東から南東に幅7~9mで弧状に流れ、岸からの深さは0.7m前後。南西岸には杭列が設けられていた。

出土遺物

出土した遺物は、7世紀前半の須恵器・土師器が主で、全体で整理用コンテナ5箱。造構検出面の上層からは中世前半の中国陶磁片や滑石製容器片が出土している。

調査報告書は2010年度に刊行予定である。



0905 松木田遺跡第4次調査 (MKD-4)

所在地 早良区早良3・4丁目地内

調査面積 3518m² (総面積5900m²)

調査原因 園場整備

担当者 長冢伸

調査期間 2009.4.15~2010.10.5

処置 記録保存

位置と環境

松木田遺跡は扇形に広がる早良平野の付け根に位置し、荒平山と西山に挟まれた、幅300m程の狭隘地の西側段丘面上に立地する。これまでに調査により縄文時代早期・弥生時代～古代の遺構遺物が検出されている。

検出遺構 出土遺物

2009年度の調査は1~5区に分けて行った。1区では黄褐色土の弥生時代以降の遺構面より1m程下層から、縄文時代早期燃糸文土器の包含層が検出され、土器及び黒曜石製石器を主体とした石器、剥片等が出土した。また、耕作土直下の遺構面では弥生時代中期～古代を中心とした竪穴住居跡・建物・土坑・ピット等の濃密な遺構群のほか鍛冶関連遺構などを確認している。2区は1区より西側の段丘面上の調査である。ここでは縄文時代草創期の竪穴遺構1基および小型の三角形石鱗を主体とした石器、剥片、チップが出土している。また、弥生時代中期～古代の遺構群が検出されており、鍛冶炉1基及び数基の炭窯も認められる。3区は遺跡の縁辺に位置し、時期不明の流路等が散漫に認められる。4区は遺跡内をほぼ東西に横断する自然流路にあたり、埋土より弥生時代～古代の土器と共に多量の鍛冶滓が出土している。5区では弥生時代～古代の生活遺構と古墳1基及び弥生時代中期初頭～中期末の木棺墓・壺棺墓を70基程確認した。古墳は6世紀初頭頃の築造と考えられる円墳で、石室と周溝の一部が残存していた。また、弥生時代の埋葬遺構は10×15m程の範囲に密集しているものの、方位を描えた企画的な配置をうかがうことがある。なお墓域は更に北・西方向に広がるものと考えられる。

まとめ

2009年度の調査では弥生時代～古代の濃密な遺構群や縄文草創期・早期の遺構・遺物を確認し、遺物はコンテナ310箱分出土した。調査は事業の進捗に伴い2010年度以降も行う予定しており、今後の調査成果が期待される。

報告書は2011年度以降刊行予定である。



0906 福岡城跡61次(FUE-61) 鴻臚館跡27次(KRE-27)

所在地 中央区内一丁目1
調査原因 観察確認
調査期間 2009.4.1~2010.3.31

調査面積 900m²
担当者 吉武 学
処置 埋め戻し保存

位置と環境 博多湾のはば中央部に突き出した丘陵上に立地する。

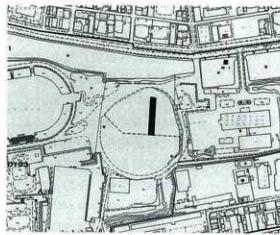
平成18年度から平和台球場跡北半分を対象とした第V期調査を行っており、本年度は2ヶ所のトレンチで発掘調査を実施した。

検出遺構 トレンチ3では福岡城盛土を除去し、北半で下層鴻臚館遺構の調査を行った。博多湾に面した高さ4mの台地の下に砂丘が広がっており、この砂丘上で粘土と砂を交互に突き固めて整地を行った地盤の整地跡と、その上に更に粘土を積み上げた遺構を確認した。一部を確認したのみだが、東西方向に長く伸びていくと想定することができ、出土した瓦などから平安時代(9世紀頃)の築地跡と考えられる。軒の南北幅は4m程度と推定される。

出土遺物 トレンチ4では、上層福岡城跡の構造確認を行い、武家屋敷の一部などを確認したが、野球場建設などにより大きく破壊されていることが分かった。

まとめ 古代の瓦を中心に陶磁器・土師器・須恵器、近世の瓦・陶磁器など、コンテナケース110箱が出土した。

調査報告書は2013年度以降に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (60 黄銅 192 1:8000)



2. トレンチ3全景（北から）



3. 築地跡とみられる遺構（西から）

0907 博多遺跡第189次調査 (HKT-189)

所在地 博多区冷泉町524番
調査原因 共同住宅
調査期間 2009.5.7~2009.5.15

調査面積 24m²
担当者 加藤 隆也
処置 記録保存

1. 発掘調査の経緯

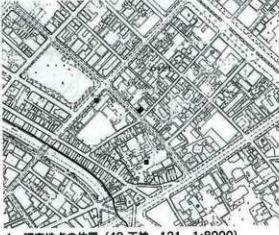
平成21年1月13日に、当該地における埋蔵文化財の有無の確認等査定書類が埋蔵文化財第3課事前査定係に申請された。申請地は、周囲の埋蔵文化財包蔵地である博多遺跡群内にあり、北側に位置する第139次調査では奈良時代後半以降の遺物がみられ、中世前半を中心とする遺構が調査されている。また、西側隣接地の第70次調査でも同様の遺構がみつかっている。このような状況から1月15日に試掘調査を行い、溝や柱穴などの遺構を確認した。協議の結果、今回の共同住宅建設工事においては、現地表から2m以上の掘削は行わないことから、現地表面から2m掘り下げた標高2.7m範囲までを対象に発掘調査を行うことを決定した。調査は杭打ち工事を先行し、土留め工事完了後の5月7日からおこない、5月15日に終了した。

2. 調査地点の位置と周辺環境

博多遺跡群はJR博多駅から北西に伸びる「大博通り」を中心として広がる砂丘上に立地する遺跡群である。この砂丘は東西方向に伸びる3本の砂丘列によって形成されている。このうち内陸側2列を「博多浜」、海側を「息浜」と呼称している。今回の調査地は、博多浜の海側砂丘西端部にあたり、この砂丘列でも高所に位置すると考えられる。

3. 挖出した遺構と遺物

遺構検出面は、土留め工事により申請地中央に残された4×7mの小山部分の上面にあたる現地表下約130cm(標高3.6m)の砂丘層上面である。周辺の状況と比較しても高位での砂丘層の検出である。基盤となる砂丘層は黄褐色を呈したやや粗い粒状をしており、既に削平を受けていることがうかがえた。検出面の南西側は、昭和期の地下室により大きく搅乱されていた。検出された遺構は、土坑、柱穴、井戸などである。遺構に伴う遺物には、奈良時代の須恵器・土師器などから鎌倉時代の白磁と少量の青磁片がみられた。遺構検出面上での記録作業後、砂丘層を掘削し標高2.7mで再度遺構の精査作業を行い、井戸2基の下位への遺存を確認して調査を終了した。



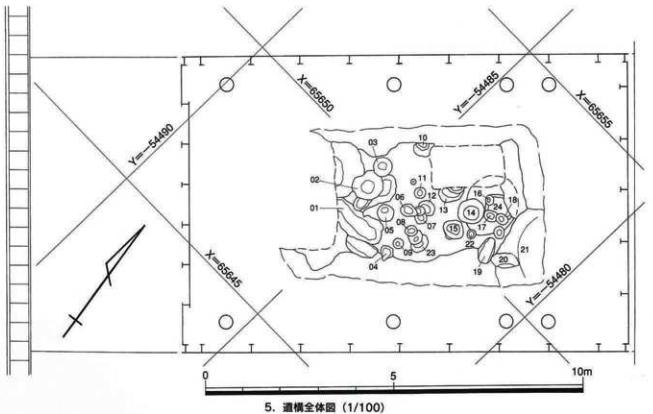
1. 調査地点の位置 (49 天神 121 1:8000)



2. 遺構検出状況（南西から）



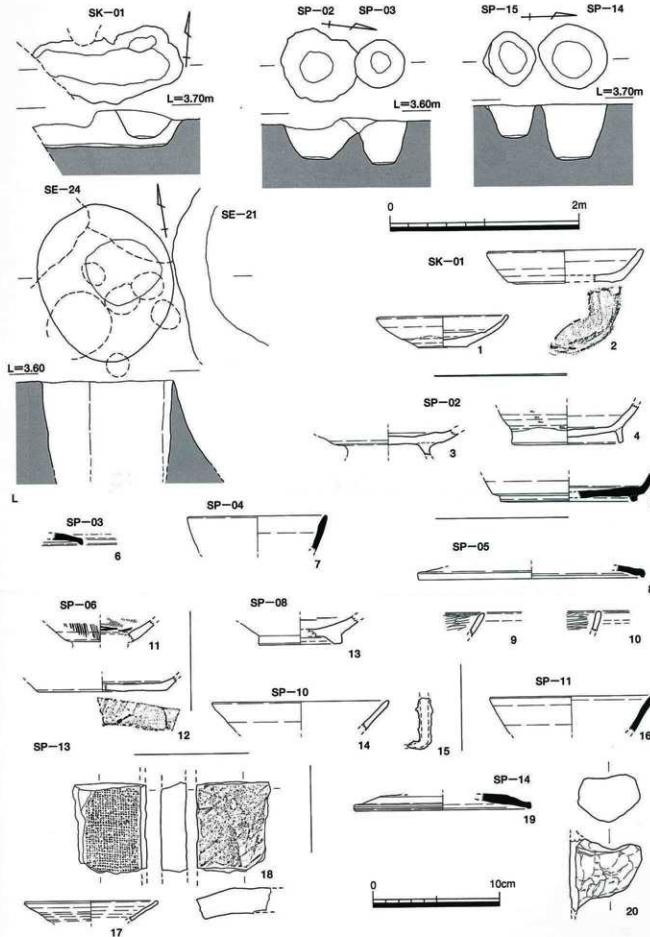
3. 遺構掘削状況（南西から）



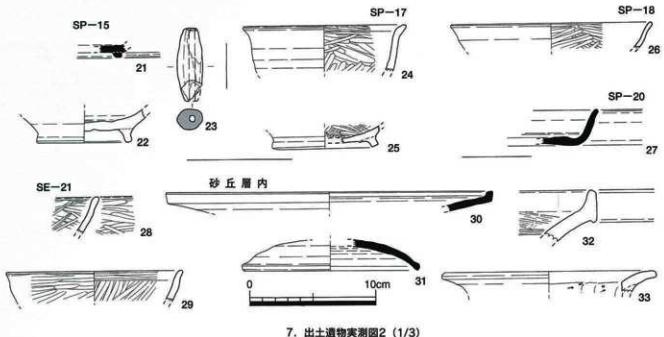
5. 遷構全体図 (1/100)



4. 周辺調査状況 (1/500)



6. 遺構実測図 (1/40)、出土遺物実測図1 (1/3)



4. まとめ

検出された遺構は柱穴、土坑、井戸などである。特筆される点は、基盤を成す砂丘層が比較的高位で確認されたことである。このことから、客土による整地を繰り返す博多遺跡群内における地勢的優位地であったと考えられる。当該地周辺には、古代官衙の造営が想定されている地域があり、今調査地は川岸に位置することから、施設に伴う港湾域と考えられている。今回の調査においても古代の遺構が確認され、何らかの建物等の存在はうかがえるが、その性格の特定までは至らなかった。古代以降もこの地が、博多遺跡群の発展過程において重要な地点であったことは間違いないが、惜しまるくは高所優位地であるが故に後世の搅乱が著しいことである。



0908 中村町遺跡第4次調査 (NMM-4)

所在地 南区若久1丁目123-4128-2

調査面積 667m²

調査原因 宅地造成

担当者 屋山洋

調査期間 2009.5.11~7.7

処置 記録保存

位置と環境

中村町遺跡は片縄山から北東に延びる丘陵の先端部に位置しており、古くは那珂川の左岸に接していたものと思われる。今回の4次調査地点は遺跡南端部の丘陵頂部に位置する。北側は那珂川に向かって緩やかに傾斜するが、南側は若久A遺跡との境界になる狭い東西方向の谷に向かって急な傾斜になっている。

検出遺構

今回の調査で出土した遺構は縄文時代後期後半から晩期前と思われる埋甕3基と土坑の他、古墳時代前半と思われる土坑1基、また8世紀頃の遺構は溝が6条、高床式倉庫1等、側柱建物1棟、土坑数基、柱穴多数などである。縄文時代の埋甕のうち1基は粗製浅鉢の上を故意に割った粗製浅鉢片で覆っており、また他の1基からは精製浅鉢が出土している。古代の遺構は丘陵頂部の平坦部を囲むように巡る可能性のある溝と、その内部を区画すると考えられる溝を確認した他、その区画に沿って建てられた掘立柱建物を2棟確認した。丘陵頂部の平坦面は調査区の北側に中心があるため、古代の集落の中心も北側にあるものと思われる。

出土遺物

遺物は縄文土器や古墳時代前期の土器が少量出土した他、8世紀代の須恵器、土師器が溝からまとめて出土した。総量はコンテナケース8箱である。

まとめ

中村町遺跡群では今まで弥生時代後期の堅穴式住居などが多く出土しているが、今回の4次調査では確認できなかった。古代の遺構に関しては1次調査で少なくとも2×6間の大型掘立柱建物が検出されており、今回検出された遺構も含めて遺構の性格を考えていく必要がある。

調査報告書は2010年度に刊行予定である。



0909 金武青木A遺跡第1次調査 (KAA-1)

所在地 西区大字金武地内

調査面積 3.502m²

調査原因 園場整備

担当者 加藤 隆也

調査期間 2009.6.1~2009.12.25

処置 記録保存

位置と環境

金武青木A遺跡は、室見川の支流である竜谷川の上流に位置する。周辺には浦江遺跡、金武城田遺跡、都地遺跡などがあり、古墳時代から始まる製鉄関連遺構や古代を中心に官衙的配置をする建物がみつかっている。この地は、古くから人の行き交う交通の要衝の地であったと考えられている。

検出遺構

今回検出された遺構は、掘立柱建物4棟以上、溜井状遺構、焼土坑、鐵冶炉、池状遺構である。建物は山陰の緩斜面を造成して建てられており、両側に庇を有する建物もみられる。

出土遺物

遺物は主に池状遺構よりコントナケース100箱を超える土器や木製品が出土した。土器には「志豆女」、「正月」、「田原」、「成」、「井」、「上」、「主」、「中」、「赤」などと墨書きされた須恵器、「淨」と刻まれた刻書土師器、「金」の字を連ねた針書土師杯や円面鏡、縞の羽口などがみられる。そして、弓、人形、折敷、曲物など多くの木製品とともに木簡9点が出土しており「怡土城」、「志麻郡」、「延暦十年」などが書かれていた。

まとめ

これまで金武周辺でみつかっている官衙的配置を呈する大型建物群の性格等は不明であった。今回出土した木簡は、延暦十年(791)の紀年銘木簡を含み、この地から怡土城の長官クラスに宛てたと考えられる文書や、志摩郡と関係すると思われる人名を書き連ねたものであった。そして、金武地域と怡土城は併ひとつで繋がっているという立地環境も合わせて、確認されている建物群の一部は、大宰府防衛の最前線施設である怡土城の築城、運営期において後方から支援する基地的役割を担っていた可能性が考えられるようになった。

調査報告書は2011年度に刊行予定である。



3. 怡土城と書かれた木簡

0910 那珂遺跡群第125次調査 (NAK-125)

所在地 博多区竹下5丁目36番

調査面積 204.9m²

調査原因 共同住宅

担当者 久住 猛雄

調査期間 2009.6.5~7.20

処置 記録保存

位置と環境

調査地点は遺跡中央部西側に位置する。調査区周囲の標高は8.5m前後で、遺構検出面は地表面から30~70cmであり、東側へやや低くなる。

検出遺構

遺構は極めて多い。堅穴住居は確実なもののが10棟ある。古墳時代後期~飛鳥時代が主体で、弥生時代と奈良時代のものも見られる。土坑は20基前後で、うち2基は中世の土塁墓、1基は中世地下式土坑である。戸井戸は中世4基、古代2基の計6基検出した。古代の井戸からは7~8世紀の瓦が多量に出土した。溝は弥生時代1条、古墳時代2条、中世2条である。弥生時代の溝は幅1.8m~2.4mを測る断面逆台形の大溝で、中期中頃に掘削されている。中期末には土器の一括廃棄が数箇所に見られ、最上層には後期初頭以降の遺物が見られる。

出土遺物

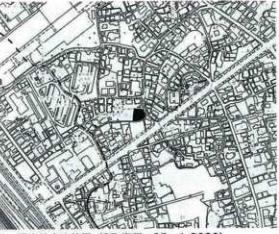
出土遺物は弥生土器、古墳時代後期~古代の土師器、須恵器、黒色土器、瓦類、砾石、台石などの石製品、中世の土師器、瓦器、陶磁器などである。特筆すべき遺物として青銅器の鋳型がある。巴形銅器と中広形銅戈の両面鋳型である。古代遺構からの出土であるが、重複する弥生時代大溝の上層に廃棄されていた可能性が高い。

総量はコントナケース60箱である。

まとめ

巴形陶器は15センチ前後の大方のもので、類例として拓本のみ伝わる糸島市井原鍛溝遺跡「王墓」出土例が最も近い。伊都国と奴国との関係を考える上で重要な資料を提供したといえよう。

調査報告書は23年度に刊行予定である。



3. 巴形銅器鋳型出土状況 (東から)

0911 飯倉A遺跡第3次調査 (IKR-A-3)

所在地 早良区飯倉5丁目161-2
 調査原因 個人住宅建設
 調査期間 2009.6.10~7.9, 10.5~10.15

調査面積 106.9m²担当者 榎本義嗣
 処置 記録保存

位置と環境

飯倉A遺跡は、早良平野東側の油山西麓から北側に長く延びる丘陵の北側に位置する。今回の調査地点は、南北方向の主尾根より北西方向に派生する支丘の南西斜面に立地し、現地表面の標高は、約17.1mを測る。

調査区の層序は、表層のバストラス下に厚さ0.4~0.6mの客土や旧畠地耕作土がみられ、尾根に近い東側では、その直下でやや粘性のある赤褐色土の地山に至るが、谷側の一部には、地山の上層に茶褐色土の無い包含層が認められた。

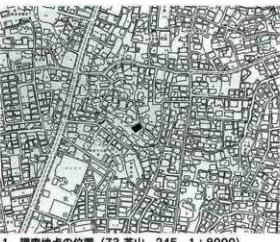
今回の調査で検出した遺構は、弥生時代後期後半から古墳時代初頭の堅穴住居4軒・溝1条・土坑およびピット少數、近世の溝1条であるが、調査区が狭小であるため、遺構の大半は調査区内に収まっておらず、規模や詳細な構造は明らかでない。

堅穴住居は全て方形プランを呈し、壁溝が巡る。1軒のみ一辺の長さを確認でき、約7mを測る大型の住居である。また、ベッド状遺構が設置されるものが2軒、被熱痕跡のある炉跡を有するものが1軒認められた。尾根側の住居は削平により壁面が失われるものが多いが、谷側で検出した住居は深さ0.4mが残る。調査区南端で検出した弥生時代終末の溝は、幅・深さと共に0.5mを測り、緩い弧を描いて東西方向に延びる。

出土遺物は、各遺構や包含層より弥生土器や土器飾器の壺、壺、鉢、高杯、ミニチュア土器、鉄製品が出土した。総数はコンテナケース5箱である。

まとめ

調査区周辺の旧地形図（昭和前期）によれば、幅広の支丘尾根が調査区の北東から北側に延び、また、南西側から西側は比較的急な斜面となっている。恐らく、尾根から緩斜面上にかけて該期の集落が展開していたことが予測され、本調査区は、立地から集落の縁辺に相当するものと考えられる。



1. 調査地点の位置 (73 楽山 245 1:8000)



2. 調査区東側全貌(北から)



3. 溝堆積状況 (西から)

位置と環境

調査地は田村遺跡の南辺部中央に位置し、10世紀末~11世紀と想定される掘立柱建物群からなる集落の東辺域を確定した第14次調査地の南側に接する。調査地の現況は標高17mを測る水田である。周辺は宅地化されて往時の姿を留めていないが、本調査地を含む一帯は方109mの条里地形が最近まで良好に遺っていた。調査地は坪の北辺部に位置する。試掘調査報告によると、時代を決定する遺物は得られなかったものの、地表下80cmの黄褐色シルト層上面で弥生時代もしくは中世の溝、土坑、柱穴を検出したことが記されている。

検出遺構

検出した遺構は、土坑1、流路1、小穴多数を検出したものの、顯著な遺構の存在を確認することはできなかった。土坑は、調査区北辺部中央に位置し、東西方向に長軸を持つ溝状の形状を呈する。幅約1m、長さ約4m、深さ0.6mを測る。流路は自然流路で、現地形にも合致する南東方向から北西方向への向きを呈する。小穴の大半は自然的因素が強い凹みと考えられる。

出土遺物

遺物は粗製深鉢形の繩文土器片と石礫の計3点にとどまり、いずれも黄灰色粘性砂質土上面の自然的凹みを覆う黒灰色土から出土した。土器および石礫は繩文時代後期後半~晩期にかけてのものと推定される。

まとめ

今回の調査では、第3次および14次調査で明らかになった中世集落の範囲確定を検証することとなった。すなわち、少なくとも第14次調査における掘立柱建物から南側約50mにおいては集落が形成する建物は存在していない。

該調査では、遺構は希薄であったものの出土遺物の状況から、周辺地域において繩文時代後晩期の遺構が存在している可能性を示す成果を得た。

調査報告書は2012年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (84 重留 317 1:8000)



2. 調査区全景 (西から)



3. 出土石器

0913 千里遺跡第1次調査 (SNR-1)

所在地 西区大字千里地内
調査原因 土地区画整理
調査期間 2009.6.11～2010.3.31

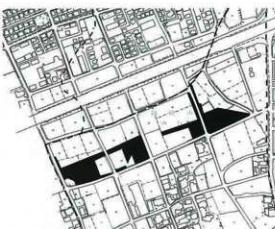
調査面積 10620.8m²
担当者 山崎 龍雄、板倉 有大
処置 記録保存

位置と環境
調査地は糸島平野下流、標高13～14mを測る沖積微高地に立地する。調査区は南北方向の既存道路を基に、東から西へ1～5区とした。

検出遺構出土遺物
遺構面は表土・耕作土下の粘土・シルト面または砂礫面である。この遺構面には縄文時代遺物が散漫に含まれる。1区は南側高所部で縄文時代晩期から中世初めの集落跡を検出した。遺構面は2面であった。主な遺構は縄文時代晩期、古墳時代前期の堅穴住居3基、弥生時代と中世の掘立柱建物14軒、弥生時代の溝2条、弥生時代～中世の土坑多数、中世の井戸2基である。縄文時代から中世の遺物が多く出土した。2区では、中世の掘立柱建物、廐棄土坑、土坑墓、区画溝、弥生時代中期後半の土器盛り、溝を確認した。3区は検出遺構は少ないが、東側で糸島地区の条里方向に沿った溝2条と、西側の砂礫面で弥生時代土坑6、中央部南側で縄文時代晩期土坑1を検出した。縄文時代から弥生時代の遺物が7箱出土した。4区では、縄文時代晩期の溝、弥生時代中期後半の掘立柱建物、水路、溜井、古墳時代前期の方形周溝遺構、水路、廐棄土坑、古代の水田、中世の掘立柱建物、土坑墓、中世末～近世の掘立柱建物、柱列、溝、水田、土坑などを確認した。5区は4区北側今宿バイパス沿いの小区である。土坑5基とピットを検出した。縄文時代から弥生時代にかけての遺物が1箱出土した。

出土遺物の総量はコンテナケース150箱である。

調査報告書は2010年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (132 千里 745 1:8000)



2. 調査区全景 (南西から)



3. 縄文時代住居 (東から)

0914 田村遺跡第25次調査 (TMR-25)

所在地 早良区田村4丁目60-1、65-1
調査原因 店舗建設
調査期間 2009.7.1～7.16

調査面積 2283m²
担当者 深本 正志
処置 記録保存

位置と環境
調査地は、田村遺跡の南辺部中央に位置し、10世紀末～11世紀と想定される掘立柱建物群からなる集落の東辺城を確定した第14次調査地に南接する。調査地の現況は標高17mを測る水田である。周辺は宅地化されて往事の姿を留めていないが、最近まで本調査地を含む一帯は方109mの条里地形が良好に遺っていた。坪の北部に調査地は位置する。試掘調査では、地表下30cmの黄褐色シルト層上面で弥生時代もしくは中世の溝、柱穴を検出している。

検出遺構
遺構精査の結果、径20cmほどの柱穴が多數検出され、掘立柱建物5棟以上の存在が明らかとなった。2棟の建物は各棟筋が揃っていることから、同時期の屋敷を構成する一部であった可能性が高い。中でも母屋が2間×3間で四面庇の建物は、その中心的役割を果たしていたと考えられる。時期的には11～12世紀が比定されるところから、第3次および第14次で検出された集落の範囲が南に広がることを示唆するものと考えられる。

出土遺物
遺物は、瓦質土器、土師器、滑石製石鍋、石製鏡、縄文土器が出土しており、縄文土器を除けばいずれも11～12世紀のものである。滑石製石鍋は古式の形状を呈し、硯とともに柱穴から出土している。柱掘形と柱との間に詰め石として使用されていることは建築工学的に興味深い。

まとめ
今回の調査では、これまでの調査で確定されていた集落域を再検討する必要性を提起する資料を得た。今回の建物群は一つの屋敷を構成している可能性が極めて高いことから、11世紀前後の田村遺跡における姿としては、いくつかの屋敷が空間的距離を持ちながら存在していたことが推定される。今後の周辺地域の調査において留意する必要がある。

調査報告書は2010年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (84 重留 317 1:8000)



2. 調査区全景 (東から)



3. 掘立柱建物 (南から)

0915 五十川遺跡第18次調査 (GJK-18)

所在地 南区五十川2丁目33 調査面積 239m²
 調査原因 道路建設 担当者 本田 浩二郎・松尾 奈緒子
 調査期間 2009.7.1~9.30 処置 記録保存

位置と環境

五十川遺跡は那珂川右岸に形成された南北につながる中位段丘面上に立地しており、本調査地点はその南端の西側斜面にある。鳥栖ロームを基盤とする遺構面の標高は約11.7mを測る。北側を1区、南側を2区とし、1区南側で検出した東西方向に伸びる溝状の落ちを境として反転した。

検出遺構

1区の遺構としては弥生時代前期後半に比定される方形及び袋状の貯蔵穴5基、隣接する調査区でも確認された南北方向の区画溝、この区画溝と主軸を同じくする中世前半と思われる木棺墓2基があげられる。2区では8世紀初頭の区画溝が埋没した後、この区画溝を破壊して切通しが開削され、12世紀に切通し基底面以下に及ぶ溝状遺構が掘削されたことが判明した。この12世紀代の溝が埋没した後は昭和16年まで水田が営まれ、切通し基底面に及ぶ水田の修復拡張が行われていた状況を確認することができた。

出土遺物

貯蔵穴からは弥生時代前期後半の甕、壺、鉢が、区画溝からは7世紀後半から8世紀初頭の須恵器、土師器等が、木棺墓からは13世紀初頭の竈窓窯系青磁碗及び土師器小皿が出土している。総数でコンテナケース17箱。

調査報告書は2011年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (24板付 88 1:8000)



2. 1区全景 (南から)



3. 貯蔵穴遺物出土状況 (北から)

0916 箱崎遺跡第64次調査 (HKZ-64)

所在地 東区箱崎1丁目2804-2,9,10 調査面積 209m²
 調査原因 共同住宅建設 担当者 屋山 洋
 調査期間 2009.8.3~10.7 処置 記録保存

位置と環境

箱崎遺跡は博多湾に面する砂丘上に位置する。本調査区は箱崎遺跡西端部の海岸に向かって傾斜する斜面上に位置しており、古代から中世の箱崎の集落としては西端に近いと考えられる。

検出した遺構は第1面で14世紀代の溝、土坑、柱穴群。第2面で12~13世紀の溝、柱穴群。第3面で11世紀末~12世紀の土坑や柱穴群を検出した。14世紀代の溝の主軸は現在の道路と並行する。

出土遺物

出土遺物は第1面直下で中国製陶器や土師器壺、皿がまとまって出土した。また14世紀の土坑から多量の土師器壺、皿とともに土製の仏像が出土した他、井戸の最下層から銅鏡が出土するなど祭礼・信仰に関連すると思われる遺物が多く出土した。遺物の総数はコンテナケース53箱を数え、同時期の博多遺跡と遺物の種類や出土状況は似た感じを受ける。

まとめ

本調査地点の最も古い遺構は11世紀末頃の遺構で、径の小さな柱穴が疎らに分布しており小規模な建物群が営まれたと考えられる。この時期の遺構の上に焼土ブロックが多く含む層があるが、焼土層の上では遺構の数や規模が大きくなり、火事の跡を整地しながら集落が発展する様子が判る。火災後の整地は漸く断続的だが中世後半までに3面の焼土面を確認した。14世紀後半の遺構が出土した第1面から現地表面までのあいだは茶褐色砂質土で、この層の断面では柱穴や土坑などの掘り込まれた遺構はみられないため、室町時代から近世頃に盛土され、その後は庭園など建物や廐穴、井戸等が掘られない状況が続いたものと思われる。

報告書は2010年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (34 箱崎 2630 1:8000)



2. II区3面全景 (西から)



3. 遺物出土状況 (西から)

0917 原遺跡第25次調査 (HAA-25)

所在地 早良区原8丁目1176-5, 1178-20, 21 調査面積 175.7m²
 調査原因 店舗建設 担当者 榎本義嗣
 調査期間 2009.8.3~9.8 処置 記録保存

位置と環境

原遺跡は、早良平野を北流する室見川下流東岸の沖積地に位置する。本調査地点は、同河川の支流である金剛川東岸の自然堤防の西側緩斜面に立地し、現地表面の標高は6.7mを測る。調査区の層序は、上層から厚さ1m以上の客土、旧水田層、遺構面となる黄褐色シルトとなるが、北側の緩斜面上には褐色土を主体とする薄い包含層がある。遺構面は北西にゆるく傾斜し、標高は5.3m前後である。

検出遺構

今回の調査で検出した遺構は弥生時代と中世に大別され、前者に属するものは後期初頭の小型土坑墓である。完形に近い壺や鉢が複数発見されていた。他の大半の遺構は中世後半に位置づけられ、掘立柱建物や井戸、土坑、溝を検出した。掘立柱建物は2×3間の規模で、梁間3.9m、桁行5.7mを測り、柱穴の一部に礫石を据えるものが認められた。井戸は調査区の東側に数基が近接し、いずれも井側は未確認であったことから、素掘りと推定される。調査区の南端で検出した東西方向の溝は、調査区南側の第9・22次調査で確認されている屋敷地の区画溝の一部であると推定される。

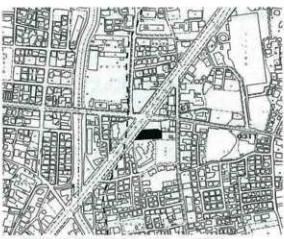
出土遺物

出土遺物としては弥生土器や土師質土器、瓦質土器、国産陶器、朝鮮王朝及び明代の輸入陶磁器等がある。総数はコンテナケース4箱である。

まとめ

前述の溝は、周辺の調査成果とあわせると、東西約60m、南北約40~45m規模の方形溝に復元でき、溝で区画された屋敷地が存在した可能性が高い。早良平野における中世名主の屋敷地のあり方を考え上で貴重な調査事例であり、今後、屋敷地内外の構造や時期変遷について考察を深める必要がある。

調査報告書は2010年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (82 原 311 1:8000)



2. 調査区全景 (北から)



3. 土坑遺物出土状況 (西から)

0918 田村遺跡第26次調査 (TMR-26)

所在地 早良区田村1丁目812, 811-2 調査面積 310m²
 調査原因 老人ホーム建設 担当者 森本幹彦
 調査期間 2009.8.3~8.18 処置 記録保存

位置と環境

早良平野の中央部、室見川東岸の低地に立地する本調査区は、田村遺跡の北西部に位置する。遺構面は標高13m前後の中性細砂層（河川堆積）で、東西方向の溝や土坑状の落ち込みを検出した。東西方向の溝は第7次調査の南北溝より派生する分水路である可能性が高く、中世前半の条理溝と考えられる。

出土遺物

条理溝の時期を示すと考えられる中世の遺物には、黒色土器B類などがあるが、極少量である。遺構の掘削される灰色砂層も弥生時代の包含層となっており、弥生時代中期中頃～後期前半と終末期を中心とする弥生土器が一定量出土する。遺物総量は土器、石器などコンテナケース3箱である。

まとめ

砂層の堆積状況や土器の出土状況などから、調査区の北西を中心とした箇所に弥生時代の集落が存在する可能性が考えられる。

調査報告書は2010年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (92 戸切 317 1:8000)



2. 調査区全景 (北から)



3. 条理方向の溝 (東から)

0919 周船寺遺跡第19次調査 (SSJ-19)

所在地 西区大学千里地内
調査原因 土地区画整理
調査期間 2009.6.11~7.31

調査面積 301m²
担当者 山崎 龍雄、板倉 有大
処置 記録保存

位置と環境 調査区は千里川地区画整理地内の北側、今宿バイパスの南側に位置する。標高12~13mを測る沖積微高地に立地する。調査区は3区に分け、南北道路を境として東側の1E区と西側の2E区、今宿バイパス沿いの2F区とした。北側の今宿バイパス建設に伴う調査では縄文時代晚期の包含層と、弥生時代前期後半の壺墓群、中期の集落遺構が調査されている。

検出遺構 1E区は耕作土下遺構面の黄褐色粘質土、灰黄色の砂礫層となる。遺構は検出出来なかった。縄文土器包含層の存在も考え、トレンチを入れ精査したが、存在は確認出来なかつた。出土遺物も少ない。2E・F区では、縄文時代晚期~弥生時代の遺物包含層（流路状堆積）、弥生時代中期後半の掘立柱建物跡2棟を確認した。弥生時代中期後半の遺構検出面下は粘質シルト・砂質シルト・砂礫が広く互層状に堆積しており、散漫に遺物を包含している。

出土遺物 縄文時代晚期~弥生時代前期までは活発な冲積作用によって周囲から遺物が移動してくる状態であり、微高地として安定したのは弥生時代中期後半以降であったと考えられる。総量はコントナケース3箱である。

調査報告書は2010年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (94 金武 440 1:8000)



2. 調査区全景 (南から)



3. 堀立柱建物 (南東から)

0920 女原遺跡第7次調査 (MBR-7)

所在地 西区女原地内
調査原因 土地区画整理
調査期間 2009.8.21~11.9

調査面積 2,400m²
担当者 森本 幹彦
処置 記録保存

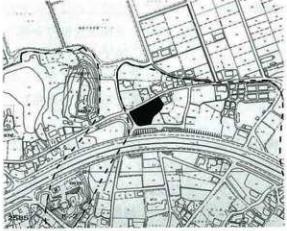
位置と環境 調査区は女原遺跡北西部の微高地から谷に立地する。遺構面は沖積層の砂礫混黄褐色シルト層で、20~30cm下に縄文時代に形成されたと見られる暗褐色粘質土が形成される。

検出遺構 遺構は西側の微高地を中心に計30cm前後のビット多数（掘立柱建物 5棟以上）、幅40cm前後の溝 6条（畠間状）などが検出された。時期は古墳時代後期前後が中心と見られる。微高地の縁辺には暗褐色の包含層が見られたが、中世に形成された耕作土であろうか。

出土遺物 遺物は土師器、弥生土器、須恵器、陶磁器、石器がコンテナケース5箱出土した。土器は摩滅した小片が多いが、主に古墳時代後期と見られる。柱抜取穴の一つからII期の須恵器蓋坏がまとまって出土している。弥生土器や古式土師器の出土は少ないが、古墳時代初頭前後の瀬戸内系壺の口縁部片が出土している。石器は縄文時代後~晚期の黒曜石石器4点や剥片が一定量出土している。

まとめ 本調査区の調査により周辺の調査で見つかっていた古墳時代集落の北西縁辺の様相が明らかになった。近在する山ノ鼻1号墳(古墳前期)と同時期の遺構は見られなかった。また周辺の調査では見られなかった古墳時代初頭前後の土器が出土しており、瀬戸内系土器が含まれることは注目される。

調査報告書は2011年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (120 周船寺 688 1:8000)



2. 調査区全景 (東から)



3. 須恵器埋納柱穴 (北から)

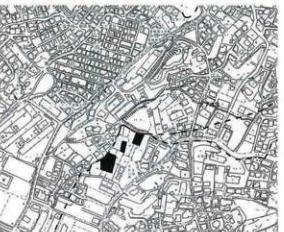
0921 香椎A遺跡群第6次調査 (KSA-6)

所在地	東区香椎2丁目	調査面積	1,429m ²
調査原因	道路建設	担当者	佐藤一郎
調査期間	2009.8.25～12.21	処置	記録保存

位置と環境
現況では高低差がほとんどない平坦な水田であったが、丘陵部を削り谷部を埋めて改変されたもので、削平を受けた部分には遺構は残存せず、床土直下で地山となる。谷部には床土の下に灰色・黄色粘質土が堆積し、落ち際の斜面では遺物が多量に出土した。

検出遺構
出土遺物
I 区では削平を免れた南西部で、南西に落ちる谷SD01と西に開く谷SD02、谷の落ち際では土器埋納土坑SX03を検出した。出土した遺物は、5世紀の土師器が主で、全体でコンテナケース50箱。SD01下層からは縄文後晩期の土器・石器が出土した。II 区は谷部で、約0.9m盛土がされ、現地表下約1mで落ち込みSD05を掘り下げ、地中下層の岩盤、杭列を確認した。落ち込みの埋土からは弥生時代中期中頃の土器が少量出土した。III 区では東西方向の古河川（流跡跡）を2条検出した。南側を流れるSD10の上層には14世紀代の遺物を含むのにに対し、下層（腐植土）では縄文後晩期から晚期中頃にかけての土器や石器が出土した。下層の腐植土層は河川の西側では見られなかった。北側のSD11においても、下層（腐植土）では縄文後晩期～晚期中頃の土器や石器が出土した。縄文後晩期の遺物はSD10・11合わせてコンテナケース30箱。出土遺物の総量は、縄文土器のはか土師器、石製品、木製品など80箱である。

調査報告書は2011年度に刊行予定である。



3. SD10縄文土器出土状況

0922 徳永B遺跡群第3次調査 (TKB-3)

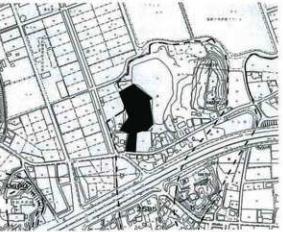
所在地	西区徳永地内	調査面積	2,500m ² (総面積5,000m ²)
調査原因	土地区画整理	担当者	菅波正人
調査期間	2009.9.7～継続中	処置	記録保存

位置と環境
本遺跡は福岡市の西部の今宿平野にあり、標高約10mの低丘陵地に立地する。現況は畑地と墓地で、南側約200mには国史跡の若狭宮古墳がある。遺構は耕作土下約20cmの淡橙色粘質土で検出された。

検出遺構
耕作土の直下が遺構面であるため、遺物包含層はほとんど検出できなかった。遺構はI区は近世墓、II区は古墳時代から中世の焼土坑、柱穴、III区は5世紀代の円墳、木棺墓、中世の柱穴などを検出した。5世紀代の円墳は径約14mを測り、周囲に葺石が巡る。2基の木棺墓は長さ約200cmで、鉄刀・ガラス小玉などが副葬されていた。墳丘や周溝は伴わないと考えられる。

出土遺物
遺物は木棺墓以外には柱穴から土師器、須恵器、黒曜石などが出土した。

まとめ
調査は継続中であるが、古墳時代から中世の遺構、遺物を検出した。特に、5世紀代の円墳、木棺墓が確認できたことは大きな成果である。本調査地点は山の鼻2号墳の墳丘想定地に当たるが、今のところ、墳丘を確認するに至っていない。今後の調査で山の鼻2号墳とこれらの古墳との関連を明らかにしていく予定である。



3. 木棺墓002 (南から)

0923 箱崎遺跡第65次調査 (HKZ-65)

所在地 東区箱崎3丁目3374-1他 調査面積 3187m²
 調査原因 共同住宅建設 担当者 本田 浩二郎
 調査期間 2009.9.9~10.6 処置 記録保存

位置と環境

箱崎遺跡第65次調査地点は、箱崎遺跡の北端部に位置する。周囲の調査区では12世紀～14世紀の集落が検出されている。調査地点の現地表面の標高は3.5～3.7mを測り、北側に向かって緩やかに傾斜する。

検出遺構

調査では12世紀後半代の木棺墓1基、方形土坑、円形土坑、柱穴群などを検出した。木棺墓は棺材は腐食のため遺存していないが、棺材を止めている鉄釘がほぼ原位置の状態で出土した。鉄釘の出土状況から、棺は長辺182cm、短辺48cmに復元できる。棺外の墓坑東寄りの頭位付近に龍泉窯系青磁碗1枚、糸切り底の土師器壺环2個を副葬していた。棺内からは成人男性骨を検出した。頭蓋骨、四肢骨、骨盤の一部が遺存していた。

井戸は掘り方直径3.5mを測り、井筒は掘り方底面の北寄りに設置されていたと考えられるが、井戸廃絶後に撤去されていた。桶などが用いられたと考えられる。なお標高80cmで湧水する。方形土坑は底面四隅に杭の痕跡が残り、埋土中には貝殻片等が多く含まれていた。

出土遺物

出土遺物は土師器、須恵器、中国陶磁器、国産陶器、銅鏡、人骨、黒曜石剥片等がコンテナケース8箱分出土した。

まとめ

調査では中世前半期の木棺墓、井戸などを検出した。木棺墓や土坑などは主軸をN-48°-E方向にとるものが多い。周辺の調査からも、該期の町割を反映したものと考えられる。なお、この方向は現在の街区とはほぼ同じで、中世以来踏襲されている。

調査報告書は刊行時期未定である。



1. 調査地点の位置 (34 箱崎 2630 1:8000)



2. 調査区北側全景 (南東から)



3. 木棺墓検出状況 (南から)

0924 井尻B遺跡第34次調査 (IGB-34)

所在地 南区井尻4丁目815-1、822 調査面積 485m²
 調査原因 戸建住宅建設 担当者 小林 義彦
 調査期間 2009.9.16~10.30 処置 記録保存

位置と環境

井尻B遺跡は、福岡平野の中央を北流する那珂川下流域の右岸に沿る井尻台地上にあり、第34次調査区は、この井尻台地南西縁の緩斜面上に立地している。春日市の岡本丘陵から続くこの台地上には、弥生時代の堅穴住居群や甕棺墓・石棺墓などの墳墓群のほか鏡や銅鑓などの鏡形や小型の銅鏡などが出土している。また、台地の中央部には形象埴輪などを伴う前方後円墳や古代の井尻魔寺なども検出されている。

検出遺構

発掘調査では、弥生時代中期後葉～後期の甕棺墓2基ほか5基の土塙墓（土塙墓2基、木蓋土塙墓1基、石蓋土塙墓、木棺墓1基）のほか土塙5基と3条の溝遺構を検出した。このうち溝は、幅が1.5m～3m、深さが50cm～110cm、長さが8m～10mで東西と南北に独立して矩形に並んでいた。このうち東の溝は、北端が短く西側へ屈曲した矩形をしているが、南の溝に対峙するようには延びず、平面的には北に開いた「コ」状をなしている。また、この東溝の東縁には、石蓋土塙墓が掘り込まれているが、溝の埋没によって溝内に沈んでいる。

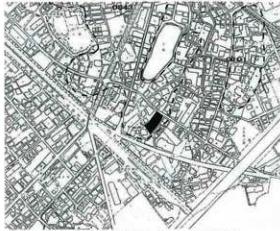
出土遺物

甕棺墓や土塙墓から副葬品は出土しなかったが、木棺墓の棺床にはベンガラが敷かれて、石蓋土塙墓内からは木質の付着した茎状の鉄片が出土し、刀子が副葬された可能性がある。また、丹塗りの櫛型土器や甕が出土した土壙があり、祭祀土壙の可能性がなくはない。遺物は、甕や壺・高坏などがコンテナケース15箱分出土した。

まとめ

本調査区で検出した遺構は、弥生時代中期後葉～後期の甕棺墓や土塙墓で構成された墳墓遺構である。甕棺墓群の検出は、台地の南西縁まで墳墓域が拡がっていたことを示すもので、台地上における集落域の展開と墓地群の在り方を考える上で貴重な資料である。

調査報告書は2010年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (25 井尻 843 1:8000)



2. 調査区全景 (北から)



3. 木棺墓 (東から)

0925 有田遺跡群第233次調査 (ART-233)

所在地 早良区有田1丁目8-8
調査面積 131.5m²
調査原因 個人住宅建設
調査期間 2009.9.15~10.6
担当者 濱本 正志
処置 記録保存

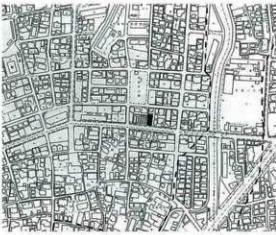
位置と環境
調査地は、有田遺跡の南東部に位置し、15世紀頃と想定される掘立柱建物群が検出された第7次調査地に西接する。調査地の現況は標高9.9mを測る平坦な住宅地であるが、土地区画整理が40年ほど前に実施される以前は東側に一段下がる畠地であった。試掘調査では地表下30cm~36cmのローム層で小穴を検出している。

検出遺構
遺構精査の結果、小穴と一樣の掘立柱建物跡を検出した。調査区東北部で検出した建物は規模を確定できなかったが、第7次調査時の建物とは別の物で、柱穴は約50cm~60cm、深さ40cm~60cmを測り、調査区の北側および東側の隣地へ広がっている。東側隣接地の第7次調査で検出した建物に関連すると考えられる遺構は、径40cm、深さ20cmの柱穴が一基だけである。

出土遺物
遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、磁器がコンテナケースに1箱出土しているが、総じて小片のために器形や年代を詳細に示す資料とはなっていない。

まとめ
今回の調査では、新たな建物跡を発見できたことから、周辺地における中世集落の構成を知る上で貴重な資料を得ることができた。第7次調査での建物跡が今回の調査で検出されなかった理由は、当該地の大規模な削平であることが明らかになった。集落は広く展開していることが明らかとなったことから今後の周辺地域の調査において留意する必要がある。

調査報告書は2012年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (82原 309 1:8000)



2. 東半区全景 (南から)



3. 掘立柱建物 (東から)

0926 南八幡遺跡群第17次調査 (MHM-17)

所在地 博多区元町1丁目7-1
調査面積 139.2m²
調査原因 共同住宅建設
調査期間 2009.10.8~11.12
担当者 久住 雄雄
処置 記録保存

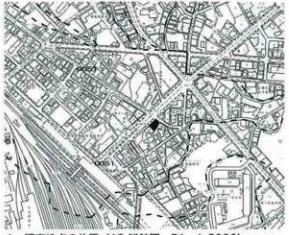
位置と環境
南八幡遺跡は、福岡市南端部の雜賀丘陵上に位置する。この丘陵は谷部が複雑に入り、八つ手状をなしている。本調査地点は遺跡の中央よりやや南側に当たる。周囲の標高は19.7~20.4mである。古い微地形で西側に小谷があり東側がやや高くなるようである。

検出遺構
東半区のI区ではGL-40~50cm、西半区のII区では140~前後で鳥栖ロームの地山となる。遺構はローム上面で確認した。I区では遺構密度が薄く、弥生時代後期後半~終末期の壺棺墓と、黒褐色~暗褐色の覆土の柱穴を若干検出した。柱穴の多くは弥生時代で、一部古代であろう。壺棺墓の遺存度からかなりの削平を受けていると考えられる。I区南西隅とII区では不明確なビットを含むビット群が幅4mの範囲で南北に連なって検出された。複数のビットに弥生土器片が認められ、地形変換線に沿まれた櫛列の可能性がある。ただしすべてが人為的な遺構ではなく、植物痕なども含むと見られる。

出土遺物
出土遺物は少ないが壺棺を含む弥生土器(後期が主体で古式土師器をわずかに含む)が主体で、奈良時代の土師器、須恵器片がわずかにある。総量でコンテナケース2箱である。

まとめ
今回の調査では主に弥生時代後期後半前の集落と墓地を検出した。周辺の成果からは奈良時代の遺構の検出を想定していたので、意外であった。ただし西隅100mの9次調査では弥生時代の集落が検出されており、その縁辺部の可能性がある。壺棺墓域の広がりや、ビット群の性格については、今後の課題となろう。

調査報告書は2010年度刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (13 雜賀隈 51 1:8000)



2. II区全景 (南から)



3. 壺棺墓 (北から)

0927 有田遺跡群第234次調査 (ART-234)

所在地 早良区有田1丁目40
調査面積 745.5m²
調査原因 公園改修工事
担当者 棚本 正志
調査期間 2009.10.13~11.18
処置 記録保存

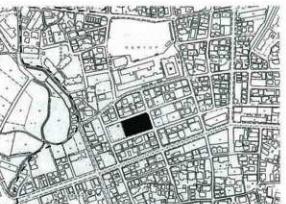
位置と環境 調査地は有田遺跡群の南西部に位置し、現況は標高12.3m前後である。40年前に土地区画整理が実施されており、それ以前の標高は13~14mを呈し、西方へ緩やかに傾斜する畠地と墓地であった。周辺では古墳時代~古代の遺構、遺物が数多く発見されているが、当該地点は1967年九州大学による調査で遺跡消滅の可能性が指摘された。

検出遺構 遺構検出面である地山の黄橙色粘性砂質土(ローム層)上面は、調査地東部で標高12.4m、西部で12.2mで、調査地北側の第158次調査地点と比べて0.6~0.8m低い。遺構は南西部で江戸時代末~明治時代の地域墓、北西部で柱穴と推定される小穴を確認した。墓は有田集落の墓地で、桶や陶器を棺とする墓と火葬墓である。小穴はいずれも計15~20cm、深さ10cmほどで、建物規模の解明にはいたらなかった。

出土遺物 遺物は土師器、施釉陶器、磁器、瓦、黒曜石片などコンテナ2箱が出土した。縦じて小片のため器形や年代を詳細に示す資料にはなっていない。

まとめ 今回の調査では既だった遺構の存在を確認することはできず、1967年に当該地において実施された発掘調査所見を検証追認する結果となつた。遺構の検出状況から、残存する柱穴は深く掘削された結果であり、掘立柱建物の一部であったことは確実である。このことから、区画整理以前の調査地には古墳時代から古代の遺構が数多く残っていたものと考えられる。

調査報告書は2011年度に刊行予定である。



3. 近世墓群 (北西から)

0928 辻ノ花遺跡第1次調査 (TZH-1)

所在地 早良区田村6丁目183-1-184-1
調査面積 145.5m²
調査原因 公園建設
担当者 棚本 義嗣
調査期間 2009.10.16~11.16
処置 記録保存

位置と環境 辻ノ花遺跡は、早良平野を北流する室見川中流岸の沖積地に立地し、西側の貞島川と東側に設置されている農業用水路の間、東西幅約130m、南北長約300mと推定される微高地に展開する遺跡である。今回の調査地点は、遺跡の南端部に位置し、水路西側のA区と東側のB区に分かれている。A区では現水田層下の黄褐色シルト層が遺構面となり、その標高は17.2~17.6mを測る。B区ではA区にみられたシルト層は認められず、現水田層の下層には水性堆積物が顕著であった。なお、地表下約12mの標高16.5mで粗砂混じりの礫層となるが、上位には遺物を含む。

検出遺構 A区は微高地に相当し、中世(12~13世紀)の土坑や溝、路、ピット等を検出したが、調査区が狭長なため、遺構の全容が知れるものは少ない。各遺構より土師器、瓦器、輸入陶磁器等が出土した。また、B区は堆積状況から埋没河川中に位置し、土層観察では南北方向の流路が流水と埋没を繰り返していることが判明した。礫層には弥生時代および中世を主体とする遺物が含まれ、前者の遺物には弥生土器の壺や甌、黒曜石片、後者の遺物としては、土師器、瓦器、須恵質土器、輸入陶磁器、滑石製品がある。

出土遺物 出土遺物は総量コンテナケース2箱である。
まとめ 遺構の占地するA区は沖積微高地に展開する中世集落の縁辺部と推定される。同区の基盤層からは弥生土器が出土しており、該期以降に安定した堆積がすみ、中世になって集落化が図られたことが指摘できる。

調査報告書は2011年度に刊行予定である。



3. B区土層堆積状況 (南東から)

0929 金武青木B遺跡第1次調査 (KAB-1)

所在地 西区大字金武地内
調査原因 墓場整備
調査期間 2009.10.13～2010.2.8

調査面積 547m²
担当者 加藤 隆也
処置 記録保存

位置と環境
金武青木B遺跡は、室見川の支流である竜谷川の上流に位置している。竜谷川の扇状地内には浦江遺跡や金武城田遺跡があり、標高80mを超える調査地からはこれらを眼下に見渡すことができる。

検出遺構
今回の調査で検出された遺構は、竜谷川の旧河道である自然流路の方向が変化し、残された窪地を水田等に利用したと考えられる遺構である。調査区内では、大きく2条の自然流路が確認された。基盤は疊層であり、粗砂と砂質土にて埋没している。調査区の南側では黒色を呈する粘質土が比較的厚く堆積する範囲を検出し、杭状に加工を施した木製品も出土している。堆積層の最下部は黒褐色粘質土層であり、長期間水が淀んでいる状態であったことを示している。

出土遺物
自然流路の出土遺物には、縄文時代石器も見られるが、埋没の時代は古墳時代後期ごろと考えられる。黒褐色粘質土層の下層からは古墳時代の遺物が出土し、上層では中世以降の遺物まで見られる。出土遺物の総量はコンテナケース2箱である。

まとめ
金武周辺では古墳群が密に確認されている地域であり、石室や墳丘などに鉄滓を供獻する古墳の密度が高い地域のひとつである。今回調査された遺構は、金武に古墳群を形成したであろう人々の活動範囲を明らかにするもので、その社会構造を復元する上で貴重な資料を得ることができた。

調査報告書は2011年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (94 金武 441 1:8000)



2. 調査区全貌 (東から)



3. 旧河道 (西から)

0930 岸田遺跡第1次調査 (KID-1)

所在地 早良区早良4丁目地内
調査原因 墓場整備
調査期間 2009.10.27～2010.10.20

調査面積 2207m² (総面積5000m²)
担当者 長家 伸
処置 記録保存

位置と環境
岸田遺跡は扇形に広がる早良平野の付け根に位置し、荒平山と西山に挟まれた、幅300m程の狭隘地の西側段丘面上に立地する。弥生時代～古墳時代の集落を検出した松木田遺跡は小河川を隔てた南東側に位置する。

検出遺構
出土遺物
事業地内における調査対象範囲は丘陵部及び東側の低位部で、2009年度の調査は低位部について行い、調査区は隣接区域を1～3区に分けた。遺構面は耕作土・黒色土包含層を除去した褐色土上面である。遺構面上層の黒色土層は厚さ20～40cmを測り、弥生時代を中心とした遺物を多く含んでいるが、形成時期については不明である。松木田遺跡においても同様の包含層が確認されており、古代に位置付けられている。

検出遺構は弥生時代中期～古墳時代前期の堅穴住居跡・掘立柱建物による集落遺構を主体とする。堅穴住居跡は緩斜面上に比較的整然と配置されており、近接した時期の住居跡による切り合い関係はほとんど認められない。堅穴住居跡は、まず中期前半代～中頃を中心として小型の長方形住居及び円形住居が10棟程認められる。後期～終末期にかけては、ベッド状遺構を有する平面長方形住居が20棟以上確認されている。中でも一辺約8×11m程度を測る大型の住居3棟が整然と配置されており注目される。また、古墳時代前期には略方形の住居が10棟程認められる。このほか古代・中世の掘立柱建物も認められるが、遺構のあり方は相対的に散漫である。

まとめ
2009年度の調査では弥生時代中期～古墳時代前期の堅穴住居跡を中心とした濃密な生活遺構確認し、遺物は土器・石器などコンテナ128箱分出土した。2010年度は西側丘陵部分の調査を行う予定としており、今後の調査成果が期待される。

報告書は2011年度以降刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (早良16 一ツ家 788 1:8000)



2. 調査区全貌



3. 弥生時代住居跡群 (西から)

0931 有田遺跡群第235次調査 (ART-235)

所在地 早良区有田1丁目32-5、32-14 調査面積 270.5m²
 調査原因 個人住宅 担当者 渡本正志
 調査期間 2009.11.19～12.15 処置 記録保存

位置と環境

調査地は、有田遺跡の南西部に位置し、有田台地最高標高点である有田2丁目交差点から西へ150mに立地する平坦な畑地で、標高約13mを測る。調査地を含む周辺は約40年前の土地区画整理時に大規模な変更を受けながらも、弥生時代から中世に至る遺構が残存していることが知られている。特に、本調査地に近接する146次調査および133次調査で検出した横列の延長部が本次調査地で出現する可能性が高かった。

検出遺構

検出した主な遺構は、古墳時代初期の堅穴住居跡2棟、古代と推定される堀と塹に取り付く門跡、柱穴等である。堅穴住居は2棟とも方形の平面形を呈するが全容は不明である。

堀は146次調査で発見された堀の延長部で、柱間は175cmと150cmを測る。門跡は四脚門であるが二戸を設ける特異な形態である。堀や門の柱間はいずれも和銅の制の小尺に合致し、築造時期を裏付ける数少ない根拠といえる。

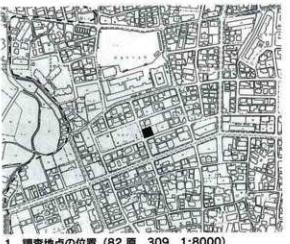
出土遺物

遺物は、土師器、須恵器、石製品がコンテナ2箱出土している。堀および門の築造時期を遺物で積極的に特定できる資料を得ることはできなかった。

まとめ

今回の調査では、矩形に画す都衡正倉施設もしくはそれに先行する施設と考えられる堀および門の所在を明らかにすることができた。堀内における状況は、削平により知ることができないが、建物配置の共通性から、181次調査でみられた総柱の掘立柱建物群が想定されよう。有田遺跡の古代における施設配置の一端が明らかとなり、今後の周辺地域の調査において留意する必要がある。

調査報告書は2012年度に刊行予定である。



3. 古代の堀と門（南東から）

0932 徳永A遺跡群第5次調査 (TOA-5)

所在地 西区徳永地内 調査面積 1,240m² (総面積約5,000m²)
 調査原因 土地区画整理 担当者 森本幹彦
 調査期間 2010.1.5～継続中 処置 記録保存

位置と環境

調査地点は今宿平野西部に位置する徳永A遺跡の北東部であり、南北方向に走る谷と集落が立地する丘陵斜面の調査である。2次や4次調査と一連の谷筋であり、東側の丘陵上には徳永古墳群A群が分布していたとみられる。

検出遺構

2009年度調査区は谷の南部を中心としており、調査区西端で丘陵斜面の集落を検出した。調査区のほぼ全面に暗褐色土の遺物包含層が広がるが、中国陶器を含む10世紀前後の遺物が多い。谷部ではその下層でテラスをなしたような造成面を検出した。古代の谷水田の床土とみられる。包含層下部一部が耕作土とみられるが、面的な検出が困難であり、床土面から谷水田の構造を把握することとした。調査範囲内では7面のテラスがあり、40mで2mほどの段差がある。周囲で水路とみられる溝を5条前後検出した。2009年度はこの谷水田の検出途上であったが、一部トレンチを入れて、谷の下層まで確認したところ、古墳時代末の谷の造成も明らかになった。丘陵斜面には古墳時代後期～古代の集落域が広がっているとみられるが、2009年度の調査ではその一端を検出したにすぎない。掘立柱建物1軒を含む柱穴や土坑4基のほか、堅穴住居の破壊または流出にともなうと考えられる遺物包含層を検出した。

出土遺物

遺物は包含層からの出土が多いが、平安時代の遺物は越州窯系青磁や邢州窯系白磁などの中国陶器と綠釉陶器等を含むものである。瓦、輪の羽口、鉄鋤、土鍬などの出土も少なくない。また、局部磨製石斧、石匙、黒曜石（鹿岳産のほか牟田産や姫島産もあり）の石器や剥片、繩文土器（船元式）といった縄文時代以前の遺物も出土している。

まとめ

10世紀前後の遺物は「主船司」との関連が指摘された1次調査と類似する組成である。谷水田もこれに近い時期のものと考えられる。斜面の集落は糸島地域で特徴的とみられるものであるが、小さい谷筋を単位とするこのような古墳時代後期以降の集落はその性格が今後問題となってくるだろう。



2. 古代の農場風景（南から）



3. 古代の谷水田（東から）

0933 那珂遺跡群第126次調査 (NAK-126)

所在地 博多区東光寺1丁目142-1,142-2 調査面積 72m²
 調査原因 共同住宅建設 担当者 佐藤一郎
 調査期間 2010.2.10~3.3 処置 記録保存

検出遺構 道構検出面は現地表下60cmの黄褐色ローム上面で確認した。

15世紀代の溝SD01は幅3m、深さ0.9m、調査区北端で東へ屈曲する矩形の溝で、延長8m検出した。瓦質土器、備前陶器、中国明代の青磁などコンテナ2箱の遺物が出土した。

調査区北端でSD01と重複するかたちで、地下式坑SK04を確認したが、南側辺の検出にとどまった。長辺は2.7m以上、残存する深さ0.9mを測る。15世紀代の溝SD03は幅2.5m、深さ0.8mの弧状の溝で、延長6m検出した。瓦質土器、備前陶器、中国明代の青磁、粉青沙器などコンテナ2箱の遺物が出土した。4世紀代の溝SD02は最大幅1.8m、深さ1.8mの断面Y字状の溝で、延長6m検出した。4世紀代の土器などコンテナ50箱以上の遺物が出土した。

総量はコンテナケース60箱である。

調査報告書は刊行時期未定である。



1. 調査地点の位置 (37 東光寺 85 1:8000)



2. 調査区全景 (南から)



3. SD02 (南から)

0934 比恵遺跡群第119次調査 (HIE-119)

所在地 博多区博多駅南4丁目166-1他 調査面積 178.5m²
 調査原因 共同住宅建設 担当者 本田浩二郎
 調査期間 2010.2.15~3.10 処置 記録保存

位置と環境

第119次調査地点は比恵遺跡群中央部北側に位置する。周囲では数次の発掘調査が行われており、第91次調査地点の南西側、第39次調査地点の西側に位置する。調査は建物基礎工事により埋蔵文化財が影響を受ける範囲を対象とし、調査面積は178.50m²を測る。調査区の現状は標高6.20m前後で南側に緩やかに傾斜する。表土から60cm程度については近現代の整地層であるため重機により掘削して遺構面の精査を行った。遺構面を精査した結果から、調査区付近は過去に大きな削平を受けていることが判明した。

検出遺構

検出した遺構は弥生時代前期の貯蔵穴を初現として中期後半から後期前半の掘立柱建物と柱穴列と中世以後の井戸遺構などである。貯蔵穴は平面形が長方形を呈し、検出面から底面までは30cm程度の遺存状況である。底部付近はプラスコ状の断面形を呈し、1.5m以上削平を受けていることが分かる。掘立柱建物は桁行3間分を検出したが、梁行方向の柱穴列は確認できなかった。柱穴列はほぼ東西方向を探るものや、やや北側に掘れるものなど大きく四時期に分けられる。各柱穴の遺存状況より後期初頭に大きく造成がなされていることが判明した。

出土遺物

遺物はコンテナケース8箱分の弥生土器・土師器・黒曜石などが出土した。

まとめ

検出した柱穴列は周辺調査区においても延伸部が確認されており、中期後半から後期前半にかけての景観復元において重要な知見を得ることができた。



1. 調査地点の位置 (37 東光寺 127 1:8000)



2. 調査区北側全景 (東から)



3. 柱穴内遺物出土状況 (南東から)

0935 博多遺跡群第190次調査 (HKT-190)

所在地 博多区御供所町19
調査原因 仏殿改修
調査期間 2010.2.15~3.4

調査面積 56m²
担当者 大庭 康時、比佐 陽一郎
処置 埋め戻し保存

位置と環境
宗教法人聖福寺が、史跡聖福寺境内に所在する仏殿について、規模を拡大する改築を計画したため、その基壇拡張部分に対して発掘調査を実施したものである。

検出遺構
古代以前の明瞭な遺構は検出できず、12世紀以前は自然砂丘が露出していたものと思われる。砂層の上層部分には人骨片が散在しており、遺棄葬の場となっていた可能性がある。

明瞭な遺構面が形成されるのは、13世紀代である。これは、聖福寺の創建時期と近く、その寺域に取り込まれたことを示すものといえる。火災と復興を示す13世紀頃の焼土層と硬面化が確認できたが、その後、17世紀後半と見られる粘土整地面まで地表の痕跡は残っていなかつた。

出土遺物
出土遺物はコンテナケース7箱である。土器、陶磁器、瓦のほか、鉄、銅製品、人骨などが出土した。

まとめ
聖福寺の創建から近世に至る歴史の中で、火災と再建は繰り返されたにもかかわらず、明瞭な地業面はほとんど検出できなかった。一方で、砂丘に由来すると考えられる砂質土層までは比較的浅く、現地表から2~4m掘り下げないと砂丘面に到達しない通例の博多遺跡群の状況とは大きく異なっている。

これらの点から、聖福寺は、もともと砂丘の高い部分を選んで創建されたものであり、その後の復興・再建に当たっては、大規模に旧地盤を削平して、すなわち地面を削り均して地盤を更新したものと考えざるを得ない。聖福寺の旧地盤面は各時代ともほとんど失われているものであろう。

調査報告書は2010年度に刊行予定である。



0936 女原古墳群D群第1次調査 (MBK-D-1)

所在地 西区女原地内
調査原因 重要遺跡確認
調査期間 2010.2.16~3.12

調査面積 1,620m²
担当者 音波 正人
処置 現状保存

検出遺構
今回の調査は今宿地区古墳群の保存を目的とした確認調査で、対象とした古墳群は女原古墳群D群で、現況の測量と石室の遺存状況の記録作業を行った。本古墳群は墳丘が密接して構築されており、密集型の群集墳と言える。対象となった古墳は14基で、石室は横穴式石室で、すべて開口した状態であった。墳丘規模は直径10m程である。副葬品は確認することはできなかったが、石室の形態などから築造時期は6世紀前半から後半と考えられる。

まとめ
今回調査では遺物は出土しなかった。

女原古墳群D群は6世紀代の古墳40基余りがありかなりの密度で分布するもので、昨年度調査した飯氏古墳群B群とは異なる様相を見せる。今宿地区古墳群の形成過程を考える上で貴重な資料となる。

調査報告書は2011年度に刊行予定である。



0937 老司古墳第6次調査 (RGK-6)

所在地 南区老司4丁目571-2他
調査原因 災害復旧工事
調査期間 2010.2.4~3.3

調査面積 500m²
担当者 井上 薫子 二宮 忠司
処置 現状復旧

位置と環境

老司古墳は福岡平野の南部、那珂川に面した低丘陵に立地する古墳時代中期初頭の前方後円墳である。墳丘の長さ75m、後円部径42m、高さ8mで、前方後円形の下段と中段の上に円形の上段をのせた後円部3段、前方部2段の構造を成している。前方部に基盤部に基盤部に3基の堅穴系横口式石室が設けられている。この石室は従来の堅穴式石室に横口を取り付けて追葬が可能としたものである。老司古墳は地域を代表する大型の前方後円墳であり、わが国最古の横穴系石室であることから、墓制の変遷を考える上で極めて重要な古墳である。

検出遺構

今回の調査は、「平成21年7月中国・九州北部豪雨」により被災した老司古墳の災害復旧事業に伴い行われたものである。この豪雨により、古墳くびれ部の両側延長60m程にわたり法面が崩壊し、崖面が露出したため、国庫補助金による災害復旧工事を行うこととなった。その内容は露出した崖面を整形し、多機能フィルターと植生土のうににより復旧を行うというものである。崖面の整形の際、重機によって整形した後人力による精査を行った。古墳くびれ部の両側ともには、表土、葺石、一部盛土、地山という層序が確認された。

出土遺物 表土及び葺石層から埴輪及び土師器片少量が出土した。総量でコンテナケース1箱である。



1. 調査地点の位置 (40 老司 850 1:8000)



2. 作業状況(崩落土面 東から)



3. 法面復旧作業 (南東から)

0938 井尻B遺跡第35次調査 (IGB-35)

所在地 南区井尻1丁目764-2
調査原因 個人住宅建設
調査期間 2010.3.8~3.29

調査面積 61m²
担当者 屋山 洋
処置 記録保存

位置と環境

井尻B遺跡は福岡平野の中央を北に流れて博多湾に注ぐ那珂川の右岸で、川に沿うように細長く伸びる台地上に位置する。南側に隣接する17次調査では弥生時代中期から古墳時代前期の集落や古代の官衙が出土しており、弥生時代の遺構からはガラス勾玉や広型銅戈の鋒型の他に小銅鐸などが出土しており、古代官衙では区画溝や大型掘立柱建物が検出され、溝から「豊評」「山部評」と古代評名が線刻された瓦が出土している。

検出遺構

今回の調査でも17次調査と同様に弥生時代中期～後期の集落と17次調査地点から続く古代の溝が出土した。弥生時代の遺構は堅穴式住居が5棟、土坑が数基、柱穴が出土した。堅穴式住居は中期～後期前半の時期の建物が4軒と、後期後半が1軒で、中期中頃の1軒は検出面からの深さが80cmを測る。平面形は方形を呈し、南西隅を除く3つのコーナーから放射状に溝が伸びる。貼床も良好に残っていたが主柱穴は検出できなかった。後期後半の住居は建物のほとんどが調査区外に延びており規模は不明であるが、2辺もしくは3辺にベッド状遺構を持つタイプで、1辺は7m以上を測る。古代の溝は南北方向で、南側の調査区から続いているが、今回の調査で更に北側へ延びることが判明した。

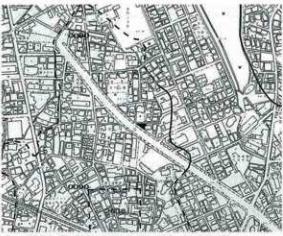
出土遺物

出土遺物は弥生時代中期の堅穴式住居から中期中頃の土器がまとめて出土した。また古代の溝から土師質の瓦が1点出土した他、須恵器大甕片や弥生土器などが出土している。総量はコンテナケース9箱である。

まとめ

今回の調査区は既に出土した内容としては17次調査とはほぼ同じであるが、17次調査では弥生時代中期の遺構は貯蔵穴のみであったのが今回堅穴式住居も確認できたこと、また古代の溝が更に北側に延びることが判明した。

調査報告書は2011年度以降に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (25 井尻 90 1:8000)



2. I 区全景 (東から)



3. II 区全景 (西から)

0939 周船寺遺跡第20次調査 (SSJ-20)

所在地 西区周船寺1丁目560-1
調査面積 170.5m²
調査原因 個人住宅建設
調査期間 2010.3.8~3.20
担当者 潤本 正志
処置 記録保存

位置と環境

調査地は、雷山山系を水源とする河川によって形成された沖積地である糸島平野の東端部に広がる周船寺遺跡の中央に位置する。調査地を含む一帯は、40年前までは水田が広がっていたが、現況は住宅街が広がり、当該地も住宅地で標高8.7mを測る。遺跡の南半部では弥生時代を中心とした集落跡や堀柵墓が数多く発見されており、縄文時代後晩期の遺物も出土している。

地表F60cmに層厚50cmを測る遺物包含層があり、その下層の淡緑灰色粘土層上面で遺構検出を行った。標高は8.1mである。

検出遺構

検出した主な遺構は、弥生時代前期の土坑や多数の柱穴・ピットである。土坑はいずれも楕円形状の平面形を呈するが、性格は不明である。柱穴には板石や板を礎板にしているものもある。

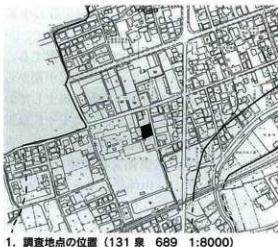
出土遺物

遺物は、縄文土器、弥生土器、須恵器、石製品等がコンテナケースに2箱出土し、弥生時代初頭に比定される物が多くを占める。また、黒曜石の剥片や石核および磨石が多く、遺跡の性格を示すものである。各遺物の大半は包含層からの出土による。

まとめ

今回検出した土坑やピットさらには遺物の出土状況は弥生時代の集落の存在を強く示すものであるが、建物規模やその広がりは明らかでない。検出したピットの大半は柱穴の可能性が高い。遺構、遺物などの状況から、集落は本調査地周辺に広く展開していると思われる。これまでの調査で、周船寺遺跡南半部での様相が明らかになっていく中、初めて遺跡中央部における状況を明らかにすることができたとともにきわめて貴重な資料を得ることができた。

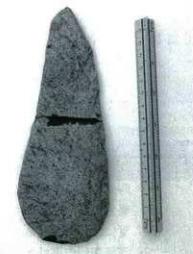
調査報告書は2012年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (131 東 689 1:8000)



2. II区調査区全景 (東から)



3. 出土遺物 (石製品)

0940 奈多砂丘B遺跡第2次調査 (NTB-2)

所在地 東区大字奈多
調査面積 55m²
調査原因 学術発掘 (市史)
調査期間 2010.3.15~3.21
担当者 宮本 一夫
処置 埋め戻し保存

位置と環境

奈多砂丘B遺跡は三苦を基点とし志賀島に向かって延びる「海ノ中道」と呼ばれる砂丘上に位置し、玄界灘に面している。

検出遺構

遺構は検出されなかった。遺構が存在した地点は、砂丘の最頂部であると想定されるが、既に浸食され、崩壊したものと判断される。

出土遺物

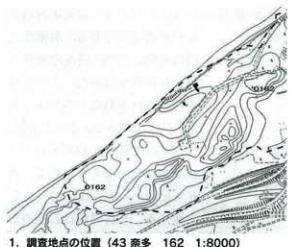
弥生後期終末期の西新式を中心としながら、一部には下大隈式など弥生時代後期後半の土器を含んでいる。石器は砥石が数点見られる程度でほとんどない。また、鉄滓が僅かに出土した。

総量はコンテナケースで9箱である。

まとめ

海岸に接する砂丘を調査した結果、砂丘の頂部から後背湿地に向けて斜面堆積した弥生後期後半期の遺物包含層が確認できた。砂丘頂部に近いほど遺物の量が多いとともに土器破片も大型であるところから、砂丘最頂部に住居址などの遺構が存在した可能性が考えられる。しかし、既に砂丘の最頂部は波打ち際にによって浸食されており、遺跡の破壊が急速に進行していると思われる。

調査報告書は、23年度に『市史研究ふくおか』第6号において掲載する予定である。



1. 調査地点の位置 (43 納多 162 1:8000)



2. 3層遺物出土状況 西から



3. 第1トレンチの層位 西から

0941 谷上古墳群A群第1次調査 (TNK-A-1)

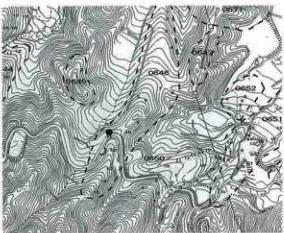
所在 地	西区今宿町字谷上地内	調査面積	224m ²
調査原因	重要遺跡確認	担当者	菅波 正人
調査期間	2010.3.16~3.30	処置	現状保存

検出遺構 今回の調査は今宿地区古墳群の保存を目的とした確認調査である。対象とした古墳は谷上古墳群A群11号で、現況の測量と石室の遺存状況の記録作業を行った。この古墳の石室は搬入を受け、石材が散布する状況であった。墳丘は谷頭に当たる場所で、かなりの傾斜面に立地する。

ま と め 谷上古墳群A群は5世紀後半～6世紀代の古墳10基余りが分布するもので、古墳群の北側には6世紀前半の前方後円墳である谷上B-1号墳が立地する。当古墳群は石室の形態などから谷上B-1号墳に先行すると考えられるものもあり、丘陵部に造られるようになる小型の前方後円墳との関係、古墳群の形成過程を考える上で貴重な資料となる。

今回調査では遺物は出土しなかった。

調査報告書は2011年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (121 鷹氏 716 1:8000)



2. A11号墳現況 (南から)



3. A11号墳石室 (北から)

7307,7610カルメル修道院内遺跡第1・2次調査 (KMS-1, 2)

所在 地	城南区神松寺三丁目	調査面積	107.2m ²
調査原因	不時発見、範囲確認	担当者	山崎 純男
調査期間	1974.1.9~11・1976.7.1~15	処置	記録保存

1.はじめに

ここに報告するカルメル修道院内遺跡出土の腕輪は、昭和51年の2次調査で出土、1次調査の報告の註において銅製の腕輪として報告したが、その後の科学的分析で、錫製であることが判明した。また、本資料は金海式壺棺に切られた小児用の木棺墓からの出土で、日本列島の金属器の中では最も古い段階の資料の一つである。加えて、形状はこれまで出土した銅製腕輪とは異なり、一見、南海彦貝輪に類似するもその系譜は明かにし難い。このように本資料は材質・時期・形状・小児に着装されていた可能性が強いこと等、弥生時代腕輪の解明に欠かすことのできない重要な問題点を内蔵している。

しかしながら、筆者の怠慢と諸般の事情から、発見から30年以上経過した現在なお未報告のままであった。今回、運びきながら発表の機会を得たので、遺跡の調査報告とともに銅製腕輪について若干の検討を行い、加えて、櫛井川流域の弥生時代について考察を加えてみたいと思う。

2. 調査に至る経過

第1次調査

昭和51（1974）年1月8日、福岡市西区片江（当時）に所在するカルメル修道院からの通報により、同日午後、事前審査担当の山崎が同院の案内で現地踏査。現地は同院内の丘陵頂部（標高28.2m）よりやや下った南斜面、ミカンを植樹するために掘られた穴（径約2m、深さ約1m）数ヶ所のうちの一つに壺棺が出土。同院の適切な处置によって、壺棺発見後は掘削作業を中断、壺棺は発見に際して底部の一部を破損するが、良好な状態で現状保存されていた。山崎は壺棺であることを確認するとともに、ミカン穴の断面観察によって、さらに多数の埋葬遺構が存在することを確認した。修道院からの要請もあり、壺棺墓の処理について協議を行い、植樹用の穴は現在掘削した以上は掘らないということで、既に露出している壺棺については緊急調査を実施することにした。

緊急調査は翌9日より11日までの3日間にわたって実施した。調査は墓坑の検出作業から始めたが、作業途中において壺棺墓の南に接してさらに小児用壺棺1基が出土し、計2基の壺棺墓を調査した。この報告はすでに「福岡市カルメル修道院内遺跡調査報告」（『京ノ隈遺跡』段谷地所株式会社 1976）として公表しているが、遺跡の理解のため改めて報告に加えることにした。

第2次調査

昭和51（1976）年、カルメル修道院の改築に伴う事前調査として、弥生時代墓地の範囲確認調査を7月1日～15日の15日にわたりて実施した。改築予定地は第1次調査で確認した弥生時代墓地の上部の丘陵頂部・尾根を削平し、平坦部を形成する計画であったので、まずは頂部から尾根にかけて幅2m、長さ20mの試掘トレンチを設定した。このトレンチは表土下すぐく花崗岩バイラン土の地山があり、遺構・遺物は皆無であった。そのために弥生時代墓地との関係を把握するため、先に設定したトレンチに直行するトレンチ、幅2m、長さ20mを南斜面の西側に設定、表土層を除去した。その結果、頂部に近い部分は表土下すぐく花崗岩バイラン土の地山となっていて、先のトレンチと大差ないが、トレンチの中位以下には、墓坑と考えられる遺構が全面に認められた。そこで、確認された遺構

を中心調査区を東側に拡大し、墓域と遺構の状態を確認するための調査を実施した。その結果、墓域は第1次調査の1号墓陪塚墓を北限として、その南側に展開することが確認できた。遺構の遺存状態は極めて良好である。第2次調査で確認した弥生時代の墳墓は小見用墓陪塚墓1基、木棺墓6基である。木棺墓の1基からは錫製の腕輪3点が出土している。なお、墓域の埋土中から三段尖頭器、石片等の旧石器時代の遺物が出土している。旧石器時代の包含層の確認に努めたが、包含層は確認することができなかった。

調査は山崎があたり、飛高憲雄、力武卓治の協力を得た。また、発掘作業には修道院の方々の全面的な協力を得た。九州産業大学の森貞次郎教授には現地に来ていただきご指導いただいた。記して感謝の意を表する

3. 遺跡の位置と環境

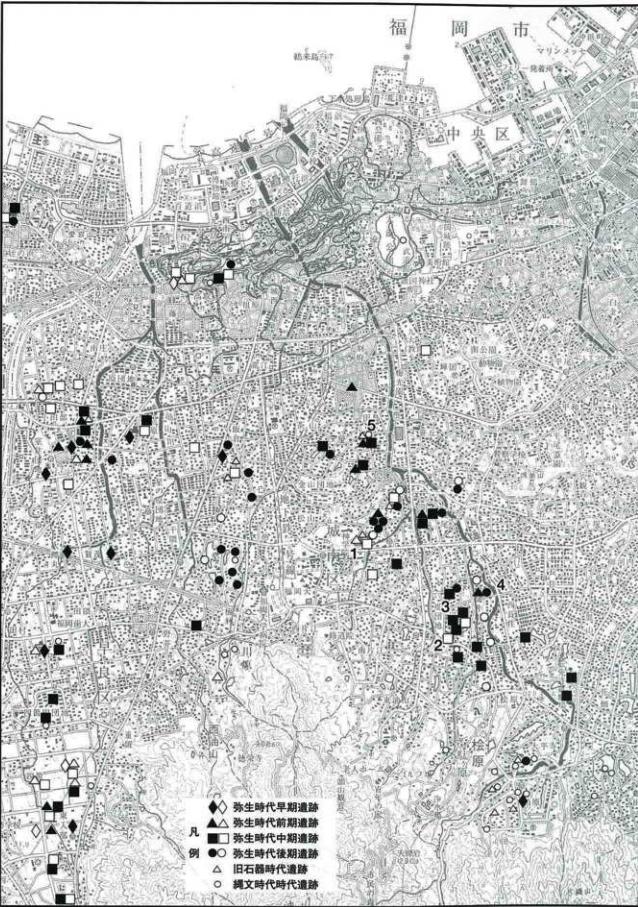
カルメル修道院内遺跡は福岡市城南区神松寺三丁目に所在する。福岡平野と早良平野を二分する鴻巣山を中心とした低丘陵の西側に位置している。この地域は油山に源を発する樋井川・駄ヶ原川・一本松川・片江川が北流し、これら小河川の流域には、小河川に沿って狭小な冲積低地が開析されている。一般にこの地域は樋井川流域として認識されている。早良平野に属し、平野の東部を占めているが、前述したように低丘陵とその間に形成された狭小な冲積地によって構成され、平野部とは一線を画し、一つのまとまりのある地域となっている。また、樋井川流域は古においては和名類纂抄に記されている早良郡見伊郷に比定されることを諸氏の認めるところである。

カルメル修道院内遺跡は樋井川流域のほぼ中央部、樋井川が一本松川と分岐し、さらにその南側で一本松川と片江川が分岐する地点の西側から南西側へのびた低丘陵上の西端に立地している。現海岸線から直線距離にして約5.3km内陸部に入り込み、樋井川の中流域にある。

現在、この地域は都市開発が進み、開発に伴う発掘調査も数多く実施され、樋井川流域における考古学的な歴史的環境はかなり明らかになってきた。以下、周辺遺跡の概要についてみていく。

樋井川流域と人間のかかわりは、他の地域同様に旧石器時代後期までさかのばる。旧石器時代の遺跡は樋井川上流の油山山麓部をはじめ、流域の低丘陵部に発見されている。上流域の柏原遺跡群ではC・F・K・M遺跡からナイフ形石器、台形石器、細石刃、細石核、刃器等が出土している。中流域では、本遺跡や同一丘陵の神松寺遺跡からは三段尖頭器、削片等が、やや下流の田島B遺跡で細石器が出土している。遺跡数は増加傾向にある。拠点となる遺跡は現在のところ発見されていない。

縄文時代の遺跡はこれまで、福岡城内から早期・押型文土器、大濠公園の濠内より中期・阿高式土器各1点が出土しているにすぎなかった。最近の緊急調査で急増しつつある。樋井川上流域では柏原遺跡群の中に多くの縄文時代遺跡が発見されている。時期的には草創期～晩期にかけて一応そろっているが、多いのは早期・押型文土器の段階である。草創期はE・F・K遺跡で土器、石器が出土している。早期はA・E・F・K・M遺跡で住居址、集積炉等の遺構とともに多量の押型文土器をはじめとする早期土器、石器が出土している。注目されるのは、少量であるが南九州の土器が出土していることである。前期～後期は板垣に遺跡数が少なくなる。前期はK・L遺跡で薄式土器がまとまって出土し、中期はK遺跡で阿高式土器が出土している。後期はM遺跡で阿高系土器が數点出土しているに過ぎない。晩期はA遺跡から刻目突帯文土器、石器、K遺跡から黒川式土器、石器が出土している。このほかは柏原遺跡群に連なる油山山麓に羽黒神社、鳥越古墳、早苗田古墳群、タカバニ塚古墳、大牟田、箱の池、田島B遺跡に押型文土器が出土し、田島B遺跡から前期土器、弦状耳飾りが出土している。早苗田古墳群からは後期後半の遺物が少量出土し、笠栗遺跡から晩期土器が出土している。流域の低丘陵部に縄文時代遺跡の発見は少ない。宅地造成等の開発が比較的早い段階に進められたこともあるが、弥生時代以降の遺跡によって破壊された可能性もある。弥生時代の遺跡は本報告のカルメル修道院内遺跡をはじめ有力な遺跡が存在する。樋井川流域における弥生時代に



第1図 遺跡分布図
(弥生時代白ヌキは墓地)

1. カルメル修道院遺跡
4. 樋井川A遺跡

2. カリトーラ遺跡
5. 田島A遺跡

3. 宝台遺跡

については後章で検討するのとここでは省略する。

古墳時代について低丘陵の頂部に造営された樋井川流域の首長系列の古墳と油山山麓部に展開する群集墳が注目される。首長系列の古墳としては田島の京ノ隈古墳がある。粘土都を内部主体とする前方後方墳で4世紀後半に比定される。本遺跡の立地する丘陵先端部に神松寺御陵古墳がある。複室の横穴石室を内部主体とする前方後円墳で、6世紀中頃に比定される。樋井川上流域、柏原遺跡群のA-2号墳も横穴石室を内部主体とする前方後円墳、6世紀後半の築造と考えられる。現在のところ首長系列の古墳は連続していない。未発見あるいは既に消滅してしまった古墳もあると考えられる。群集墳は大牟田・四十塚・柏原・大平寺・井出・片江・瀬戸口・鳥越・早苗田・七隈・倉瀬戸・大谷・駿ヶ原古墳群等の支群にわかれで約150基が存在している。これらの古墳の築造は6世紀後半から7世紀前にかけての築造である。これら古墳を築造した人々の集落はあまり明確ではないが、浄泉寺・片江辻・カルム修道院内遺跡第2次調査区、柏原M遺跡等で確認されている。柏原遺跡群では大型の掘立柱建物1棟が確認されているが、他の部分が古代の大規模な造成が行われているために、古墳時代の遺構が消滅している。生産活動について注目されるのは、古墳に供献された鉄滓の存在である。発掘調査された大谷・影塚・七隈・倉瀬戸・大牟田古墳群では石室や羨道、墓道に鉄滓・鉄塊が供献されていて、これらの古墳と鉄生産、加工と関係が深いことが指摘できる。

古代の遺跡も鉄生産と大きな関係がある。並渠遺跡や柏原M遺跡では製鉄炉・鍛冶炉等の製鉄関連の遺構・遺物が多数検出されている。また、柏原M遺跡では前述したように大規模な造成が行われ、31棟以上の掘立柱建物が検出されている。晚唐三彩・越州窯・长沙窯等の中国産陶磁器をはじめ、重要な遺物が多量に出土している。墨書き器の中には「郷長」「左原補」等があり、早良郡毘伊郷の郷長に関連した遺跡である。このほか、先の京ノ隈古墳の後方部には経塚が構築されている。

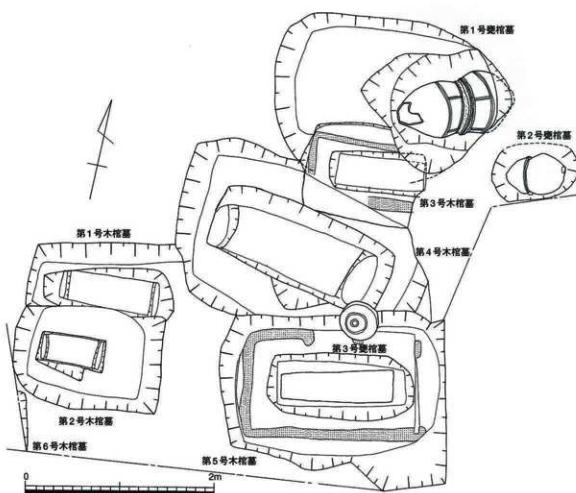
4. 弥生時代墳墓群の調査

(1) 木棺墓・壺棺墓の分布

調査した弥生時代の墓の全体図は第2図に示した。調査の主眼が遺跡北側の範囲確認と一部の内容確認であること、調査範囲が樹木等のために限界され狭いために墓地の全体は把握できない。よって、その拡がりを予測的にみていくことにする。

墓地は丘陵南斜面を利用して構築され、埋葬遺構は相互に切りあい関係にある。第1次調査で確認した1号壺棺墓を北限として、それより南側に展開している。調査ではその一部を完掘したが、東側、南側にはさらに遺構は延びている。地形的には東側に小さな谷があり、墓地の部分がやや舌状に張り出しているので、張り出した部分までは拡大すると考えられる。南側には第2次調査区から約20m離れた標高17mのところから15mの部分については約15mの幅で第4次調査区が設定されているが、この部分には埋葬遺構は検出されていない。よって、南側は最大で20m前後の広がりが想定できる。西側は教会建設の宅地造成のために大きく削り取られていて詳細は明らかにし難いが、西側端に墓坑の一部が確認されているので、さらに西側に拡大していたことは疑いない。木棺墓の分布状態からすればそう大きくは拡大しないと考えられる。以上を総合するとこの墓域は南北20m、東西20~30mの範囲に収まるものと考えられる。埋葬遺構が同じような密度で存在すると想定すれば、60~90基の埋葬遺構が存在したと考えられる。

検出した弥生時代墳墓は木棺墓と壺棺墓でそれぞれ分布範囲が異なる。木棺墓はいずれも壺棺に先行するもので、壺棺墓に切られている。また、相互に切りあい関係にある。これに対して、壺棺墓は散發的で、木棺墓とは切りあうものの、壺棺墓には切りあい関係は見られない。壺棺墓の分布は東に寄っている。木棺墓、壺棺墓の切りあい



第2図 第1・2次調査弥生時代墓全体図(1/40)

関係は個別の説明で述べる。

(2) 遺構各説

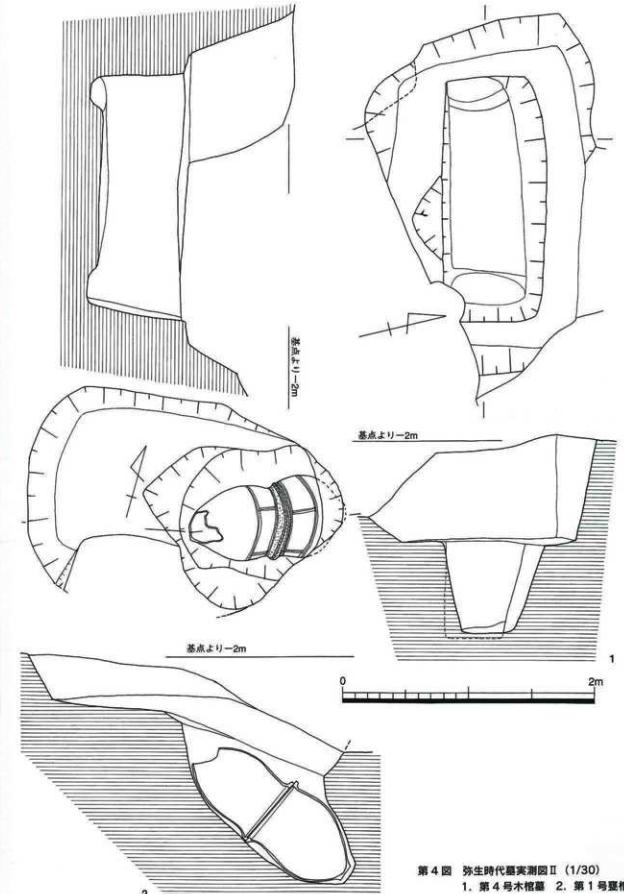
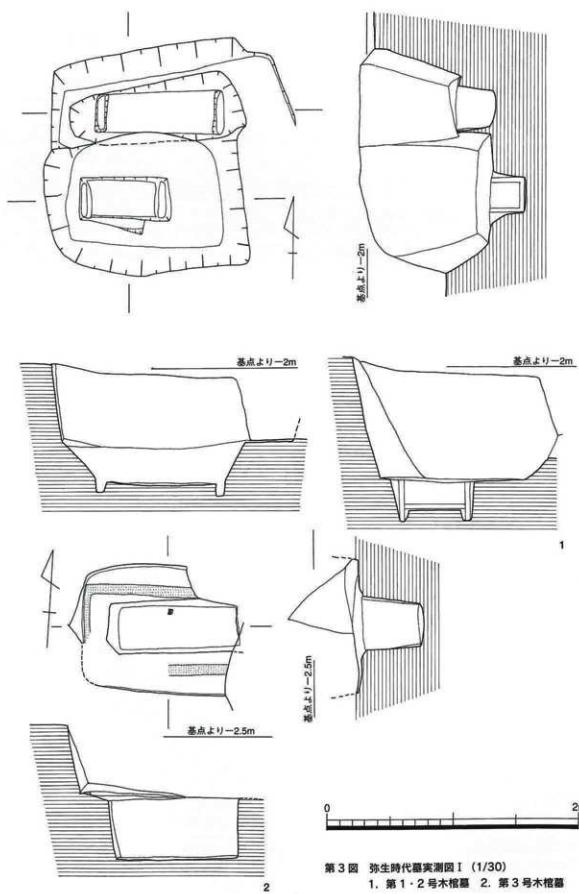
木棺墓

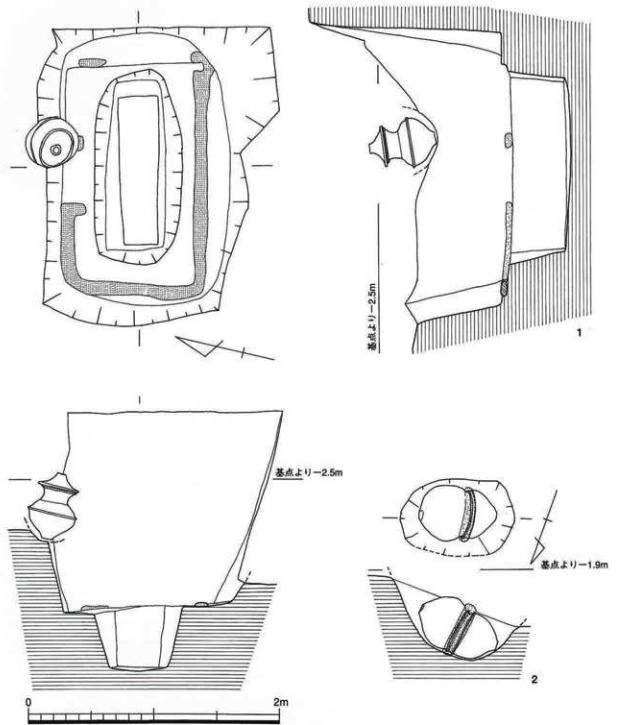
第1号木棺墓(第3図-1)

最も西側の最上段に検出した木棺墓である。第2号木棺墓と第4号木棺墓が重複関係にあり、共に第1号木棺墓を切っている。二段に掘り込まれ、一段目の墓坑は東西に細長い長方形をなすと考えられる。長軸192cm、短軸80cm以上、深さ70cmを測る。二段目掘り方は長軸140cm、短軸は東側で54cm、西側で37cmの長楕円形をなす。深さ30cmを測る。底面は平坦で長軸103cm、小口には幅9cm、深さ10cm前後の掘り込みがみられる。小口東側幅35cm、西側が30cmを測り、東側が若干広い。底面が木棺の規模を示していく、大きさから小耳用の墓と考えられる。

第2号木棺墓(第3図1)

第1号木棺墓のすぐ南側に検出した木棺墓である。第1号木棺墓を切っている。二段に掘り込まれ、一段目の墓坑は長軸157cm、短軸115cm以上の隅丸長方形プランをなす。深さ98cm、底面は長軸123cm、短軸91cmの隅丸長方形をなす。底面の中央部や西側に片寄って木棺が安置される。二段目掘り方は木棺に合わせて掘り込まれている。長





第5図 完生時代墓実測図(1/30) 1. 第5号木棺墓・第3号木棺墓 2. 第2号木棺墓

軸53cm、短軸35cmの長方形で南側に15cm程の三角形の張り出しがみられる。深さ26cm。底面は平坦で長軸53cm、小口には幅10cm前後、深さ9cmの掘り込みがみられる。木棺の板材は粘土との置換現象がみられる。木棺は厚さ3cm前後の板材を組み合わせたもので、長軸56cm、幅は東側が28cm、西側が27cm、底板の存在も確認できる。規模から小児用の墓と考えられる。

第3号木棺墓(第3図2)

第1号木棺墓のすぐ南側に検出した木棺墓である。第1号木棺墓、第4号木棺墓と重複関係にあり、共に切られている。二段に掘り込まれているが、一段目の墓坑は第1号木棺墓、第4号木棺墓の一段目墓坑によって切られ、その痕跡を残すのみである。現状で一段目の墓坑は長軸125cm以上、短軸104cmの長方形をなすが東側は調査区外に延び確認していない。深さは最も遺存状態の良い所で55cmを測るが、大部分は数cmを残すのみである。一段目掘り方の底の平坦部には棺蓋の粘土の目張りがコの字形に残っているが、西南部は第4号木棺墓の掘り方によって、東北部は第1号木棺墓の掘り方によって失われている。東南部については未掘のため不明。元来は棺を閉むように存在していたと考えられる。粘土は白色の良質の粘土を使用している。二段目掘り方は長軸103cm以上、短軸43cmの長方形をなす。深さ50cm。木棺の痕跡はないが、棺は掘り方より一まわり小さくと考えられる。規模からは小児用の墓と考えられる。北側側壁中央部に錫製輪3個が重なり合って出土した。最も上から出土したものが小さく、順次大きくなる。出土状況からすれば着装されていた可能性が強い。木棺からは棺の状態から頭位がすべて東にあると推測されることを考慮すれば、本例も東に頭位をおいた可能性が強い。そうすれば右腕に着装されていたと考えられる。

第4号木棺墓(第4図1)

今回調査した中でも最も大きい木棺墓である。第1号木棺墓、第3号木棺墓、第1号木棺墓、第3号木棺墓、第5号木棺墓と重複関係にあり、第1、3号木棺墓を切り、第1、3号木棺墓、第5号木棺墓に切られている。墓坑は二段に掘り込まれ、一段目掘り方は長軸280cm、短軸180cm以上、平面形は一部破壊されているが長方形をなすとみられる。深さ87cmを測る。底面は長軸230cm、短軸158cmの長方形をなす。二段目掘り方は長軸195cm、短軸85cmの長方形、小口幅に違いがあり、東側が74cm、西側が66cm、深さ73cmを測る。小口には幅27cm、深さ10cm前後の掘り込みがみられる。木棺の大きさは特定できないが長軸160cm前後、東側小口58cm、西側小口46cm、深さ70cm前後になると考えられる。頭位は東においていた成人用の墓と考えられる。

第5号木棺墓(第5図1)

第4号木棺墓と第3号木棺墓と重複関係にあり第4号木棺墓を切り、第3号木棺墓に切られている。墓坑は二段に掘り込まれ、一段目掘り方は長軸236cm、短軸192cmの長方形をなすが、南壁部分は未掘の遺構との切りあいがみられ、やや歪である。遺存度は極めて良好で、深さは153cmを測る。底面は長軸218cm、短軸133cmの隅丸長方形をなす。床面には壁に沿って、一部は部分的であるが良質の粘土帯がめぐらされ木蓋の目張りがおこなわれている。目張りの状態から木蓋は3枚存在する。二段目掘り方は長軸154cm、短軸70cmの隅丸長方形、深さ50cmを測る。木棺は床面の痕跡から長軸118cm、東側小口が92cm、西側小口が96cm、深さ50cm前後のものと考えられる。棺はやや小さいが埋葬すれば成人の埋葬も可能である。頭位は東においていたと考えられる。

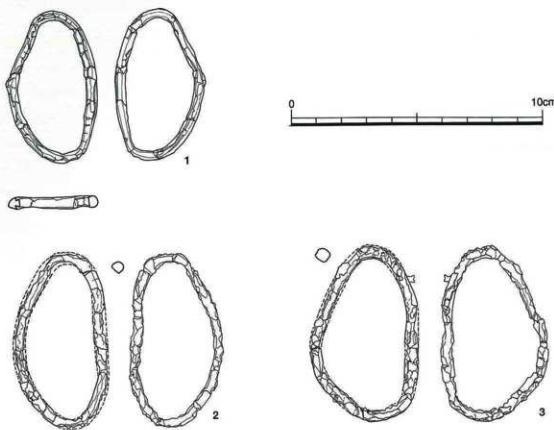
第6号木棺墓

第2号木棺墓のすぐ南側に掘り方の一部を確認した。西側は修道院建設のための造成で削られ、ほとんど遺存していないため未発掘。詳細は不明。

墓棺墓

第1号木棺墓

本遺跡の発見の契機になった木棺墓である。墓地の最も北側に位置する。第3号、第4号木棺墓と重複関係にあり、木棺墓を切っている。第1次調査では墓坑の全体形は明らかにできなかったが、2次調査において、ほぼ全形を知ることができた。墓坑は長軸166cm、短軸120cmの隅丸長方形、深さ23cmを測る。墓坑底の東に片寄った中央部から横穴が掘り込まれる。横穴は41度の傾斜を持ち、奥行き24cmを測る。墓坑上縁から墓坑底までの深さは123cmを測る。



第6図 第3号木棺墓出土銅製腕輪実測図(2/3)

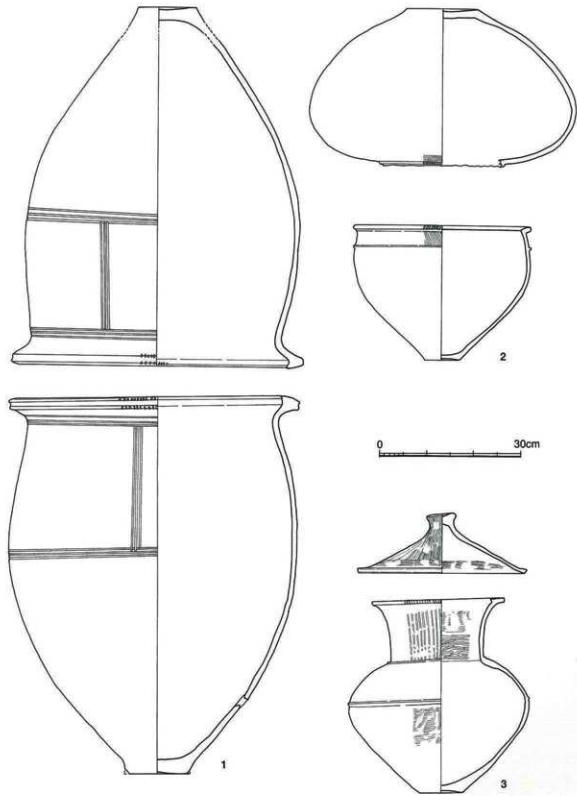
壺棺は横穴にほとんど余裕がない状態で挿入、埋置される。壺棺は同形同大の大型の壺2個を合わせ口にした成人用の壺棺で、接合部に白色の良質の粘土で目張りが施されている。発見時に上壺の底部が破損され、若干の土砂が流入しているが、遺存状態は良好であるが人骨等は認められない。下壺の底部近くに焼成後の穿孔があるが、穴は土器破片と粘土で塞がれている。壺棺は2個合わせた全長は約1.5mを測り、主軸方向をN-68°-Eに置き、41度の傾斜をもって埋置される。

第2号壺棺墓

第1号壺棺墓の東南に約30cm離れて存在する。墓坑は長軸90cm、短軸60cmの楕円形プランをなす。深さ65cmを測る。壺棺は下壺に鉢形土器を上壺に頸部以上を打ち欠いた壺形土器の胴部以下を使用している。接合部には白色の良質の粘土がめぐらされる。上下合わせて全長70cmを測る小児用の壺棺墓である。棺内には土砂の流入は見られなかったが人骨等の存在はない。主軸方向をN-71°-Wにとり、25度の傾斜をもって埋置されている。

第3号壺棺墓

第1号壺棺墓の南約2m離れた所に存在する。第4・5号木棺墓と重複関係にあり、木棺墓を切っている。第4号木棺墓と第5号木棺墓の切りあい部分に、ほぼ垂直に近く状態で埋置されているが、墓坑については充分把握することができなかった。下壺に広口の壺形土器を使用し、口を蓋形土器で塞いでいる。全長54cmを測る小児用の壺棺墓である。



第7図 壺棺実測図(1/8) 1. 第1号壺棺 2. 第2号壺棺 3. 第3号壺棺

(3) 遺物各説

錫製腕輪（第6図）

第3号木棺墓の北壁中央部から3点重なり合って出土した。出土状況から小児の右前腕部に着装されていたと考えられる。遺存状態が悪く、最も上にあった1点が形状を残しているが、他は表面が腐食し、かろうじて芯が残っている。1を除いた2点は接合に難点があるが、全体形を大きく変えるもので現状のまま報告する。発掘当初は銅製の腕輪と考えたが、科学分析の結果、錫製であることが判明した。分析結果は後述のとおりである。第6図1-3に実測図を示した。形状は点とも類似している。保存状態の良い1から、断面形は内側が直線的で、外側は丸みをもっている。鍛造品と考えられる。全体に長楕円形をなしているが、長辺の一辺の中央部が張り出し全体形はゴホウラ等の貝輪の形状を思わせる。1は外径で長径6.1cm、短径3.6cm、内径で長径5.3cm、短径2.7、2は復元して外径で長径7.1cm、短径3.81cm、内径で長径6.2cm、3は外径で長径7.0cm、短径4.3cm、内径で6.0cm、短径3.4cmを測る。

壺棺（第7図）

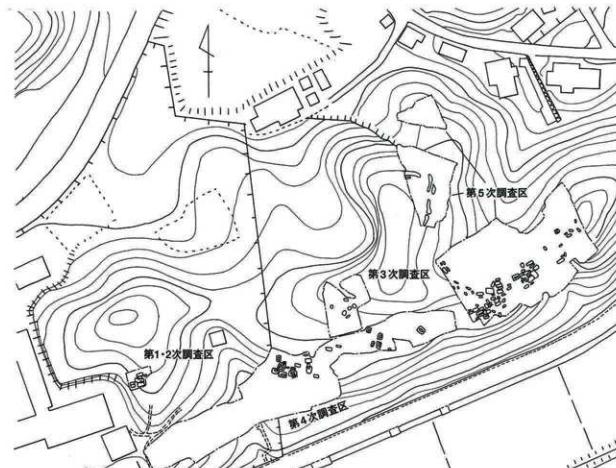
第1号壺棺墓に使用された壺棺はいわゆる金海式壺棺と呼ばれる壺形土器で、同形同大の大型壺を合わせ口にしたものである。下壺は口径61cm、底部径14cm、器高80cm、胴部最大径62cmを測る。口縁部は強く外反し、口縁上面には粘土を貼り付け肥厚させ、断面方形をなす。口縁部外面は中央部をくぼませ、上端に刻目を施す。文様は頸部と胴部に3本単位の沈線を施し、その間を3本の縦の沈線で結ぶもので、縦位の沈線は5ヶ所に認められる。器形的には胴部の膨らみはあまりなく、最大径は胴中央部にあり、器形的に中期の壺棺に近い。胴部および底部付近の一部に刷毛目調整痕を残すが、全体に横一斜方向のヘラ研磨調整である。器壁の厚さは1cm前後で、胎土には多量の砂粒を含み、焼成は良好、赤褐色をなす。なお、肩下半部の坑底に接する部分に焼成後の穿孔がみられる。孔径は約2cm、穿孔後にその破片と白色粘土によって、再び孔が塞がれている。一般的な穿孔の状態と異なり注目される。上壺は下壺に比較してやや小さい。口径61cm、底部径12.5cm、器高76cm、胴部最大径58cmを測る。文様等は下壺と同様であるが、口縁部内側の上端にも刻目を施している。

第2号壺棺墓の壺棺は上下共に土圧によってひずみがある。下壺は平均口径38cm、底部径7.6cm、器高28.4cmの鉢形土器である。口縁部は逆L字形をなし、口縁部は見による刻目が施される。口縁直下に断面三角形の突帶一条がめぐる。口縁と突帶の間の器面には斜位の刷毛目調整、下半部は不明瞭である。器壁の厚さは0.8cm前後、胎土には多量の砂粒を含み、焼成は良いくらい。黄褐色をなす。上壺として使用されている土器は、頸部より上部を打ち欠いた壺形土器である。頸部に断面三角形の突帶一条をめぐらす。胴部は扁平な球形をなし、底部はやや上げ底になる。頸部の平均径は21.6cm、底部径16cm、現存器高33.2cm、胴部最大径は上位にあり、57.2cmを測る。全体にヘラ研磨調整を施す。胎土には砂粒を多量に含み、焼成は良くない。黄褐色をなす。

第3号壺棺は壺形土器を下壺として、蓋形土器を上壺としている。下壺は広口の壺形土器で、頸部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁部は緩やかに外反し錫形口縁をなす。頸部には低い断面三角形の突帶一条をめぐらす。胴部は球形をなすが、胴部最大径は上位にあり、胴下半部はややとり気味である。胴部最大径には断面三角形の突帶一条をめぐらす。底部はやや上げ底をなす。口縁部には刻目が施され、頸部外面には縦位の暗窓がみられる。胴部外面と口縁部内面は横方向のヘラ研磨調整である。口径27.9cm、底部径9.2cm、胴部最大径38.2cm、器高41.2cmを測る。胎土には砂粒を混入し、焼成は良好である。黄橙色をなす。蓋形土器はつまみ部径6.4cm、口縁部径35.2cm、器高12.8cmを測る。外面は上位に縦方向、口縁部が横方向の刷毛目調整、内面は天井部と口縁部近くが横方向の刷毛目調整で他是ナデ消される。胎土に砂粒を混入、焼成は良好、橙色をなす。

5、まとめ

錫製腕輪をめぐって



第8図 カルメル修道院内遺跡全体図 (1/500)

成果として最も重要なことは、第3号木棺墓から出土した錫製腕輪とその年代である。年代の決め手となるのは、第1号壺棺とその切り合い関係である。第1号壺棺墓に使用された壺棺は上・下壺共に金海式壺棺と呼ばれる前期末に比定される壺棺である。最近はこの壺棺に型式差があることが指摘され、時期的には前期末から一部は中期初頭に下るとされる。また、金海式壺棺と城ノ越式の壺棺がセットをなす例があることは、上記を首肯するものである。第1号壺棺墓の壺棺は口縁部の形態や刻目、胴部上半部の沈線文様は古式の金海式壺棺の特徴をよく残しているが、胴部にみられる壺形土器の名残である段が消え、完全に壺形土器の器形に変化していく、新しい段階の金海式壺棺に比定することができる。切り合い関係については第1号壺棺墓が1次調査、3号木棺墓が2次調査で確認したためにその切り合い関係については明らかにし難いところであったが、幸いにして1号壺棺墓の一段目掘り方が未掘であったので、遺構間の切り合い関係は明確に把握することができた。第1号壺棺墓の一段目掘り方は第3号、第4号木棺墓の一段目掘り方を切り、第1号壺棺墓の二段目掘り方は、第3号木棺墓の二段目掘り方の北東のコーナー部分の上部を切り破壊している。木蓋の目張りの粘土も失われている。よって、第3号木棺墓の年代は金海式壺棺の新段階、すなはち中期初頭より古い段階に構築されたもので、木棺墓間の切り合い関係では、3号木棺墓が最も古い段階に位置づけられ、前期後半まで遡る可能性もある。第3号木棺墓から出土した錫製腕輪の年代も必然的に前期後半から末の間に位置づけられ、日本列島の中では最も古い金属器の一つとなる。

錫製腕輪は1点が完全に接合・復元できたが、他の2点は接合・復元にやや難点があるものの3個ともほぼ同一の形態を有している。形態は全体に長楕円形をなすが、長辺の一辺はほぼ直線的で、他の一辺は中央部が張り出し、最も張り出した部分を境にして一辺はややそり気味で、他は丸みをもつ。断面形は内側が直線的で、外側は丸みをもっている。これらの腕輪は一見してゴホウラ等の貝輪に類似しているが、時期的にこれら錫製腕輪と比較できる南海産貝製腕輪は極めて少なく、また形態的にも異なるので貝輪との系譜は考え難い。錫製腕輪は比較的軽らかいために土圧による変化を受けやすかったとも考えられ、形態的問題についてはこれ以上言及できない。製作法については後述するように何らかの鋳型に溝を彫り込み流し込んだものを、鍛打、研磨等、加工を加え整形したものと考えられる。また、南海産貝製腕輪の小児の着用あるいは供獻は選別された小児の存在があり、その存在に大きな社会的意味があったとする指摘は、3号木棺墓に埋葬された錫製腕輪を着装した小児にも適用されるることは言うまでもあるまい。このことは板付遺跡の環濠北西部に隣接して作られた7基の小児用壺棺墓とも共通している。壺棺墓は壺形土器に鉢形土器で蓋をしたもので、このうちの4基に碧玉製管玉、小壺が副葬され、これらの墓地に埋葬された小児もまた選別された存在と考えられる。

カルメル修道院内遺跡の墓地形成

カルメル修道院内遺跡群は本報告の1・2次調査の後、第3～5次の発掘調査が実施され、ほぼ墓地の全容が明らかになっている。カルメル修道院内遺跡の立地する丘陵は金山（標高54.8m）から東側に向かって枝状に派生した低丘陵の最南端の低丘陵にある。この丘陵は全長400m、幅80m、頂部が3ヶ所にあり、最も西側の基部にある頂部の丘陵斜面がカルメル修道院内遺跡にある。墓地の範囲は東西100m、南北20mにわたっている。時期的に遡るのは第2次調査の木棺群である。6基確認されているが、前述したように前期墓地は南北20m、東西20～30mの範囲、埋葬遺構は60～90基が推測される。また、この墓地の東側に重複するように前期末から中期にかけての壺棺群が散発的に分布し、小さな谷を挟んだ東側の南斜面から鞍部にかけても土坑墓と壺棺からなる墓地が形成されている。この墓地も分布は散発的であるが、谷に面した斜面のグループは15m×9mの範囲に15基の埋葬遺構が集中しているが、そのうち壺棺墓は1基のみである。それより東の斜面の45m×10mの範囲には8基の埋葬遺構が散発的に分布しているが、壺棺墓は1基のみである。鞍部には7基の埋葬遺構が作られている。ここでは壺棺墓が優先していて5基がある。この地域の土坑墓の時期比定は切り合いで關係がなく明らかでないが、併存する壺棺墓と土坑墓の形態に中期例があり、この地域の埋葬遺構は中期に比定して大過なからう。ここで注意されるのが、壺棺墓の少なさである。また、鞍部の第3次調査第7号壺棺は通常は小児用の壺棺として利用されるものであるが、内部からは成人の頭骨のみが出土している。また、斜面に位置する第4次調査区第38号壺棺墓も同様に小児用の壺棺であるが、内部から石劍の切先が出土していて、石劍が削った部分が埋葬されていた可能性が強い。第22号土坑墓から碧玉製管玉1点が出土している。後期の墓地は丘陵の東側から先端にかけて形成されている。中期とは異なりかなりの密集度をもっている。南斜面から丘陵尾根にかけて存在する。丘陵頂部には断続的にL字形にめぐる溝が確認されていて、調査者は方形区画墓の可能性を示唆しているが、区画内の状態が不明である。土坑墓、石棺墓からなる墓地はこの頂部から南東に下る尾根から南斜面に分布する。分布から4～5群に分けることができる。墓地の中央部に立柱を立てていたとみられる柱穴があり、3基の土坑墓からガラス玉、碧玉製管玉が出土し、中央部の遺構に集中して朱が検出されている。

以上が墓地の概要である。特徴を挙げると、1、前期後半から後期にかけて継続して墓が作られている。2、壺棺墓が極めて少なく、主体を占めるのは木棺墓、土坑墓で後期に石棺墓が加わる。3、各時期、数基の土坑墓に腕輪・鉢形の装身具を副葬している。4、前・後期は相互に切りあうように埋葬遺構が集中するが、中期は散在的で、その数も少ない。5、後期の区画墓の可能性等が挙げられる。

神松寺丘陵の弥生時代集落の変遷

では、これらの墓地を形成した人々はどのような集落を形成し、その変遷はどのようなものであったであろうか。同一丘陵の東側の頂部（淨泉寺・神松寺）は共に発掘されその内容が判明している。少なくとも調査成果をみると弥生時代前期後半～後期までの集落に関係した遺構が一通り揃って確認されているので、カルメル修道院内遺跡の墓地を残した人々の集落は一応この丘陵を中心に行開したことが推測される。前期後半～中期前半の集落遺構として淨泉寺遺跡から計81基の貯蔵穴が検出されている。これらの貯蔵穴は分布から5群に分けることができる。住居址は確認されていないが、貯蔵穴の5基には食糧残渣である貝殻を多量に出土するものがあり、近くに住居址が存在したことを示唆している。貯蔵穴の群は住居址の数に対応するものであろうか。中期の住居址は引き続き淨泉寺遺跡に確認されている。住居址は3棟確認されている。前期に比較すると遺構がやや少ない。これに対応するように数の数も少なくなる。また、3・4次調査でみられるような頭骨のみや石劍の切先の存在等は争いがあたることを暗示している。この間の事情はさらに検討する必要があるが、この時期に分村が進展したことは周辺の遺跡数の増加から読み取ることができる。後期の集落は引き続き淨泉寺遺跡に見られるが、途中から神松寺遺跡への移動が考えられる。神松寺遺跡では神松寺御陵古墳および古墳に連なる南斜面を残すのみであったが、墳丘下および南斜面にかけて、複雑に重複して20棟の堅穴住居址が確認されている。住居址からは後期土器をはじめ、石包丁、砥石等の石器と鐵鏃、鐵鎌、鉄ののみ、袋状鉄灸3点の計6点の鉄器が出土している。

淨泉寺・神松寺の集落は宅地造成のために破壊され部分的に残存しているに過ぎないために具体的に検討できないが、中期の集落がやや貧弱になることは墓地と共通した現象として把握することができる。消極的であるが墓地と集落に対応関係がみられることは注目される。

弥生時代における樋井川流域の開発

次に樋井川流域における弥生時代の開発を見てみよう。弥生時代遺跡の分布は第1図に示した。

弥生時代遺跡の展開を見る前に樋井川流域の地形を概観してみよう。現在は埋め立てにより海岸部が大きく北に延びているが、元来は河口付近には砂丘が発達していた。砂丘は3列存在し、砂丘の間に低地が存在する。砂丘は内陸部からA・B・C列となり、C列には元寇望塁が構築され鯨庫時代には砂丘の形成があったことがわかる。B列には藤崎・西新遺跡等の弥生時代早・中期の遺跡が形成され、B・C列の砂丘間低地には後期の遺跡が形成されている。A列砂丘の形成時期は明らかでないが、最近の調査でA・B列間低地から绳文時代前期の遺物が出土している。砂丘の後背地には潟湖が存在し、大濠はその名残である。弥生時代の海岸線は標高5m前後と考えられ、それからすると潟湖は大濠の西側に大きく括り、島嶼の大部分は潟湖に含まれ、樋井川はこの潟湖に流れ込んでいたことになる。樋井川流域には狭小な沖積地が存在することは前述した通りである。

刻目突帯文土器に代表される、弥生時代初期の遺跡は樋井川流域では上流域の柏原遺跡群の中に見出すことができるが、これらの遺跡は前時代の生業を引き継いだ遺跡と考えられ小規模である。本格的な水稻農耕を携えた遺跡ではない。福岡平原や早良平野においては分布図でも明らかなように刻目突帯文土器單純期に平野の奥部まで展開するに比べ、樋井川流域では本格的な水稻農耕を携えた弥生時代の遺跡は前期中頃から後半にかけて出現する。この時期は北部九州から東の地域に進出する小河川流域のいわゆる谷水田の開発が遅れることを良く示している。樋井川流域で最初に出現する弥生遺跡は下流域の田島A遺跡、中流域の淨泉寺遺跡、樋井川A遺跡（上長尾遺跡）、上流域の樋井川B遺跡である。いずれも遺跡の南あるいは東側にかなりの広さの冲積地が拡がる。遺跡間はそれぞれ1km、0.7km、1km離れていて、樋井川流域の開発はかなり計画的に行われ、統率者がないことは先述した小児に着装された錫製腕輪が暗示している。遺跡は貯蔵穴を主体としているが、住居址等は削平され遺存しない。もちろん生産地である水田の調査はなく、水田遺構がどのようなものであったかは確定できないが、谷水田の開発とい

うことを考えると湧水が多く、杭や矢板が多用された水田であることは容易に想像できる。これを裏付けるように樋井川の上流域に存在する柏原遺跡群の約20haの発掘区から点々と弥生時代の磨製石斧の破片が出土している。これらには数片の弥生時代前期の土器が伴う例もある。磨製石斧には大型蛤刃石斧・扁平片刃石斧・柱状片刃石斧等があり、いずれも破損し、この場所で使用されたことが想定できる。

中期以前の遺跡はこれら前期の遺跡を核として展開し、中期には遺跡数が拡大している。中期の代表的な遺跡としてはほぼ全城が調査された宝台遺跡についてみてみよう。樋井川B遺跡とは駒ヶ原川を挟んだ西側丘陵上に位置している。樋井川B遺跡から分村した遺跡とみられる。遺跡は三ヶ所の丘陵尾根上にそれぞれ5軒前後を単位とする集落が営まれ、それらの集落の共同墓地である斎墓地も存在する。同様に前述した神寺松の丘陵上に展開する遺跡群は浄泉寺遺跡を核として展開するが、中期になると南側の片川江の上流の片江寺遺跡や一本松川上流の丸尾台遺跡に斎墓地が形成されている。これらの斎墓地に対応する集落の確認はないが中期に拡大していることは疑いない。丸尾台遺跡は宝台遺跡に隣接しているが、面する生産地（沖積地）の違いから集團も異なると考えられる。丸尾台遺跡は現存しないが、50基前後の斎墓地があったとみられ、その内の1基から日光鏡3面、鉄小刀1振り、他の斎墓の棺外副葬として素環頭太刀1振りが出土している。出土時に撮られた写真にはこれら斎墓の上に埴輪が確認できる。規模等詳細については明らかでないが、有力者を複数埋葬した埴輪が存在していたことは疑いない。この埴輪は樋井川流域の地域的・政治的まとまりの最初の具現化した姿とみることができよう。後期には御子神社（樋井川A遺跡）の一箱式石棺から銅鏡一面が出土したという聞き書きやカルメル修道院内遺跡の方形区画墓の可能性ある遺構は不確実性が伴うが、丸尾台遺跡に後続する遺跡と考えられる（山崎純男）。

参考文献

山崎純男1976「福岡市カルメル修道院内遺跡調査報告」『京ノ原遺跡—福岡市西区田島所在の古墳と経塚の調査—』

段谷地所株式会社

山崎純男編1978「福岡市神寺松遺跡—弥生時代住居址と前方後円墳の調査—」福岡市埋蔵文化財調査報告書第45集

村岡和雄・松村道博編1974「浄泉寺遺跡—福岡市西区片江所在遺跡調査報告—」東洋開発株式会社

山崎純男編1992「カルメル修道院内遺跡—カルメル修道院内遺跡第3次調査の報告—」福岡市埋蔵文化財調査報告書第299集

塙屋勝利・田中寿夫編1983「福岡市城南区浄泉寺遺跡—遺構編—」福岡市埋蔵文化財調査報告書第99集

中村忠太郎編1996「カルメル修道院内遺跡—カルメル修道院内遺跡第4次調査—」福岡市埋蔵文化財調査報告書第469集

加藤良彦編1997「カルメル修道院内遺跡4—カルメル修道院内遺跡第5次調査—」福岡市埋蔵文化財調査報告書第504集

加藤良彦編2001「樋井川A遺跡—樋井川A遺跡第1次調査報告—」福岡市埋蔵文化財調査報告書第682集

常松幹雄編2004「樋井川B—樋井川B遺跡群第1次調査報告—」福岡市埋蔵文化財調査報告書第819集

高倉洋洋編1970「宝台遺跡—福岡上長尾所在弥生時代集落遺跡—」日本住宅公团

力武草治2010「福岡市城南区田島B1」福岡市埋蔵文化財調査報告書第1078集

カルメル修道院内遺跡出土鉄の保存科学的調査について

比佐陽一郎（文化財整備課）

1.はじめに

カルメル修道院内遺跡出土の金属製鉄3点は、弥生時代前期後半の斎墓から出土した木棺墓から出土した資料として、「最古級の金属器」とされているほか、何よりも「錫製」という材質において、類例の限られる貴重な資料である。ここでは、その材質調査について記すが、それだけであれば数行で事足りる内容である。しかし、本資料についてはこれまで時代や材質的な特徴から注目され、様々な部分で取り上げられて来た経緯がある。また、発掘調査の進捗とともに分析装置が各地に普及し、弥生～古墳時代の錫製品の類例も増加してきている。そこで、カルメル修道院内遺跡出土の錫製鉄を中心に、過去の調査研究や類例について、情報整理を行うのである。

2.分析と保存処理

まず、主題である本資料の材質調査について触れておきたい。今回掲載するデータは、2002年に筆者が行った分析調査のもので、過去、何度かその概要については公表している（比佐2003・2004）。調査は福岡市埋蔵文化財センターにて設置されている微小領域用エネルギー分散型蛍光X線分析装置（EDAX社製：Eagle-μ prove）を用い、非破壊による表面の定性分析を行った。装置の仕様は次のとおりである。対陰極：モリブデン（Mo）／検出器：半導体検出器／印加電圧・電流：40kV・140~240 μA／測定空気気：真空／測定範囲0.3mmφ／測定時間300秒

分析は各資料について2~3箇所を任意に選択して行った。得られた結果は全ての分析箇所で概ね同じものであった。代表的な分析結果を図-1に示す。検出された元素で中心となるのは錫であり、他に鉛・鉄といった元素のピークが明瞭に認められる。この内、鉄は埋土に豊富に含まれる元素でもあり、製品に本来含まれていたのか、埋土からの影響なのかは今回の調査では明らかにし得ない。銅についても微少なピークが観測されるが、Kα線のみでβ線は認められない程度のピークであり、これら元素の存在を明示するものではない。結論として、本資料は錫を中心とした鉛を含む製品といえる。

錫は銀を星する金属で、耐食性に優れ人体にも無害であることから鉄にメッキされた（ブリキ）、単体で食器などに用いられる。密度は7.298g/cm³、融点は2319°Cで、鉛に次いで軟らかく延展性が良い（永田1999）。また錫にアンチモンや鉛を加えた合金はピューター（pewter）と呼ばれ、耐酸性、耐食性を有することから食器や装饰品に用いられているとされる（長崎1999）。酸化すると灰色や黒色に変色し、ブロック状に崩壊する。カルメル修道院内遺跡出土の資料も、製作された当時は美しい銀色に輝いていたと思われるが、現況では個体によって状態は異なるものの、酸化の症状が現れている。出土後、資料はアクリル樹脂（パラロイドB-72）の塗布により強化され、破断した部分はセルロース系接着剤（セメダインC）で接合されている。

今回、新たに透過X線による調査も行ってみたが、破断部分が多く判断しにくいものの明確な当初からの開口部は認められないようである。錫と鉛の合金という材質とも合わせて考えると、何らかの鋳型に溝を彫り込み流し込んだものを、鍛打、研磨等、整形した加工法が想定される。

3. 研究（調査）史

本資料は今回記した分析調査以前から、既に錫製品と認識されていたが、その根拠は今ひとつ明確ではなかった。ここでは、保存科学の分野を中心に、この錫銅に関する研究史を概観し、錫銅とされるに至った経緯を整理しておきたい。

1974年の出土後、1976年に記された最初の調査報告書や（山崎1976）、1977年に福岡市立歴史資料館で開かれた特別展「福岡平野の歴史、緊急発掘された遺跡と遺物」図録の解説では、銅銅とされている（福岡市立歴史資料館1997）。今でこそ簡易に含有元素を知ることができる蛍光X線分析装置が各地の自治体レベルにまで普及しているが、当時は奈良や東京の国立文化財研究所など、ごく限られた施設にしか設置されておらず、金属製造物の分析事例も極めて限られていた状況下では致し方ないであろう。

1989年、宮内庁正倉院事務所の成瀬正氏は、正倉院御物の裝飾に錫が用いられていることを明らかにするとともに、出土品の錫についても整理している（成瀬1989）。これによって遺跡から出土する錫製品の存在と、その様態が、特に各地の保存科学担当者に広く知られた点で、画期的な内容であった。福岡では当時、福岡市埋蔵文化財センターに勤務していた本田光子氏（現九州国立博物館）によって、市内出土金属器の材質調査が試みられたが、ここでカルメル修道院出土の錫は対象とされていないものの、古墳時代の錫製耳環の分析が行われ（本田ほか1990）、この耳環と腐蝕の様相が共通するカルメルの錫が、錫製である可能性が浮上したと思われる。このことは、1992年に刊行されたカルメル修道院内遺跡3次調査の報告書（山崎（龍）1992）で、過去の調査を振り返る中で、「錫銅」として当該資料が紹介されていることからも窺える。

一方で、1970年代後半から馬渕久夫・平尾良光両氏によって始められた、弥生時代の青銅器を中心とした鉛同位対比分析では、カルメル修道院の錫3点と、後に類似として触れる那珂川町宗石遺跡出土の錫2点も調査対象とされた。ただし、記載は「銅銅」となっており、この時点では材質の確認は行われなかつたようである。鉛同位対比の分析結果は、特に弥生鉛座である福岡の事例を集めて報告されたが（馬渕ほか1991）、前者は馬渕氏らが提唱するA～Dの4つの領域どれにも当てはまらない特異な数値を示していた。文中でこれらは朝鮮半島南部の鉛、初期「青銅」であり多錫鏡や細形銅鏡と異なる鉱床の鉛が使われたと解釈されている。後者の宗石例は華北産鉛とされている。

その後、古代の錫製品に関しては、永嶋正春氏が古墳時代の鉄地に錫を巻いた耳環等の存在を明らかにしたり（永嶋1991）、小鶴芳孝氏による北日本を中心とした錫製品の考古学的な論考（小嶋1996）などが発表されるなど広がりを見せた。

カルメル修道院の錫では、1999年に出版された一般向けの新書「正倉院学ノート」で、成瀬氏が再度、御物に用いられた錫を紹介する部分を取り上げているが、ここでは「小児用壺柄から出土した弥生前期の小児用錫が錫であることも明らかにすることができる」と書かれており（成瀬1999）、詳細は不明ながら1989年以降、1999年までのどの時点から分析が行われたようである。

この様に、本資料は1990年過ぎから錫銅と認識されたものの、その出典が不明確なままであった。それもあり、筆者は、1999年に福岡市埋蔵文化財センターにも蛍光X線分析装置が導入された後の2002年、本資料を含め、弥生～古墳時代の錫、鉛製装身具の分析調査を行い、鉛を含む錫製品であることを公表した（比佐2003・2004）。

4.まとめ

弥生時代に遡る錫製品は、カルメル修道院内遺跡出土の錫3点の他、福岡県那珂川町宗石遺跡第4地点40号壺柄でも、青銅とは腐蝕の様子が異なる錫4点が出土している（井上他2002）。報告書では円環状に復元され、記載には青

銅製とされているが、腐蝕の状況から、やはり錫製の可能性が考えられる。ただし材質の確認は行われていない。出土壺柄は弥生中期前半に比定される。

熊本県下扇遺跡では、弥生時代後期中葉の集落遺跡から出土した釦状金属製品が、蛍光X線分析によって錫と鉛の合金、ピューターとされている（村上ほか2004）。しかし、その他の元素として、銅や微量のヒ素、アンチモンなどが示されており、同じ錫～鉛合金でもカルメル修道院内の事例とは定性的に異なる結果となっている。

また佐賀県吉野ヶ里遺跡では、土壤から出土した不明金属塊が分析の結果、僅かに銅を含む高純度の錫塊であることが判明した（佐賀県教育委員会1994）。付近も含め遺跡内からは多くの青銅器の鋳型や鉛錠、炉壁と考えられる焼土塊などが出土しているが、この錫塊が青銅器の鋳造に関わるものか否かは不明である。

錫ではないが、佐賀県久里大牟田遺跡や福岡県八女市野田遺跡では、弥生時代のものと考えられる鉛製の矛が発見されている（平尾1999）。

この様に、北部九州を中心とした九州島では、錫素材と見られるものや、本來、青銅で作られるべき金属製品の幾つかが、錫や鉛といった銀色で融点の低い金属に置き換えられている事例が散見される。弥生時代の早い段階から青銅の素材となる錫や鉛が、単独で（一部混ざりながら）流通していた状況は、弥生時代後期にピークを迎える北部九州の青銅器生産の中で、青銅製品のリサイクルだけではなく、素材から取り扱う作業が行われた可能性を示唆するものといえよう。

また、その製作目的、用途であるが、加工の点では融点が低く作業が容易でありながら、青銅製品に比べると圧倒的少数派であり、青銅の代替品とするには事例が少なすぎる。一方で、これを希少という目で見ても、特異な材質の金属製品が青銅よりも上位に扱われていた状況は見てこない。色調こそ青銅と異なりながらも金属光沢を存分に發揮するものの、強度の点で青銅にはるかに及ばないことも、主流になり得なかつた要因かもしれない。他に、青銅器製作の際の「様（ためし）」、あるいは試作品などと考えられなくもないが、カルメル修道院内や宗石のように墓に納められている事例からは、そのような用途は導きにくい。いずれにせよ、詳細な検討にはもう少し事例の蓄積を待ちたい。

（参考文献）

- 井上裕弘・佐々木隆彦・新原正典・佐藤昭則（編）2002『宗石遺跡群 福岡県筑紫郡那珂川町大字今光・中原・片桐所在遺跡群の調査』那珂川町文化財調査報告書第58集 那珂川町教育委員会
- 小嶋芳孝1996「蝦夷とユーラシア大陸の交流」「古代王権と交流」1 名著出版
- 佐賀県教育委員会1994「吉野ヶ里遺跡」
- 長崎誠三1999「ピューター〔pewter〕」「金属の百科事典」丸善株式会社
- 水嶋正春1991「古墳時代における金属錫の利用」「歴博」第49号 国立歴史民俗博物館
- 永田和1999「スズ〔tin〕」「金属の百科事典」丸善株式会社
- 成瀬正和1989「わが国上代の工芸材料としての錫」「正倉院年報」第11号 宮内庁正倉院事務所
- 成瀬正和1999「木画と錫の利用」「正倉院学ノート」朝日新聞社
- 比佐陽一郎2003「福岡市内出土の錫製品について」「福岡市埋蔵文化財センター年報」第21号 福岡市埋蔵文化財センター
- 比佐陽一郎2004「錫、錫製耳環に関する基礎的検討－福岡市内の事例を中心として－」「古文化談叢」第50集下 九州古文化研究会
- 平尾良光(編)1999「古代青銅器の流通と鋳造」鶴山堂
- 本田光子・井上光・坂田浩1990「金印その他の蛍光X線分析」「福岡市立歴史資料館研究報告」第14集 福岡市立歴史資料館

馬渢久夫・平尾良光1991「福岡県出土青銅器の鉛同位対比」『考古学雑誌』第75巻第4号 日本文考古学会

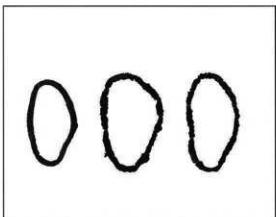
村上隆・宮崎敬士2004「熊本県下原遺跡から出土した「銅鉢」の材質について」『文化財保存修復学会第26回大会研究発表要旨集』文化財保存修復学会

山崎純男1976「福岡市カルメル修道院内遺跡調査報告」「京ノ隈遺跡」－福岡市西区田島所在の古墳と京塚の調査－谷地所開発株式会社

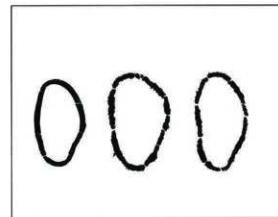
福岡市立歴史資料館1977「カルメル修道院内遺跡」「福岡平野の歴史・緊急発掘された遺跡と遺物」

山崎龍雄(編)1992「カルメル修道院内遺跡」－カルメル修道院内遺跡第3次調査の報告－福岡市埋蔵文化財調査報告書第299集

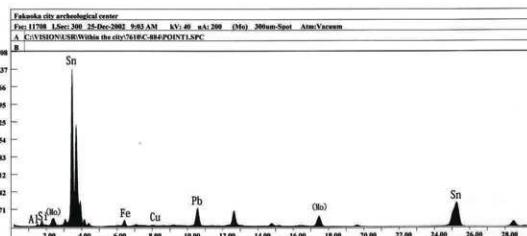
福岡市教育委員会



写真ー1. カルメル修道院内遺跡出土銅鏡の外観



写真ー2. 透過X線像



図ー1. 銅鏡の蛍光X線分析結果
※モリブデン(Mo)は装置の管球に起因する元素

VII 平成21年度福岡市新指定文化財

平成21年度の福岡市新指定文化財は、平成22年2月8日開催の福岡市文化財保護審議会において、10件の文化財について答申を得、平成22年3月18日の福岡市公報により告示された。

【指定文化財の概要】

指定区分	種 別	指定名称	員数	所在地	所有者
有形文化財	建 造 物	白鬚神社本殿 附 棟札 11枚	1棟	福岡市西区能古 719番地	宗教法人 白鬚神社 代表役員 翁池 友久
	建 造 物	白鬚神社拝殿	1棟	福岡市西区能古 719番地	宗教法人 白鬚神社 代表役員 翁池 友久
	建 造 物	住吉神社唐門	1棟	福岡市博多区住吉 三丁目1番51号	宗教法人 住吉神社 代表役員 横田 豊
	絵 画	駿岳元甫頭相	1幅	福岡市博多区御供所町14番4号	宗教法人 乳峰寺 代表役員 平分 宗賢
	典 藉	江月宗玩筆墨蹟之寫 (追加指定)	47丁	福岡市博多区千代 四丁目7番79号	宗教法人 崇福寺 代表役員 岩月 海洞
	古 文 書	承天寺の公勅 並びに公勅関係史料	84点	福岡市博多区博多駅前 一丁目29番号	宗教法人 承天寺 代表役員 神保 至雲
	考古資料	雜前原遺跡出土品 (第15次調査)	15点	福岡市博多区井相田 二丁目1番94号	福岡市
民俗文化財	考古資料	木製組合せ式案 (雀居遺跡第4次調査出土)	1件	福岡市博多区井相田 二丁目1番94号	福岡市
	繪 馬	今津十一日まつり		福岡市西区今津	今津十一日まつり保存会 代表 中村 陣暢
記念物	史 跡	勤農社跡 附 林達里墓地 1件	1件	福岡市早良区重留 四丁目338番1号 353番1	林 道生

1. 白鬚(しらひげ)神社本殿・附 棟札11枚 (有形文化財／建造物)

2. 白鬚神社拝殿 (有形文化財／建造物)

白鬚神社は博多湾に浮かぶ能古島の南端部にあり、創建の時期は不明であるが記録などを見るとかなり古く遡る可能性がある。

本殿は木造の流造で、屋根は銅板で葺く。棟札には、享保12(1727)年に再建されたことが記されている。市内で近世に遡る流造の神社本殿としては、名島神社(東区:文政13(1830)年)、鳥劍八幡(中央区:文化14(1817)年)、飯盛神社(西区:天文6(1786)年・市指定文化財)などがあり、白鬚神社本殿はこの中でも最も古に位置づけることができる。建築様式は、棟札に記される年代の特徴をよく示しており、蓋板の枠内など建物各所に彫られた多くの刻印には、往時の氏子らの願いを読み取ることができる。更に享保12年から平成3年までの計11枚の建立・修理棟札が遺っている点も貴重である。経歴が確かで、島民によって大切に守られてきた神社の社歴として重要な意味である。拝殿は、現在絵馬殿としても使われ、本殿との間は幣殿で接続されている。木造の切妻造で屋根は桟瓦葺である。建築年代は明らかでないが、部材に彫られた文様の型式

などから寛政～文政期（18世紀末から19世紀前期）の建築と考えられる。垂木より上は昭和58（1983）年の屋根葺替工事で取り替えられたものである。玄界灘に面した地域に代表的な切妻造妻入りの型式で、改造は少なく当初からの素朴な状態を保つ点で価値が高い建物として市文化財に指定された。



白旗神社拝殿（手前）と本殿（奥）



本殿（西から）



拝殿正面



拝殿内に飾られた金馬

3. 住吉神社唐門（有形文化財／建造物）

住吉神社は福岡市博多区住吉に所在する式内社で、筑前国の一宮でもある。本殿は元和9（1623）年、黒田長政が寄進、建立したもので、国の重要文化財に指定されている。

本年度指定対象の唐門は、本殿の南東約20mの所にある。聞き取りによれば、昭和60（1985）年まで現在地より南西100m程の南門付近にあったという。木造の平唐門と呼ばれる型式で、屋根は檜皮で葺く。細部の様式から見ると、18世紀末から19世紀初頭の建立と考えることができる。『筑前名所図絵』（奥村玉蘭：文政4〔1821〕年）や『筑前國風土記附錄』（加藤一純・薦取周成：寛政5～11〔1793～1799〕年）に描かれた境内絵図には、社殿前の中門に平唐門が描かれており、年代的な観点などからは、この唐門である可能性を考えられる。市内の寺社には、近世に遡る門造構が20例ほど知られているが、住吉神社の唐門は、市内で最初の姿をとどめる唯一の平唐門であり、近世社寺建築としての価値は高く貴重な建造物と評価出来る。



唐門（正面）

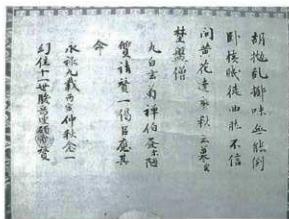


妻部分

4. 駿岳元甫（しゅんがくげんぽ）頂相

（有形文化財／絵画）

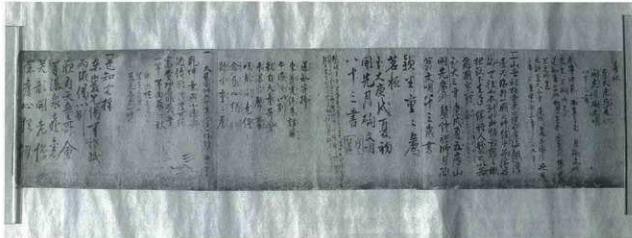
頂相とは、禅僧の肖像画のこと。禅宗では師から師の肖像画と法語とを与えることで、人の師たる資格ができたという説明になるということで、中国の北宋時代から盛んに描かれ、その習俗が鎌倉時代に日本に伝わった。この頂相は、博多でも有名な禅寺である承天寺の百世、駿岳元甫を描いている。元甫は筑前に生まれ京都の東福寺や丹波の高源寺で修行を重ね、永正12（1515）年に承天寺の住持職に就いた。元甫が亡くなる9年前の永禄9（1566）年に、弟子の九白玄菊が画かせた寿像（生きている間に画かれた肖像）である。様々な記録を紐解くと、駿岳元甫や九白玄菊が、当時、京都の禅寺や禅僧と様々に交流していたことが分かる。本像は現在承天寺の塔頭である乳峰寺に保管されている。乳峰寺は元々那珂郡上白水村（現在の春日市）に開かれた承天寺の末寺であるが、寛永年間に元甫が開いた塔頭の天得院と合わせて再興された。本頂相は承天寺一山に伝わる頂相の中でも最も古いものであるとともに、当時の禅寺、禅僧の往来や中世博多の姿をも窺わせる貴重な絵画といえる。



5. 江月宗玩筆墨蹟之寫（こうげつそうがんひつばくせきのうつし）（有形文化財／典籍）

『墨蹟之寫』は崇福寺中興の祖、江月宗玩が、慶長16（1611）年から寛永20（1643）年までの33年間に渡って鑑定し書き写した墨蹟の記録である。墨蹟とは本来は紙や絹に墨で書かれた文字をいうが、我が国では特にすぐれた禅筆跡を指す言葉として慣用されている。宗玩によって鑑定された墨蹟は、中国の宋や元のものをはじめ、日本国内では大徳寺、五山諸寺所有の什宝、大名物から町民の秘蔵品まで幅広く、墨蹟を写すとともに持参者、所蔵者、表具の種類や法量、真偽、伝来まで事細かに記録している。その数は3,500点に及び、現在では散逸している墨蹟の記録も含んでいる。これらは禅宗史、茶道史、美術史など中世文化史を

研究する上で欠かせない資料といえる。福岡市では平成9（1997）年に49冊を指定しているが、今回は当時把握されていなかった47丁を追加で指定することとしたものである。



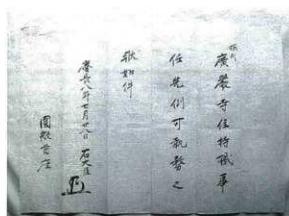
断簡（墨跡の断片を集めしたもの）

6. 承天寺の公帖（こうじょうよ）並びに公帖関係史料（有形文化財／古文書）

公帖とは幕府の管掌下にある柳宗寺院（=官寺＝五山・十刹・諸山）の住持を任命する辞令書のことを行う。今回指定となったのは臨済宗東福寺派の承天寺が所蔵する公帖とその関係資料84点である。永正12（1515）年の足利義稙の公帖を初見とし、天保6（1835）年、徳川家斉まで歴代住持12代分が遺る。初見の駿岳元甫の公帖には、筑前守護大内義興の添え状が附属し、徳川幕府になってからは歴代徳川将軍の公帖と歴代福岡藩主の添え状がセットになって残っている。他にも筑前守護大内義長の寺領安堵状、小早川秀秋寺領寄進状、豊臣秀吉朱印状（朝鮮出兵に関する書状等）、黒田如水書状など、寺領に関する安堵状、寄進状を中心に承天寺、ひいては福岡市の歴史を物語る貴重な文書が多く含まれている。



椎大納言足利義稙公帖（駿岳元甫宛）
永正十二（1515）年

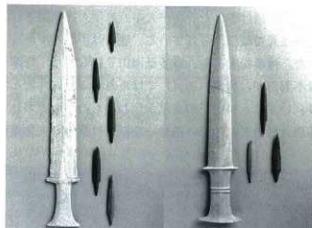


徳川家康公帖（鉄舟圓融宛）
慶長八（1603）年

7. 雜削隈（ざっしょのくま）遺跡出土品（第15次調査）（有形文化財／考古資料）

雑削隈遺跡は、福岡市の東南部、博多区と春日市、大野城市が境を接する場所にある。共同住宅建設に伴って行われた15次調査では、弥生時代早期の木棺墓と見られる墳墓4基から、弥生土器の壺4点と、有柄式磨製石剣3本、磨製石鎌4本の計15点が出土した。完形の土器2点は、風化によって傷みが激しかったものを、樹脂で強化しながら修復した。夜臼式という弥生時代の初め頃の型式である。この時期は国立歴史民俗博物館などによる放射性炭素の年代測定によって、実年代がこれまでの認識から大きく振りつりがあり、学会でも大きな論議を呼んでいる。石器類はいずれも粘板岩製と見られる。これらは朝鮮半島との間わりが強い遺物であり、土器とともに今後の実年代の議論に一石を投じる可能性を有している。福岡県内ではこれまで

にも、糸島市新町遺跡、同じく石崎曲り田遺跡、福津市今川遺跡、宗像市田久松ヶ浦遺跡、同じく久原遺跡などで磨製石剣や石鎌を副葬した同時期の墳墓が発見されている。しかし、これほどまとまった数が、良好な遺存状況で出土した事例は県内の類例を見ても極めて限られ、弥生時代の始まりを考える上で重要な資料であるとともに、美術的な観点からも価値が高い資料といえる。



有柄式磨製石剣と磨製石鎌



3号木棺墓出土の土器

8. 木製組合せ式案（雀居（ささい）遺跡第4次調査出土）（有形文化財／考古資料）

雀居遺跡は福岡空港の西側に広がる弥生時代を中心とする遺跡である。今回の指定物件である木製組合せ式案は、平成4（1992）年度に行われた4次調査で出土した。案とは机の別名で、この資料はスギの板を加工した部材を組合せている。遺跡内を流れる溝の上層から、部材の一部を欠きながらも一式が、潰れた状態で検出された。その後、福岡市埋蔵文化財センターでの保存処理を経て復元されている。出土した刷位の遺物は弥生後期後半のものである。この種の資料は、それまでも北部九州の遺跡で発見例があったが、いずれも部材だけの発見で、長く「不明木製品」とされてきた。雀居遺跡での発見により、初めて机であることが判明した。現在までに福岡をはじめとして佐賀、長崎、大分といった北部九州の弥生遺跡約20箇所で類例が見られるが、これらは脚の木取りや寸法などに若干の差異はあるものの、意匠や組合せ方に高い共通性が認められる。この型式の案が出土する遺跡は、その多くが地域の拠点集落と目されるもので、用途や使用状況は明確ではないものの、北部九州において共通の文化が営まれたことを示す資料といえる。本資料の属する弥生時代から古墳時代への移行期という流動的な社会状況の中においては、文化圈を考える上で非常に重要な資料である。



組合せ式案の出土状況



復元し組み立てた状態

9. 今津十一日まつり（民俗文化財／無形文化財）

今津十一日まつりは、福岡市西区今津の登志宮を氏神とする上町・東町・寺小路の岡三町と四所宮を氏神とする本町が行う年頭の祭りである。現在は1月の成人の日に行われているが、かつては2月11日や1月11日に行われていた。各町内ごとに、きらびやかな山車と椎の枝を立てた神輿をつくり、町内を練り歩き、人々を訪れる無札講の祭りである。かつて貿易港であった今津に荷揚げされた貨物が大宰府の役人に検閲された後、山車に載せ今津中を引き回し披露したのが始まりと、地元では伝えられている。以前は手作りであった山車を飾る人形は、戦後は博多人形前に顧むようになった。博多松雛子や、博多祇園山笠にも似た「今津十一日まつり」がどの様にして成立したのか、その詳細は不明だが、唐泊（西区）では正月十三日に「どんたく」があり、宮浦（西区）では同じ頃恵比須祭りがあり、いずれも松雛子の遺風が伝わるものとも言われている。地域において人々の繋がりが希薄になりつつある現代社会で、地元に根付いた祭りは貴重な文化遺産となっている。



10. 勤農社（かんのうしゃ）跡・附 林遠里（えんり）墓地（記念物／史跡）

勤農社は、明治16（1883）年（明治20年説もある）に林遠里が開いた農業教師育成のための私塾である。林遠里は、勤農社および実験水田において実業教師の育成を行い、明治18（1885）年から明治26（1893）年にかけて37道府県に464名の教師を派遣し、福岡の農業技術を広めた人物として知られている。「福岡農法」はそれまでの近世農法とは一線を画した画期的なもので、無床笠を用いた畜力による深耕や乾田を特徴とし、高い収量を誇っていた。勤農社は福岡農法の全国的な普及拠点として大きな役割を果たした。しかし、その後、明治政府による農業政策の転換によって勤農社は衰退し、遠里も明治39（1906）年に亡くなった。現在、勤農社の跡地は遠里の子孫によって受け継がれている。当時の施設は残っていないが、敷地の石垣や門柱が往時を偲ばせる。明治時代、全国的な農業革命に寄与した勤農社跡は福岡市の歴史にとって重要であり、史跡として指定するに相応しい。また、勤農社跡に隣接して建てられている林遠里の墓地も史跡の附指定とされた。



勤農社跡の門柱



当時の要を残す石垣

報告書抄録

上りが名 書名	ふくおかしまいぞうぶみかずいねんぽう 福岡市埋蔵文化財年報 平成21（2009）年度版				
副書名	24				
巻数	次				
シリーズ名	宮井善朗				
シリーズ番号	福岡市教育委員会				
編著者名	福岡市中央区天神1丁目8-1				
編集機関	平成22年11月30日				
所在地	平成22年11月30日				
発行年月日					
上りが名 所取遺跡名	上りが名 所取遺跡名	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 座標	調査期間
はかといやさくじ 博多遺跡群（第189次）	はかといやさくじ 博多以南泉町524番	40132	121	33-35-38 130-24-38	2009.5.7～ 2009.5.15 24.0
かのわるしよどりうしないやさ カルメル修道院内遺跡 (第1,2次)	かのわるしよどりうしないやさ 城南区神寺3丁目	40136	257	33-33-14 130-22-15	1974.19-19 1976.7.1-15 107.2
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
博多遺跡群	集落	古代/中世	柱穴+井戸	土師器+須恵器+陶磁器	港湾城の範囲か？
カルメル修道院内遺跡	墓地	弥生時代	堀留墓+木棺墓	弥生土器+銅鏡	日本最古段階の金属器出土

福岡市埋蔵文化財年報
Vol.24
— 平成21(2009)年度版 —

発行日 平成22年11月30日

編集・発行 福岡市教育委員会文化財部
埋蔵文化財第1課
福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 石橋印刷株式会社
福岡市博多区東比恵3丁目21番10号
TEL(092)411-0544

THE ANNUAL REPORT
OF
THE BURIED CULTURAL RELICS OF FUKUOKA CITY
VOLUME 24



THE BOARDS OF EDUCATION OF FUKUOKA CITY
NOVEMBER 2010
JAPAN